

2006(平成 18)年度 在宅医療助成 勇美記念財団

報告書

子世代から見た後期高齢者の老いと死

研究者 湯沢 八江

研究協力者 川上憂子 林美由紀 大浦ゆうこ 江口裕美子 山本君子 門田昌子

研究者所属機関・職名 国際医療福祉大学院 教授

所属機関所在地 〒107-0062 東京都港区南青山 1-3-3 青山一丁目タワー

提出年月日 平成 19 年 8 月 20 日

目次

研究の背景	3
研究目的	4
研究方法	4
結果	
1. 事前調査の結果	5
2. 調査結果の概要	6
3. 調査結果 親が存命であったケースの概要	7
4. 調査結果 親が死亡していたケースの概要	10
考察	
1. 調査対象高齢者の特徴	23
2. 存命のケースから見てきたこと	24
3. 死までの様子	25
4. 今回の研究からみてきたこと	26
参考文献一覧	29
資料	
資料 1 (事前調査インタビュー記録)	31
資料 2 (存命の高齢者と子供との話題 - 前回会ったときどんな話をしましたか?)	45
資料 3 (自宅で死亡したケースの状況)	55
資料 4 (死亡時の様子)	63

研究の背景

2006年度診療報酬改定は、療養病棟に入院中の患者に対する医療のあり方を見直し、社会的入院の解消、病床数の削減を図るものである。この改定のもと、病院においては治療によって改善を見込めない終末期の患者に対する対応が困難を極めるようになった。それに対して、在宅医療においては、平成18年度診療報酬改定において、在宅療養支援診療所の新制度設立、訪問看護療養費のターミナルケア加算、重症者管理加算、在宅移行管理加算の引き上げなどが認められた。このことは、後期高齢者の病気療養、終末期医療の場を病院から在宅へ移行促進しようとする現れであり、今後ますます後期高齢者の在宅における健康管理、看取りの推進が重要な課題となる(1999 宮原、2000 入江、2003 杉本)。

現在は病院内で死亡する事例が増加し、自宅で自然に死を迎える体験がなくなってきた。そこから死は極めて非日常なこととなり、死に関しては声を潜め、多くを語らないことが常識のようになってきた。

そのため、全ての人に等しく訪れる死に関して、必要以上の恐怖感があるように思える。末期医療に関する研究は多いが(1998 高木、1999 近藤、2003 中村)、どのように死が訪れているのか、日常生活の中で迎えている死の実態を知っているとは言い難い現状がある。

研究者は臨床にて経験した後期高齢者の終末期に際して、死に直面して狼狽し病人を入院させた家族が、結果的には望まない強引な延命処置を受けることになってしまった事例に幾つか遭遇した。自らの死に対してその迎え方の意向を表明できないまま行われる延命処置が適切であるのか、疑問を持つケースの報告はいくつかある(2006 渡辺)。また、在宅で十分健康管理ができる状態であるにもかかわらず入院したことによって、認知症の悪化などの弊害が生じ、結果的に死期を早めたケースも少なくない。生の終末期をどのように迎えるか、支えるかについて多くの研究がなされているが、多くは医療福祉の側から見た視点で介護に焦点を合わせているものが多い(2004 樋口他、2005 栄木、2005 小林、2006 宮本)。

人間が老いて、死に至るプロセスには普通の人間同士の営みがある。親子の営みがある。医療者には生活者としての視点はともすると不足しがちになる。

そこで、今回は急増する後期高齢者がどのように生きているのか、またどのように亡くなっているのか、親子関係の中で見えている事実を横断的に迫ってみることにした。

今回の調査により、老いの自然な姿を子供世代の目を通して描き出したい。そして生活者の要望に、より近づいた医療サービスを提供するための資料としたい。

研究目的

40～70 歳代の子供世代に対し、後期高齢者である自身の親について、健康状態・疾患管理の状態を生活者の視点で評価してもらい、後期高齢者がどのように生きているのか、またどのように亡くなっているのか、親子関係の中で見えている事実に焦点をあわせ、横断的にその実態を明らかにすることを目的とする。

研究方法

60 歳代前後の男女 600 名を対象に、高齢者となった自分の親について質問紙調査を行った。質問紙を作成するために、事前に該当する年齢層の 6 人にインタビュー調査を行った。

インタビューから質問紙には次のような内容を入れた。現在の親の暮らし方、健康状態、親の生活の様子、またすでに故人となっている場合は、療養期間や療養場所、終末期の状態と死亡場所、療養中の世話の状況、死亡後に感じたことなど、子供の視点で回答してもらった。質問紙には存命中の親のことは、一番最近会ったとき話題になったことはどんなことだったか、そして故人の親については死に至るまでの様子はどうであったかについて自由に記載してもらう欄を設けた。死亡時の感情については、事前に聞き取り調査を行って得られた情報と研究者間で討議した内容から精選して代表的でわかりやすい感情表出語を抽出し、列記し、回答を求めた。

調査対象は協力を得られたスポーツクラブ・生涯学習サークル等への参加者のうち後期高齢者を親に持つ世代で、東京と地方の小都市に在住している人であった。なお、対象の職業は医療関係(福祉を含む)ではないことを条件とした。

倫理的配慮として、本調査の目的・方法について対象者には書面で説明を行った。説明には調査協力は拒否することが可能であり、調査協力をせずともなんら回答者に不利益が及ぶものではないこと、回答者が特定され得る情報が確認された場合には除外すること、本調査結果は本研究の目的以外に使用しないこと、また得られたデータは研究終了と同時に厳密な管理の下処分することを確約し、了解した人のみが回答することとした。

回答は無記入が 20%以上あるもの、明らかに誤答である(例/現在親は亡くなっているが生存していたときのことを回顧し存命の欄に記載している)もの、回答者の年齢が 40 代～70 代以外の年齢に該当するものは無効とし、該当を免れたものを有効回答とみなして分析した。統計分析には SPSS14.0 を用い、分析手法は主に χ^2 検定をおこなった。

結果

1. 事前調査の結果

地方都市に住む 60 歳代の夫婦に親の最後の様子について語ってもらった。死までの様子はそれが予想していたものとは違ったとしながら、次のようなことを語っていた(資料 1)。

ケース 1 で語られた内容の要約：父親（享年 88 歳）

ほんとに倒れる、倒れて寝込むまでは丈夫だった。・・・ずっと犬散歩しとったわけだから、ある日突然なんかガクツときた感じやなあ。なんかだんだん所作が悪くなって、まずね、足が痛くて、・・・なんか足の親指の辺りが紫色になって、ほいで、これはなんだろうって診せに行ったあたりから始まったような気がする。

そしてあんまりゼエゼエいうので、おかしいなってことで、病院行ったら、結局肺炎かなあ、なんか様子がおかしいから入院しましよって入ったのが始まりや。・・・40 日入院したんだよ。・・・おじいちゃんがどんどん悪くなった。退院してももうぜんぜん動けなくなった。・・・アドバイスで、夏に 1 ヶ月入所さしてもらった。涼しい場所でもかるうじて歩けるんだから、・・・1 ヶ月、最初は、オレを邪魔にしやがって、お前は子供の癖に恐ろしい娘だって怒られたのすごく。

ケース 2 で語られた内容の：母親（享年 80 歳）

骨折しちゃったんだよね。・・・階段じゃなくてね、窓があってね、そっから落ちちゃったの。・・・そうなる前にハイテンションになっちゃったんです。テンションがあがちゃって、・・・夜中に商売に行かなきゃなんないっていうんで、窓を開けて飛び出しちゃったわけ。・・・一人で寝てたからね。誰も気が付かなかった。それで骨折したみたいなんだけど、誰も気が付かなかったんだよ。朝、犬があんまり吠えるんで見に行ったら、階段のところうづくまってたっていう...。・・・すこしはボケが始まったのかもしれない。・・・睡眠薬をずっと飲んでたんだよ。睡眠薬飲まないと眠れないって言って。・・・その何年か前は散歩やなんかしてたんだけどね。・・・まず朝、新聞を読んで。株やってたからね。お金儲けが好きな人だったから。本もよく読むね。ほんとに亡くなる直前までそういうことはやってたよ。元気だったよね。

ケース 3 で語られた内容の要約：母親（享年 90 歳）

90 まで元気でやってて、階段で転んだのか。あれで骨折したのが・・・手術をして、・・・なんか化膿しちゃったみたい。それで一気にね。だから病院に入った期間ていうのはほんのわずかだった。・・・延命処置しますかって言われたんだけど。私が断ったんですよ。そういう人じゃないから。もしだめだったらそういうことはしないでくださいって。兄はね、するっていつてたんですよ。でもね、そう人じゃないよって言ったの、ぜんぜん動けなくてね、長く生きたいって思うような人じゃないんだからって（それで同意してもらった）。生前、お酒は飲んでましたよ、亡くなるちょっと前まで。家でね。1 合くらいは飲んでましたよ、毎晩。

2. 調査結果の概要

1) 調査対象地域の概況

調査対象となった地域の65歳以上の高齢者人口の割合は表1のとおり平成17年度の調査で東京が18.3%、地方都市が21.2%であった。

また人口10万人に対する比率は東京が病院5.3施設の1042.4病床、診療所が97.6箇所、地方都市が病院6.9施設の1304.6病床で診療所が72.6箇所となっていた。

表1 調査地域の概況

	東京		地方都市	
	男	女	男	女
^a 平均寿命(歳)	77.96	84.46	77.90	85.21
^a 65歳以上人口割合(%)	18.3		21.2	
^b 年間死亡率(人口千人対)(人)	7.44		9.51	
^c 老人福祉関係施設数				
養護老人ホーム	33		12	
特別養護老人ホーム	349		44	
軽費老人ホーム	16		3	
ケアハウス	25		12	
老人福祉センター	205		45	
通所介護事業所	654		160	
短期入所生活介護事業所	337		55	
老人介護支援センター	488		56	
老人休養ホーム	1		0	
有料老人ホーム	177		4	

a : 総務省平成17年度「国勢調査報告」

b : 平成17年度「東京都統計年鑑」、平成18年度「山梨県統計データバンク」

c : 厚生統計要覧「平成16年介護サービス施設・事業所調査」

2) 回答者の状況

質問紙を返送してきた人は311名で、平均年齢は60.9歳(標準偏差9.86)で、男性と女性の割合は男性89名、女性222名と圧倒的に女性のほうが多かった。回答者の親の生死の状況は存命である者177名、死亡している者445名で父母の生死の割合は表2のようになっている。

表2 回答者の親の生死

	N = 622			
	存命		死亡	
父	61	19.2%	256	80.8%
母	116	38.0%	189	62.0%
計	177	28.5%	445	71.5%

存命している親の平均年齢は 79.6 歳(標準偏差 8.64 歳)、死亡している親の享年は 75 歳(標準偏差 14.31 歳)であった。

3. 調査結果 親が存命であったケースの概要

父母別では表 2 のように存命している父は 61 名で回答者の父親の 19.2%に過ぎなかった。母親は 116 名(38%)が存命していた。平均年齢は父親が平均 78.2 歳(標準偏差 8.33 歳)、母親が 80.4 歳(標準偏差 8.84 歳)であった。

1) 存命中の高齢者の暮らし方

存命中の高齢者が現在生活している場所では自宅が圧倒的に多く、91%を占めていた(表 3)。また自宅で暮らしている高齢者のうち誰かと同居している人が、父親は 85%、母親では 71%、そして独居の人が父親 5%、母親 18%あった。母親より父親のほうが誰かと同居している比率が高かった(表 4)。

親子が会う頻度については、ほぼ毎日会う人と一週間に一回程度会う人を合わせると全体として半数を越えた。父親と母親で会う頻度に違いがあるかどうか確認したが、両者に大きな違いはなくそれぞれ 51%と 50%であった。

表 3 親が現在暮らしているところ

	自宅	施設	病院	不明
父	58	1	1	1
母	103	9	4	-
合計	161(0.91)	10(0.06)	5(0.03)	1(-)

():対象者全体に占める割合

表 4 親は誰かと同居しているか

	誰かと同居	独居	不明・無回答
父	52(0.85)	3(0.05)	6(0.10)
母	82(0.71)	21(0.18)	13(0.11)

今回の対象者の健康状態は良好で、とても元気、まあ元気を合わせると父親が 80%、母親が 73%に達した。(表 5)。具体的には目的のある外出をすとか、周囲に関心がある、健康の自己管理ができる、生活上の自己決定ができるなどできるとの回答が 70%以上になっている(表 6)。しかし、子供は親を見ていて気になることがあると 50%以上が答えている(表 7)。

親は自分の健康問題についてはよく話しており、特に母親はその 70%以上が話題にする様子があった。

しかし、あまり元気でない、元気でないと何らかの健康障害を持っているケースが父親で 12%、母親で 20%あり、父親の 2%、母親の 5%には認知症や障害などで自分の健康問題については自分で話すことができない状態であるとの回答もあった(表 8)。

親を元気であると判断することと、子が親の生活を見ていて気掛かりになることがあるかどうかでは関連があり、親が元気でないと判断すると気掛かりが増していた($p < 0.01$)。

これは親の生活状況とも関連があり、カイ二乗検定では目的のある外出をする($p = 0.01$)、周囲に興味がある($p < 0.01$)、健康の自己管理ができる($p < 0.01$)、生活上の自己決定ができる($p < 0.01$)、自由に立ち振る舞える($p < 0.01$)、一人で置いておける($p < 0.01$)と関連があった。

表 5 親は元気といえるか (数字は父母内での割合を示す)

	とても元気	まあ元気	どちらともいえない	あまり元気でない	元気でない	不明・無回答
父	0.28	0.52	0.05	0.05	0.07	0.03
母	0.22	0.51	0.07	0.15	0.05	0

表 6 親の日常生活状況 (数字は父母内での割合を示す)

	目的のある外出をする		周囲に興味ある		健康の自己管理ができる		生活上の自己決定できる	
	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
父	0.87	0.11	0.75	0.21	0.75	0.2	0.85	0.13
母	0.77	0.23	0.73	0.26	0.76	0.25	0.75	0.26

表 7 親の生活について気がかりなことがあるか(数字は父母内での割合を示す)

	とてもある	時々ある	どちらとも	あまりない	全くない	無回答
父	0.21	0.36	0.05	0.26	0.08	0.03
母	0.18	0.42	0.03	0.27	0.08	0.02

表 8 親は自分の健康についてどのくらい話題にするか(数字は父母内での割合を示す)

	よく話す	時々話す	どちらとも	あまり話さない	話さない	話せない	無回答
父	0.16	0.43	0.05	0.26	0.05	0.02	0.03
母	0.36	0.36	0.03	0.09	0.06	0.05	0.01

2) 親子の交流自由記載

(1) 最近の親子の交流で話題になったこと(資料 2)。

一番多かった話題は、孫や他の家族に関する事で約 37%あった。記入例には

「弟に生まれた孫の話。その子の名前について。わが子(母にとっては孫)の家の手伝い、習い事の話、学校の席書展の話。おばの近況について。ここ1ヶ月の忙しい予定について。4月に行く旅行について」

「駅前に空いているテナントの話/宅配ピザ注文のこと/新しいパチンコ屋の話/テレビ番組のこと」

などがあった。存命中の親との会話は 70%以上がその時の社会問題や孫を中心とした家族のことなどであった。

親子の間で、話題になったこととして健康問題に関することはそれほど多くなかったが、父親が母親のことを、母親が父親の健康問題を心配して子供に話す様子があった。

記載の中には親の健康障害のために親子の間で会話が成立していない状態である次のようなケースの報告もあった。

「母(93歳)は、特別養護老人ホームにてお世話になっており、認知症のため私の存在はわからず、お菓子を持参し(夕食後の時間、勤務を終え、pm6:40頃)、夜景を見ながら会話し、眠たい様子であり「車椅子で歩きたい」というので廊下を歩き、その後、食道兼集合場所にて休憩、また来ますからといって帰ってきた。本人はうなずいているが本当に理解しているか疑問。このように会話らしき会話はできない。」

「認知症で全然会話が通じない」

「ここ3年くらいまったく言葉を話せないので一方的にこちらから話しかけるだけで長い話題は話しておりません」

(2) 子供から親の生活を見ていて気になること

親の健康状態が変化しつつあるさまを受け止め、今後の対応に苦慮しているケースの報告があった。

「物忘れがひどく、自分でトイレに行かない」

「自分から話せないし、ヘルパーさんと呼ぶことも出来ない。一人部屋のベッドにいるので地震などのときに心細いのではないかと心配です」

また特別な健康障害はなくても老いていく親に対しては気がかりなことがある。

「83歳なので畑の仕事が大変だろうと思う。仕事をした後、疲れて風邪をひいて寝込むことが多くなったこと。」

「今年86歳になりますので身体は自分のことは自分でできますが、精神的に弱くなってきてい

ますので、火の事など心配です。」

「93歳になるのに運転しているので運転を控えるようにしている。」

元気すぎる親もそれはそれでまた気になるらしい。

「一人で山登りなどするので気になる」

「気持ちが若くてまだまだ女性に気を取られることもある。複雑な気持ち」

子供から親の生活を見ていて気になることは上記の例のように幅広い。

4. 調査結果 親が死亡していたケースの概要

今回調査した親については死亡したものが445名(72%)で、父親は80.8%にあたる256名、母親は189名で62%いた(表2)。それぞれの享年は父親が平均73.8歳(標準偏差13.7歳)最小値31歳、最大値99歳であった。母親の享年は平均が76.5歳(標準偏差15.1歳)最小値29歳、最大値98歳であった。

1) 死亡した場所と死因

親が死亡した場所は病院が58.3%と一番多かったが、それに次いで自宅が36.1%と多かった。ここからは無記入の多かった回答をのぞき、443ケースの結果をみる。

表9 なくなった場所

亡くなった場所	N	%
病院	250	58.3
施設	13	3.0
自宅	155	36.1
その他	8	1.9
無回答	19	0.7

子供が認識している親の死因は多いものからあげると、胃がん10.2%、老衰9.8%、脳出血9%、心不全7.5%等日本の代表的な死因と類似していたが、その他の中で戦死を挙げたものが6名いた。

死亡場所別に見ると悪性新生物の場合は病院・施設で死亡する割合が高かったが、自宅で死亡するケースも17.3%あった。

脳出血等、脳疾患は自宅での死亡が20.6%、病院・施設での死亡が11.1%あった。心疾患は自宅と病院はほぼ同じとなっている。診断名の正確さは欠くが子供が認識している親の死因として

の老衰は病院・施設が 8%、自宅が 13.3%となっている(表 10)。

父親と母親の死因については一位が悪性新生物、二位は母親が心疾患、父親が脳疾患、三位は父親の順位と母親の順位が逆転し、それぞれ脳疾患と心疾患、次には両方とも老衰という順番であった(表 11)。

表 10 死亡場所別にみた死因

		%	
病院・福祉施設(n=262)	悪性新生物	84	32.1
	心疾患	42	16
	脳疾患	29	11.1
	老衰	21	8
	肺炎・肺疾患	20	7.6
	肝疾患	6	2.3
	事故	2	0.8
	自殺	0	0
	その他	29	11.1
	無回答	29	11.1
	自宅(155)	脳疾患	32
心疾患		29	19.3
悪性新生物		26	17.3
老衰		20	13.3
肺炎・肺疾患		6	4
事故		4	2.7
肝疾患		4	2.7
自殺		0	0
その他		26	17.3
無回答		8	2

表 11 父母別の死因順位

		父親 n=257		母親 n=186		
		人	%			
父親	死因	悪性新生物	68	26.5		
		脳疾患	38	14.8		
		心疾患	30	11.7		
		老衰	23	8.9		
		肺炎・肺疾患	17	6.6		
		肝疾患	6	2.3		
		事故	5	1.9		
		その他	42	16.3		
		無回答	28	10.9		
母親	死因	悪性新生物	42	22.6		
		心疾患	41	22		
		脳疾患	23	12.4		
		老衰	18	9.7		
		肺炎・肺疾患	9	4.8		
		肝疾患	4	2.2		
		事故	1	0.5		
		その他	21	11.3		
		無回答	27	14.5		

今回調査をした東京地区と地方都市の死亡場所を調べると、地方都市のほうが在宅にて死亡する割合が明らかに高い傾向にあった($\chi^2 = 8.44, p < 0.001$)。

表 12 調査地別死亡場所の比較

死亡場所	東京		地方都市	
	人数 (n = 229)	%	人数 (n = 103)	%
病院	139	60.7	49	47.6
施設	10	4.4	2	1.9
自宅	72	31.4	50	48.5
その他	8	3.5	2	1.9

2) 死亡前に行われていた世話の状況

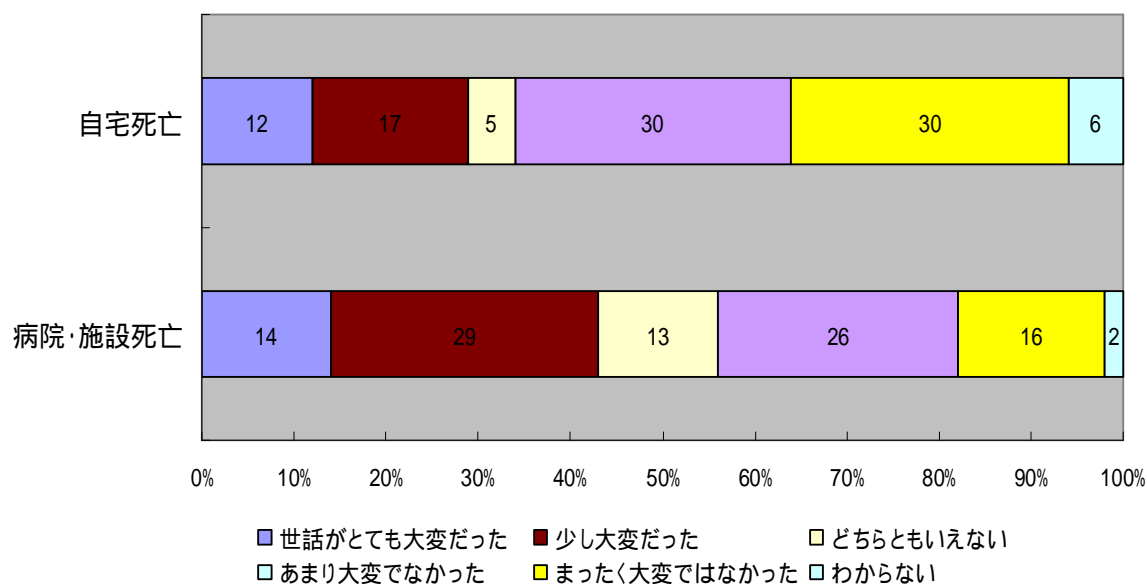
親が死亡する前の世話が大変であったかどうかについて、とても大変だったとしたのは約 11%で、37%があまり大変でなかった、全く大変でなかったと答えている。世話の大変さについて父母別に

分けて比較してみたが、差はなかった。

死亡場所別に世話の大変さが違うかどうかを比較したところ、表 13 のようになった。病院・施設死亡でも 43%は世話が大変だったと回答し、自宅死亡の場合、その世話はあまり大変ではなかったとまったく大変ではなかった、をあわせて 60%となった。この点ではカイ二乗検定で有意差があり($p = .014$)親が自宅でなくなっているケースの子供のほうが、世話の大変さを感じていなかった。

表 13 死亡場所と世話の大変さとの関連

	死亡場所			
	病院・施設		自宅	
	人数	(比率)	人数	(比率)
世話がとても大変だった	31	0.14	14	0.12
少し大変だった	65	0.29	20	0.17
どちらともいえない	30	0.13	6	0.05
あまり大変でなかった	58	0.26	34	0.30
まったく大変ではなかった	35	0.16	34	0.30
わからない	4	0.02	7	0.06



介護期間と世話に大変さの関係では表 14 で示すように、介護期間が長くなるほど、介護が大変だったと答える人が多かった ($\chi^2 = 92, p < 0.01$)。介護期間が360ヶ月と長かったケースは腎臓に障害があり、長期間人工透析を受けていたケース、2番目に介護期間が長かったケースはALS (筋萎縮性側索硬化症)の慢性疾患があった。

死亡前の介護の状態として、日常生活全体の世話をする必要があったかどうかについては表15のように他の人にも自分にもその必要がなかったという回答が47%を占めた。これを父母別にカイ二乗検定を行うと、有意差があり($p = .005$)、父のほうが日常生活全体の世話をする必要があった。

また、昼夜にわたる介護があったかどうかについては、自分がそのような介護を行った人が25%おり、父母によって差があり($p = .007$)、これも父のほうが多かった。しかし死亡前に親の日常生活全般の世話をしたか、昼夜にわたる介護をおこなったかについて答えた人(回答者)が男性であるか、女性であるかによる違いはなかった。

親の世話のために自分の生活を犠牲にしたかどうかについては同じく表15のように、犠牲はなかったという人が44%であり、父母別でも、回答者の男女別でも差はなかった。しかし精神的な負担を強く感じるがあったかどうかについては、あったと答えた人が42%あり、回答者の男女別では差がなかった。しかし、父母別では母親に対して精神的負担を強く感じていることが表れた($p = .008$)。死亡前の親の世話で経済的負担があったかどうかについては、なかったとの回答が57%あった。また親の介護について身内以外からの支援不足を感じたかどうかについては71%がなかったとした。経済的負担や支援不足については父母別でも回答者の男女別でも差がなかった。

死亡場所と昼夜を問わない介護、日常生活全般の世話、自分の生活の犠牲、精神的負担、経済的負担、身内以外からの支援不足があったかどうかを比較したところ、生活の犠牲($p = .047$)と経済的負担($p = .02$)で死亡場所によって差があった。具体的には生活の犠牲があったとする回答は、親が病院・施設で死亡ケースでは35%、自宅で死亡したケースでは18%であった。そして、自宅で死亡したケースの55%が自分の生活の犠牲はなかったとした。経済的負担は病院・施設で死亡したケースでは23%に、自宅では18%に負担があったが、自宅で死亡するケースのほうに若干経済的負担が少ないことが示された。しかし、精神的負担等では病院・施設で死亡しても自宅で死亡しても差がなかった(表16)。

介護期間以外で何が世話に大変さに影響しているかを見るために重回帰分析を行った。日常生活全般の世話があったか、昼夜にわたる介護があったか、自分の生活を犠牲にすることがあったか、精神的負担を強く感じるがあったか、経済的負担があったか、身内以外からの支援不足を感じることはあったかという質問への回答は、自分にその負担があっただけでなく他の人にあった場合と、なかったと回答した場合の2つに分けてダミーの説明変数として投入した。その結果、世話が大変だとするのに大きな影響を及ぼしていたのは表17のように自分の生活が犠牲になること、精神的負担、昼夜にわたる介護状況があることであった。

表14 介護期間と世話の大変さの関係

	最小値	最大値	平均値	標準偏差	世話の大変との相関(r)	有意確率
介護期間(月)	0	360	22.2	45.3	-0.46	0.00

表 15 介護負担の状況

	(割合)		
	あった	なかった	他の人にあった
日常生活の全世話 (n = 253)	0.19	0.47	0.34
昼夜にわたる介護 (n = 261)	0.25	0.39	0.36
自分の生活犠牲 (n = 259)	0.3	0.44	0.26
精神負担 (n = 268)	0.42	0.34	0.24
経済負担 (n = 256)	0.21	0.57	0.22
社会的支援不足を感じたか (n = 210)	0.16	0.71	0.13

表 16 死亡場所と生活の犠牲、経済的負担との関連

		死亡場所			
		病院・施設	(比率)	自宅	(比率)
生活の犠牲 (n = 254)	自分にあった	63	0.35	14	0.18
	なかった	69	0.39	42	0.55
	他者にあった	46	0.26	20	0.26
経済的負担 (n = 250)	自分にあった	39	0.23	14	0.18
	なかった	94	0.55	47	0.60
	他者にあった	39	0.23	17	0.22

表 17 「世話が大変だった」に影響する要因の重回帰分析

	B	標準誤差	β-タ	t	有意確率
(定数)	0.280	0.727		0.385	0.701
死前の面会頻度	0.248	0.071	0.231	3.466	0.001
享年	0.000	0.007	0.003	0.045	0.964
死場所	0.108	0.097	0.073	1.113	0.268
昼夜の介護	-0.564	0.252	-0.198	-2.242	0.026
生活全般の世話	0.328	0.258	0.115	1.272	0.205
自分の生活犠牲	0.912	0.259	0.321	3.518	0.001
精神的負担	0.730	0.268	0.254	2.727	0.007
経済的負担	-0.080	0.261	-0.027	-0.306	0.760
支援不足	0.175	0.274	0.054	0.638	0.524
父母別	-0.041	0.187	-0.014	-0.218	0.828
	R	R ²	調整済み R ²	標準誤差	
	0.616	0.379	0.339	1.16	

3) 親の死を受け止めたときの状況

親の死という出来事をどのように想像していたかは別にして、自分が想像していたものと、とても違ったと受け止められていたケースが22%あった(表18)。悲しみは72%に、寂しさは48%のケースに見られたが、あっけなさを感じたが29%、驚きが25%あり、安堵が15%あった。回答方法は複数回答であったことから、悲しみ、寂しさ、感謝、あっけなさ、驚き、空虚感、落胆、後悔、あきらめ、とまどい、認めたくない、謝罪、孤独感など13もの感情を表出しているケースがあった。表出数の平均は3.5(標準偏差 2.2)で、それぞれが単純ではない感情で親の死を受け止めていることが判った(表19)。その中で「後悔」をあげた人は病院・施設死亡のケースでは41%あったが、自宅死亡の場合には21%で差があった($p = .03$)。

親がなくなったときの気持ちとして、事前調査から出てきた言葉「あっけない」を選択肢に載せたが、それを選択した人が30%近くいた。そこで、あっけないという感情が選択されたケースにおいて、その介護にかけた期間との関連性をみてみたが、統計的に有意な結果にはならなかった。

表18 親の死という出来事は想像していたものと違いがあったか

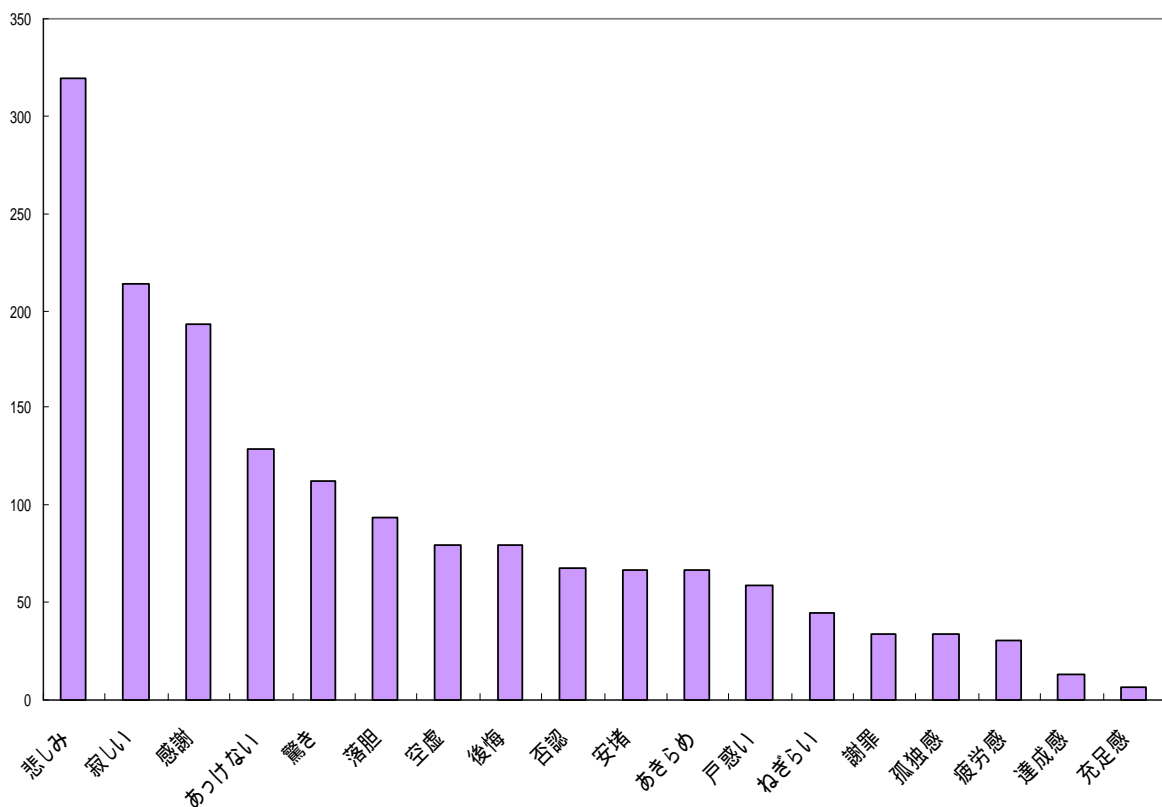
	N = 386
とても違った	0.22
少し違った	0.13
どちらともいえない	0.20
あまり違わなかった	0.18
違わなかった	0.12
わからない	0.14

(%)

表 19

親の死をどう感じたか、多い順(複数回答)

	(%)
悲しみ	0.72
寂しさ	0.48
感謝	0.43
あっけない	0.29
驚き	0.25
落胆	0.21
空虚	0.18
後悔	0.18
否認	0.15
安堵	0.15
あきらめ	0.15
戸惑い	0.13
ねぎらい	0.1
謝罪	0.08
孤独感	0.08
疲労感	0.07
達成感	0.03
充足感	0.01



4) 介護期間が全くなかったケース(原文のまま記載)

享年 80, 老衰, 死亡場所: 病院, 地方都市

父は 80 歳まで元気で、農業を頑張っていました。脳血栓になってからは左半身に少し麻痺が残り、農業は出来ませんが自分のこと自分で出来ました。歩いて 5 分くらいのところに私(娘)が住んでいた。毎日散歩がてら家に来て子供たちの本棚の本を読み、食事の時間になると帰ってまた来るという感じの毎日でした。入院することも無く、毎日母と仲良く過し、88 歳で苦しむことも無く、静かに天命を全うしました。

享年 81, 不明, 死亡場所: 自宅, 地方都市

高血圧が見つかり、薬は服用中でしたが、元気に毎日過しておりました。亡くなる 3・4 ヶ月前くらいから、痩せが目立ちましたが、食事も普通に(少しずつ減って)とっていたようでした。家族も気付かず、朝に布団の中で眠っていたようでした。

享年 85, 心不全, 死亡場所: 自宅, 東京

規則正しい生活でした。83 歳まで会社勤めをしていました。健康に気を使い食事も一定量以外は一切口にせず、自分のことはすべてやっておりました。毎日欠かさず食していたものは大根おろし、銀杏。頭もしっかりして手の掛らない父でした。亡くなったときも布団の中で寝たままでした。

享年 90, 心臓麻痺, 死亡場所: 自宅, 東京

自由気ままに起きたいとき、食べたいとき、寝たいとき、にして毎日晚酌・タバコをやっていた。昼食を呼びに行ったら亡くなっていた。心臓麻痺。

享年 82, 動脈瘤破裂, 死亡場所: 病院, 地方都市

生涯現役の百姓でしたが、膝関節が悪く 80 歳を過ぎてから農業を辞め、隠居生活を送っていた。年寄り 2 人で生活をしており、酒は昼・夜 1 合程度楽しんでいた。タバコは 75 歳くらいで辞めていた。正月に会った時は元気でその 2 週間後、大雪で冷え込んだ早朝のトイレで倒れ、胸が痛いと訴え、そのまま救急車で病院に運ばれ同日夜 8 時頃死亡した。病院へは定期的に通院していたようですが、シップ薬はまだあるのでいらぬといったら、医者からもう来ないでいいと言われたと聞いたことがあった。田舎では医者は選ばれんからと言っていたことを思い出しました。

享年 88, 心不全, 死亡場所: 自宅, 地方都市

88 歳まで元気で家の回りの草取りをしたり、ゲートボールを楽しんだり、父の世話をしていました。前の日も畑の草取りをしている姿を近所人たちが見っていました。昼ごはんを食べて昼寝をし、そのままベッドの中で亡くなっていました。

享年 83, 心筋梗塞, 死亡場所: 病院, 地方都市

その 1 週間前には孫の保育園の豆まきに出るほど日常生活全般何の心配もないような状況でしたが、2 月初の大雪の早朝外に出て(寒気の由もあったのでしょうか)「苦しい」と言い「寒い」と言って寝たのですが、大雪のためすぐに車が出せないため、病院へ行くのが遅れてしまったかなと思います。救急車も呼べず、心筋梗塞ということでした。入院したその翌

日亡くなりました。

享年 95, 心筋梗塞, 死亡場所: 病院, 東京

多趣味で口も頭も達者。亡くなるその日まで、食事の用意をもし一人の生活を楽しんでいました。95 歳まで病気らしい病気もせず、入院したことが無く、元気そのものでした。前日に電話があり買い物に連れて行ってとの事で翌日迎えに行く。今日は体調が悪いようだから別の日にまたお願いねと母、そのまま急に意識が無くなり救急車で病院へ、数時間後亡くなる。

享年 95, 心不全, 死亡場所: 病院, 東京

自宅で TV を見ていたりゆっくりした生活を送っていた。亡くなるその日の PM まで普通にしていた。気分不良の訴えあり、病院に連れて行き、数時間後には永眠。医療従事者に不満なし。

享年 76, 心不全, 死亡場所: 自宅, 東京

自営手伝いと家事を行っていた。入浴中に倒れ、自宅にて永眠(近医往診にて死亡確認)。入浴前まではいつもと変わらない普通の生活をしていた。

5) 親が亡くなるまでの様子(自由記載)

この項目については、故人の生前の様子や死までのプロセスについて自由に記載できるようにした。自由記載欄であったが、空欄はほとんどなかった。

前項で自宅死亡の場合は病院・施設での死亡より「後悔」挙げた人の割合が低かったとしたが、自宅で死亡した人の具体的記述の中には次のようなものがあった(資料 3)。

父 享年 84, 死因不明, 死亡場所: 自宅

「父が他界する半年ぐらい前まで商売(洋品店)をやっていましたが、家を建て替えることになり、店を閉じました。このため、気持ちの張りをなくしたのか急にな年を取り、年が明けてまもなく死亡しました。医者にもかかっていなかったため、死亡診断書を書いてもらえなくて困った記憶があります。」

またヘルパーの助けを借り、働きながら一人で看取った次のようなケースもあった。

母 享年 85 歳 死亡場所: 自宅

「母と二人で生活していたが、母が車椅子(50%)での生活のため、毎日ヘルパーさんをお願いして家事を手伝っていただいた。私自身が仕事を持っているため基本的には週末だけ直接介護をする状態であったが、私一人で看っていたため、経済的・精神的負担はかなり大きかった。82 歳頃、多発性骨髄腫と診断されたが、高齢のため治療はせず、様子を見ながらの生活であったが、最後は自宅であつというまに亡くなった。亡くなる当日まで入浴もし、食事もとっていたので、亡くなりかたとしては立派で、素晴らしかったと思う。」

悪性新生物であった親を自宅で看取ったケースの報告もあった。

父 享年 78 歳 胃がん 死亡場所：自宅

「死の 2 年前胃癌手術し、2 年間再発しなければ完治と言われていたが、ちょうど 2 年後再発し、その間発熱震えだし止らず、貧血などの症状出、肝臓等にも転移。入退院を何回も繰り返しました。震えだし以外は食欲減退はあった(体重も徐々に減少)ものの、あまり苦しむ様子も無く、紙おむつをしていたので、手がかかるとは思わなかった。「食べたくない」といわれるのが辛かった。死の 1 ヶ月前自宅で過すよう病院からいわれたときはまだ 38 の熱のある状態だったので、1 週間の中にお別れかと覚悟したくらいでしたが、かかりつけの医者点滴で落ち着き、しばらく家で過ごし亡くなりました。」

その他、書かれた内容の中には医療者への厳しい指摘もあったが、多様な死の迎え方が記載されていた(資料 4 添付)。

母 享年 80 歳 クモ膜下出血 死亡場所：病院

「1 年に 1 回ほど眼科や消化器系や整形などの病気で市立病院に入院することがありました。退院後はその病院の一人が開業し、近いため通院治療していましたが、2 年前の 11 月上旬下肢痛としびれで動けなくなり、入院させてもらいたく市立病院を受診しましたが、他の病院に行っているからと痛み止めをもらい、1 週間後当日の先生がいらっしゃるということでそのとき来るようにいわれたそうですが、痛みはとれず、3 日後再受診し入院させてもらいました。ブロックなどの治療を受けましたが相変わらず痛く、手術すすめられ、本人もその気になり 12 月上旬に手術予定成功したと説明をされ明日からリハビリ開始という前夜、クモ膜下出血を起こし、それから 2 日後に死亡しました。高齢であること、血圧も高めで、麻酔大丈夫ですかとお聞きしたときの説明が、飛行機に乗るとき落ちないでしょうねと誰も言う人はいないでしょう…という説明をされたとき、なんとという医者だと思ったことは事実です。でも歩かなかったけど、痛みしびれがとれたと喜んだ母が今も忘れられません。」

父 享年 80, くも膜下出血, 死亡場所：病院

「農林省に定年まで勤務し、定年後は甲府の家と田舎とを行き来して、好きな農業をしたりして、楽しんでいました。ある日車で外出し、帰って来て、くも膜下出血で倒れ入院しました。10 日間入院し意識が戻らぬままになりました。80 歳でした。」

父 享年 67, 肺癌, 死亡場所：病院

「カゼのようだと思って薬を飲んでいたら、長期にわたり症状の回復が認められず、検査すると肺癌でした。ステージ B-2 期。頭痛を訴えたが、検査を受けたが、異常が見つからず、手術を受け成功しました。以前頭痛を訴えたときに脳に転移していました。手術を受けて 1 年後に死亡しました。* 癌全体をあつかう専門医のいる病院に行くべきだと思う。肺だと他の部位まで・・・

父 享年 70，肝臓癌，死亡場所：病院

「非常に規則正しい生活をし、犬を飼っていたので朝晩の散歩は欠かさず、酒は晩酌ビール 1 本、タバコは吸わない、夜遊びもしない生活でした。なので、肝臓癌と聞かされたときは信じられなくて頭が真っ白になりました。ある日顔と首の辺りが黄色いのでこれはおかしいと思い父に「医者に行ったら?」という素直に行き、検査入院してそのまま治療になりました。たまたま行った町医者が 医大から来ていた教授というのいて「すぐ入院しなさい」とその日に入院。多数のインターンをぞろぞろ連れて目の前でベッドの上で検査したりするのは非常に人体実験のようで嫌だった。検査終了後、放射線用のバイパスの手術の（これは素人目に見ても）失敗。（インターンがやったようだ）末期ということで「後は自宅に戻るか別の病院で診てもらいなさい」と追い出された。（歩けないくらいだったのに）仕方なく藁をもつかむ思いで中規模の総合病院にお願いしたが、そこの先生にも「告知をしていないこと」「末期なのに見捨てた 医大の冷血さ」を理由に散々断られた。泣いて頼んで入院を許され、やっと安心はしたが、先生は毎日私たち母子を責めてきた。（大方大病院のグチではあったが）その言われ方にも耐えられなかったが、父を帰されても自宅で面倒を見る余裕が仕事をもつ身としてはなかったの、平身低頭で過し毎日見舞いに行く母と私の姿に先生がやっとうちとけてきてくれて、最期には強い薬を使ってくれたりして、1 週間ほど命が延びた。亡くなってからわかったことだが、あんな状態でも「生きている、息がある」のと、「いない」のでは気持ちに雲泥の差があった。そこで命の大切さを思い知った。先生に「解剖を試みたいのだが」といわれたとき母は嫌だったが、私は「こんな思いをする人がひとりでも少なくなるように」と思って承諾した

「告知」については今でも私たちからしない、先生からもしないでいてくれて、それは後悔ないです。でも父は吐血したときに「俺はもうだめですか」と聞いたそうです。先生は「がんばりましょうよ」と答えてくださったそうです。私はそれでとても有り難かったが、私自身がそうになったら、告知して欲しいと思った。汚い字ですみません。

父 享年 73，多臓器不全，死亡場所：病院

「退職後、母と二人で生活しておりました。食欲がなくなり、体がだるくの症状はあったらしいのですが、認めず、自分でも耐えられなくなってから病院に行き、すぐ入院。個人病院であったため毎日少しずつ（だらだらと）検査が行われ、大学病院の先生が見えて説明。転院予定の朝亡くなりました。肝硬変と言われていましたが、私自身は直接先生から説明を受けることなく、たった 1 週間の入院、まさかの急死という感じでした。悪くなると大きな病院に移動するのであれば、もっと早く処置して欲しかった。後悔だらけ不満だらけです。父のいた個人病院は最悪でした。近所だったというだけですぐ行ったのが間違いだったと。

母 享年 85，心不全，死亡場所：病院

「実母は私が 7 歳のときに再婚し、子供が 3 人おりました。私は母と 7 年くらいしか一

緒に生活したことはありません。母は異父弟3人とその家族達と老後は生活しておりました。喘息はありましたが、元気で、死ぬ1週間前から食欲が無くなり「胸が苦しい」といい、救急車で入院し、その日に亡くなりました。ですから、介護というほどはしていなく、理想的な自然死のようだと思います。

母 享年98, 老衰, 死亡場所: 病院

「母痴呆症で10年近く生存していました。5年くらいは姉、私の家を行ったり来たりで過ごし、あとの5年は、ころんで、大腿骨を折って、病院生活となりました。そして歩くこともできず、胃ろうという始末なのに退院を命じられ、今の世の中医療関係の冷たさに途方に暮れました。3ヶ月です退院してください、と言われた。病院が遠くなると私たちも生活があるのでお世話するのに益々大変です。どうして病院の儲け仕事かと思うと、いてもたってもいられなかった。今の世の中の冷たさ、本当に腹が立ちます。

母 享年76, 心不全, 死亡場所: 自宅

「自営手伝いと家事を行っていた。入浴中に倒れ、自宅にて永眠(近医往診にて死亡確認)。入浴前まではいつもと変わらない普通の生活をしていた。

父 享年90, 心臓麻痺, 死亡場所: 自宅

「自由気ままに起きたいとき、食べたいとき、寝たいとき、にして毎日晚酌・タバコをやっていた。昼食を呼びに行ったら亡くなっていた。心臓麻痺。

母 享年76, 大腸癌, 死亡場所: 病院

「父戦死後一人で私たち姉弟を立派に育て上げました。当時金融機関の住み込みとしての勤めくらいしかなく、しかも男の子と一緒に住んではいけないという条件で、母の実家に預け、私だけ連れて、切なくても働かなくてはならない現実でした。定年まで勤め上げました。私たち独立後、独り暮らしになってからは好きな教室(組みひも、切り絵、踊り、老人大学等々)に通い、友人もいっぱいでき頑張っていました。独り暮らしの寂しさを切り抜けていたようです。母の年近くになりやっとその心がわかってきました。不平不満言わずただただ働いてきた母に親不孝で申し訳なく、いまだに仏壇に毎日詫びています。母は75近くになって時々おなかが痛くなり、しこりが手に触るようになり、医者に大腸癌といわれました。でも本人には告知しないで頼みました。その年の11月末に拳大の癌をとり12月退院。我が家で過ごすようになりました。私が仕事をしていたので病み上がりといっても、働き者の母のこと、家事を目いっぱいして助けてくれました。元気になりよかったと思うほどなく翌年9月くらいには体力・気力・食欲も無くなり、その間ずっと通院はしていたのですが、近所の医者に点滴に通い、年明けには家に来てもらうようになりました。日に日に目に見えて痩せ、床につく生活となり、イチゴ、ミカン果物類はやっと1個、スープ・麺類も一口口にただけで水のようなもの大量に吐くようになり、通院も大変になり、「検査入院だよ」といって2月に1週間ほど入院。このときは食事はできましたが食べられませんでした。

5月になりどうしようもなく入院しました。ますます目はとろんとし、頭もはっきりしないようでした。もちろん何の治療も手当ても無く食事も出ませんでした。ほっとかれました。痛いでもかゆいでも辛いでもなくただ我慢してじっとしていたのが悪かったのかもしれませんが。家につれて帰ってもいいですよ、と言われても、その当時私には介護の知識は全く無く、今のようにホスピスということもなかったときどうしていいか一人でただただ疲れるばかりでした。仕事と我が家の家事、母の団地の自治会のこと、病院のこと、県外にいる弟は月に1・2回来るだけ、本当に心身ともにどうしようもありませんでした。とうとう床ずれを作ってしまった、その数日後5月24日未明独りで逝ってしまいました。

また親の死が予測と違った形で現れたときには次のような戸惑いが見られていた。

父 享年 90 心臓麻痺 死亡場所：自宅 介護期間：0
もっと介護するものと思っていた。

母 享年 85 死亡場所：自宅 介護期間：36ヶ月
最終的には病院または施設でと思っていた矢先の突然のことだった。

考 察

1. 今回の高齢者の特徴

今回調査したケースを日本全体の平均像と比較してみると、存命している人の平均年齢は父親、母親とも日本の平均余命に近い年齢層であった。しかし、日本における単身高齢者世帯が平成18年 厚生労働省国民生活基礎調査によると、男性の80歳以上で20.8%、女性で31.2%であることからみると、本調査での高齢者の単身率は低かった。

亡くなっているケースの平均享年は父親が73.8歳、母親が76.5歳であったが、中には若くして戦死したというケースの報告も数字には含まれていることから、存命者の平均年齢、男性78.2歳、母親80.4歳より死亡者の享年のほうが低かった。

現在の日本の寿命中位数³は年々延び、男性81.56歳、女性88.34歳となっている(第20回厚生労働省生命表)ので、このような傾向からみると、今回調査したケースで現在生存中の方は男性も女性も今後、およそ3年以上は生存できると思われる。

また、死亡場所についても平均的データとは多少違いがある。平成13年度人口動態統計によると78.4%が病院で死亡し、13.5%が在宅で死亡しているが、今回の調査では病院での死亡は

58.3%、自宅での死亡は 36.1%と自宅死亡率がかなり平均より高かった。しかし、東京と地方都市を比較すると東京では病院・施設で亡くなった人が 65.1%いたが、地方都市では約 49.5%であるなど、東京は病院・施設で亡くなる人の数が地方都市より多かった。

今回の対象者は東京周辺の住民と地方の小都市の住民であったので、サンプルとしての限界があること、倫理上の配慮から回答したくない人の状況は不明であるなど、調査の限界とバイアスはあるが、今回の調査で晩年の高齢者が日常をどのように過ごしているかは垣間見えた。

2. 存命のケースから見てきたこと

今回の調査では、存命している高齢者の約 80%に元気な様子が窺えた。親子の間の交流も予想したより密で、半数以上が一週間に 1 回以上会っていた。また、これら的高齢者は 70%以上が目的のある外出をし、周囲に興味を持ちながら、生活上の自己決定をして、自分自身の健康管理にも気を配っていた。ここから老いを自然に受け止め、自分の生活を楽しみ、自分の健康問題ともうまく付き合いながら、自立して日々の生活を営んでいる高齢者の様子があった。

子供は親の健康問題を心配しているが、高齢者は自分の健康問題について自ら話題にすることは少ないようだ。元気な高齢者は精神的にも自立していて、子世代に心配をかけたくないという気持ちがあるのかもしれない。

親子で交わされている会話は、その時々社会問題やテレビの話題、そして孫を中心とした家族の近況についてなどであり、決して暗い話題や生活の愚痴ではなかった。日々の何気ない生活の中にしっかりと高齢者の位置取りができていた様子があった。

ただ、中には存命はしているけれども認知症が発症しているなど健康障害を抱えた親に対し、子供世代が対応に苦慮しているケースもあった。

現在最も大きな社会問題となっているのはこのような健康障害を抱えた高齢者への対応である。今回の調査では健康障害がある高齢者は 15%から 20%いた。

それらのケースは社会的課題である介護負担が重い状態があり、統計的な分析には載らないが、親が認知症になっているケースでは、自由記載にもあるように子供世代の疲労感が強くなっていた。また、介護期間の長かったケースは腎臓病やALSなど若年の頃から慢性疾患を患っていたケースであった。これらは社会的支援の必要性を予測することが可能なケースである。

社会的支援が不足しているとあげた人は少なかったが、全ての高齢者が認知症になったり、長期の介護期間を必要としたりするわけではないことが追試できたことから、これらは特別なケースとして社会支援を充実させていく必要がある。社会的支援を充実させたからといって介護者の負担が軽減することにはならないかもしれないが、その対応すら遅れているのが現実である。

² 寿命中位数とは出生者の半数が生存すると期待される年数をいう。

3. 死までの様子

親が介護状態になったらどうしよう、介護を背負いきれるだろうかと不安に思う人は多い。しかし、今回の調査で、親が死亡する前の世話がとても大変だったとしたのは約 11%であった。なくなる前には全ての人の方が大きな介護負担をかけるわけではないことが表れている。

だからといって介護負担の不安がなくなるわけではないが、死亡の直前まで自立して普通に暮らしていた高齢者も多い。

死亡前の介護の状態として、日常生活全体の世話をする必要があったかどうかについては、他の人にも自分にもその必要がなかったという回答が 47%を占めていた。また、親の世話のために自分の生活を犠牲にしたかどうかについても、犠牲はなかったという人が 44%あった。この結果から見ると、約半数近くの高齢者はほとんど介護負担をかけることなく亡くなっているようである。

逆に半数は大きな介護負担ではないにしても、子供世代に何らかの負担をかけながら死を迎えていることになるが、子供世代では経済的負担や実際の介護負担より以上に、精神的な負担を強く感じていることが今回の調査には表れた。

しかし、この結果は本調査が振り返り調査であるためことから、早計に日常生活上の負担より精神的負担のほうが大きいと結論付けることはできない。もしかしたら、実際の日常生活上の負担は時間とともに忘れられ、精神的な痛みが遷延していると解釈することもできるからである。

介護期間の長かったケースは腎臓病やALSなど若年の頃から慢性疾患を患っていたケースであり、介護期間がなかった人は一般的な推測どおり、心臓疾患が多かった。

「コロリと苦しまずに死にたい」と望む声は高齢者だけでなく、多くの人々が望んでいることである。今回の調査では存命している高齢者の多くは元気な日常生活を送っており、十分に生活を楽しんでいた。一方、介護期間の長かったケースは何らかの慢性疾患を抱えている人であった。

このことを考えると、厚生労働省が奨励する健康生活を実践し、自らの努力で健康生活を維持して慢性疾患を防ぎ、体力の続く限り生き抜くことこそ、短い介護期間で周りの人に大きな介護負担をかけることもなく、生の終結を図ることができるようであることが今回の調査からも推察された。

親がなくなったときの気持ちとして、事前調査から出てきた言葉「あっけない」を選択肢に載せたが、それを選択した人が30%近くいた。あっけないという感情が選択されたケースは、必ずしも介護期間が短かったとかいうわけではないらしく介護にかけた期間と関連はなかった。

あっけないという感情がどこからもたらされるのか、死はあるとき不意に肉体的にもたらされるものを感じるのか、または非日常の出来事として意識の中に不意に訪れる感情として意識されるのか、生そのものがあっけないものだと感じてしまうのか、その背景にある意味はわからないが、死後、肉親に「あっけない」死であったとの感情を残していくケースは多いことがわかった。

親が病院・施設で死亡したケースのほうが経済的負担が大きいことは予測どおりであるが、介護のために自分の生活の犠牲があったとする回答が病院・施設で死亡したケースのほうに多いことは予想外であった。死亡前の世話の大変さでも親が自宅でなくなっているケースのほうが、世話の大変さを感じていなかった。その上、親が亡くなったとき何らかの「後悔」を感じたとした人は病院・

施設死亡のケースのほうが多かった。これらの結果は自宅で死亡前の世話をし、看取ることは思ったほど大変ではなく、残される側に後悔も少ないことを表しているといえる。

自宅でなくなる場合は原因が何であれ、インタビュー調査や自由記載に見られるように予期せず死に至ってしまったケースがかなりある。記載には「朝食に来ないので呼びにいったら眠るように亡くなっていた」とか、「何の前触れもなく…あっという間のできごとでした」とある。

いくら「コロリと苦しまずに」と望んだとしても、このような突然の死を自宅で迎えたケースでは残された家族に後悔が残るようすがあった。

結果に挙げた例のように娘一人が働きながらヘルパーの助けを借り、最後まで母親を自宅で介護し、看取っていた。そのケースでは治療の限界があることを母子ともに認め、積極的な治療はせずに自宅で普通に生活し続けることを選択していた。亡くなる当日まで、入浴も食事もとっていたという。親子の会話も最後まで続けられたのだろう。このような亡くなり方は看取りの満足度も高いが、誰にでも、どんなケースにおいてもできることではない。このケースの場合母子2人暮らしであったことから、治療法や生活の仕方を選択するとき、決断に影響する外部の介入が少なく、迷いがなかったことも影響しているだろう。高齢者に関わる人の数(多くは身内の人)が多いと多様な意見がそれぞれの立場から発せられ、治療法や生活の仕方を選択することが難しくなってくることもある。在宅でも看取りは今も「病院にも入れずに死なせた」と偏見で身内から批判されることがあると聞く。

介護保険が普及していることから、家族の準備しだいでは後悔のない看取りができるようになってきている。在宅ケアをサポートする医療者は在宅看取りの成功例をいくつも学び、自分が出合ったケースで療養者や家族に多様な選択肢を提案できるよう情報の集積を個人個人が進めていく必要がある。

4. 今回の研究から見えてきたこと

今回の研究結果を一言でいうと、高齢者はしっかり自立しようとしているし、実際に自立した生活を送り、子供世代は常に親が年老いていく様を気にかけてながら見守っているという日本社会の健全な姿があった。

本調査で存命しているケースでは平均年齢が79.6歳であり、後期高齢者といわれている層であった。彼らは比較的元気で、自分の生活を管理し、目的のある外出をするなど自立して老いを生きている様があった。それでも子供世代から見れば、80歳は80歳、一人で山登りをされたら気になるし、女性に気を取られる父をみると、複雑な気持ちになるのだろう。

子供も実際の親の様子を見てみると、日常生活は自立し、自由に生活を楽しんでいる様子があると思えるのだが、多くの子供世代は親の生活について気がかりなことがあるともしていた。親は老いを自然に受け止め、親子で会うときの話題も子供の仕事のことや孫のことなどであり自分が年老いていくことを特別なこととっていない様子があった。

高齢になっても親は親、なるべく子供たちに心配をかけないようにと気を配っている様子があった。親子の会話もごく自然な日常の話題であり、双方の気配りは親子の関係が希薄になったといわれ

る今の時代においてもなお健在である様子が窺えた。

そのような日々の生活の中で死の迎えかたは、突然に訪れる死よりも、一定期間家族が覚悟を決めながら親の最後を見守る日々はあったほうが良いように思える。そのほうが後悔が少ない様子があった。

死亡場所別死因では悪性腫瘍(以下がん)はやはり病院で亡くなるケースが多かった。「がん」はまだ日本の在宅では看取りが難しいことを裏付けていた。

「がん」という病名は周囲の家族にとって、その名前だけでも恐れを感じさせるものなのかもしれない。医療従事者の多くは「がん」と聞いただけで、おろおろとしてしまう家族には何度も出会っていることだろう。

「がん」は苦痛となる痛みを除去するなど、支援方法がよければ在宅で過ごす期間を作ることができる。

見方を変えれば、今回の調査で自宅でのがん死亡率は施設より少なかったものの、20%弱もあった。これは、がん治療の実績が向上し、生存率が伸びてきたことや予後を読める時期に一度自宅に帰ってもらうような医療者の働きかけが増えたこと、さらには早期退院の政策による影響等幾つかの要因が考えられる。

一言で「がん」の看取りといっても、その場所や仕方については多様であっていい。その人にとって一番よい方法を見つけていく努力をしなければならぬだろうし、人生最後の場所となる看取りの場の選択は本人の生涯を締めくくるとき、大きな考慮されるべき案件であろう。

確かに、「がん」は厄介な疾患ではある。しかし、その治療や経過、予後はさまざまであり、治療の成果を上げる努力はもちろん必要であるが、上手に付き合いながら日々を納得できるように送っていく方法を模索することも家族を含めた関係者の中で検討していかなければならない。

しかし、調査対象者の記載の中には、退院について病院を追い出されると感じたなどの記載も見られ、医療者の対応に不信や注文があった。高齢者やその家族と医療者の情報量や知識には格段の差があることから、今しか家に帰れないという時期を見計らい、好意を持って提案しても、それが酷い仕打ちと受け取られてしまうようでは全く意味がない。現在各方面で検討されている病院と地域を結ぶ連携パスが患者中心に稼働し始めたとき、医療者も患者も双方が納得して次に進む方向性について合意ができるようになるのだろう。

医療の進歩で、「がん」だけでなくいろいろな疾患の治療や苦痛軽減の方法が身近に手に入れやすいものになってきた。医療者のサポートが適切に得られれば「がん」であっても、在宅で看取することはできる時代になってきており、医療者は、「がん」の患者に在宅で療養生活を送れることを提案できるようになった。その兆候が不十分な形ながらも今回の調査には窺える。

本研究の限界として、調査実施地域が限定され、対象者も無作為抽出ではないことなどから結果を一般化できるまでには至っていない。また、亡くなったケースについては子供世代からの振り返り調査になるためその調査バイアスがある。

これらの限界があるとしてもなお、病院や施設に来る高齢者だけを見て、老いと死のイメー

ジを作り上げがちな医療者に、今回の調査で得られたデータは現在の日本における老い方と死に方を広い視野で捉えていく必要性を喚起し、保健医療福祉提供者の一人ひとりに意味ある情報をもたらしてくれた。今後はこの成果を訪問看護ステーションや高齢者施設の職員などに対し、現任教育として取り入れていきたい。

なお、本研究は財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の助成による研究である。

【参考文献】

- ・ 入江裕江（2000）郡部の高齢者の在宅死に及ぼす要因．川崎医療福祉学会誌 10（1）87 - 95
- ・ 栄木教子（2005）どうしたら本人の望む生活を支えきれるかー独居の認知症高齢者の終末期支援から学ぶことー．訪問介護と看護 10（6）471 - 476
- ・ 小林裕美（2005）在宅ターミナル療養者を看取る家族の思いと訪問看護師の支援 主介護者側から見た視点で．日本赤十字九州国際看護大学 IntramuralResearchReport(1347-8877)3 , 77 - 90
- ・ 近藤克則（1999）訪問診療・訪問看護対象患者の死亡場所に影響する因子．在宅医療 26 63 - 70
- ・ 杉本浩章（2003）在宅死亡患者割合に関連する因子の研究．老年社会科学 25（1）37 - 47
- ・ 高木照幸（1998）在宅ターミナルケアの成立条件．日本在宅ケア学会誌 1 67-71
- ・ 中村陽子（2003）在宅死を可能にする要因 都市部・郡部の比較研究から．ホスピスケアと在宅ケア 10（3）263 - 269
- ・ 樋口京子、久世淳子、森扶由彦他（2004）高齢者の終末期ケアにおける「介護者の満足度」の構造 全国訪問看護ステーション調査からー．日本在宅ケア学会誌 7（2）91-99
- ・ 宮本圭子（2006）在宅で終末期を看取った家族へのアンケート調査ー今後の取り組みにむけてー．訪問看護と介護 11（5）498 - 503
- ・ 宮原伸二（1999）農村における在宅死の多角的検討．日本農業医学誌 47（6）879 - 893
- ・ 渡辺美千代（2006）患者は望んでいなかったが、家族の希望により人工呼吸器を装着し、その後、苦しそうな本人をみて家族が悩んだ事例．訪問看護と介護 11（7）697 - 699

【参考資料】

- ・ 財団法人日本訪問看護振興財団
 - （2003）訪問看護サービスの質向上のためのガイドライン
 - （2002）在宅痴呆性高齢者ケアの試行的研究事業研究事業報告書
 - （2003）終末期ケア体制のあり方に関する研究事業報告書 訪問看護ステーションから見た終末期の現状と課題ー高齢者の在宅における看取りを中心にー
 - （2003）高齢者終末期ケア体制のあり方に関する試行事業報告書
 - （2003）在宅痴呆性高齢者ケアに関する実態調査及びマニュアル等作成事業報告書
 - （2004）在宅痴呆性高齢者に対する訪問看護内容とその構造に関する研究事業報告書 , 49 - 71
 - （2004）訪問看護・家庭訪問基礎調査報告書
- ・ 厚生労働省大臣官房統計情報部 Web

資料

1. 事前調査（インタビュー）記録・・・・・・・・・・・・・・・・ p 31
（亡くなった***様について聞かせてください）
2. 存命の高齢者と子供との話題・・・・・・・・・・・・・・・・ p 45
（前回会ったときどんな話をしましたか？）
3. 自宅で死亡したケースの状況・・・・・・・・・・・・・・・・ p 55
（亡くなった***様について聞かせてください）
4. 死亡時の様子・・・・・・・・・・・・・・・・ p 63
（亡くなった***様について聞かせてください）

資料 1.事前調査インタビュー記録（一部削除あり）

話をした人：60歳代夫婦、ケース 父親（享年 88 歳）

Q：亡くなったお父様について聞かせてください。

妻：おじいちゃんは独りになって、うん、立ち退きもあったんで、兄弟一回集まって、相談したの。どうするか。父親のことをどうするかって事で相談したの。だけど、だれも引き取っていくとは言わんねん。なあ。長男も次男も。こういう性だから、頭カチンと来たわけや。そんなんなら俺が見ると。どうせここのうちお父さんお母さんもいなくて、裏も一部屋どうにか空いとったから、じゃあそこに住まわせるかってことで、もうほんとにもものみんな捨てて、身ひとつくらいで来たんだ。だって持って来たって入らねえ。

Q：ふーん。そういうときもあったわけだ。それから一緒に生活するようになって、一緒に生活してどうでした？

妻：じいちゃん丈夫だったよな。

夫：うん。

妻：ほんとに倒れる、倒れて寝込むまでは丈夫だった。

Q：倒れたって何で倒れちゃったの

妻：なんだったんだろあれ。うーん、何で倒れたんだったっけなあ...覚えねえんだよな。ずーっと××さんへ（近医）心臓、狭心症と高血圧と喘息この3つがあるんで、ずっと毎月通って、薬はもろうとった。どうしてって言われてなあ...ほんとに5年だったんだから、80だよな。具合悪うなったのが88くらいからかなあ。なんかだんだん所作が悪くなって、まずね、足が痛くて、足の壊疽っぽい、なんか足の親指の辺りが紫色になって、ほいで、これはなんだろうって診せに行ったあたりから始まったような気がする。

ほしていっぺんあんまりゼエゼエいうので、おかしいなってことで、病院行ったら、結局なんか肺炎かなあ、なんか様子がおかしいから入院しましよって入ったのが始まりや。そんな時に20日、20日間、40日入院したんだよ。そいでお父さんと二人で20日ずつ交代で夜付き添いにいったの。そこの病院はほら、付き添いやらないから。そいで付き添いしてくださいってことで行って、やり始めた。なにがって言われても、ちょっと覚えねえんだけど、まあ、丈夫な人だったから、ずっと犬散歩しとったわけだから、ある日突然なんかガクッときた感じやなあ。

Q：で、その入院の交代で当直してたときは大変だった？

妻：大変だったなあ。まず、日中眠って、夜はぜんぜん寝ない。だし、20日間起きとったわけだから寝られんで、だから私すっかり体、体調悪くなった。夜勤やっとする看護婦さんたちって強いなあって思うよ私。

Q：今入院してる時の話を聴いてるんだけど、20日間交代で入ってたって、そのときおじいちゃんは大丈夫だった、体調は？その入院を境に、なんかすこし変わったかしら。

妻：うん、生活のリズムがね、私たちが変わった。

Q：退院してきておじいちゃんはどうだったの？

妻：退院してからもずっと見いならんってな、歩けないんだから。でも、どうするかってことを、ま、あちこち相談して、ケアマネージャーってのがおるからってことで、ほいでまあ介護制度もできたときだから、じゃあもう、いの一番に頼もうってことで、まあ、おかあちゃんのアドバイスもあったけど、ほいで、もうほらご飯も届けなきゃいけない、全部運んでやらな降りられないから、ご飯も届けにゃ、おしっこだってたれるんだから、だからしょっちゅうご飯やったりオムツあてて。耳もぜんぜん聞こえん。だから全部暦を切って、マジック置いて、筆談だから。その—自分の意思が相手に伝わらないっていうのが一番困った。うーん。だって言いたいこといっぱいあっても筆談だと簡単に書かじゃ理解できん。そうすつと、そう書こうかなってのもあるし。うーん、この人本当に理解して返事しとるのかなっていうね、疑いが常にあった。いいかげんに見て、あんあん、面倒くさいからこうなづいとるっていうようなふうにも見えたんだがなあ。自分の子供だから、見て当たり前っていうのが昔の人の頭にはあるじゃん。だから、必要以上に私にわがまま言うた。お父さん行くと絶対言わない。それが不思議だよなあ、やっぱりなあ。お父さんにはもう、見てもらってるっていう頭があるんじゃない。子供にはお前が看るのは当たり前だって頭、たぶんそういう気持ちがあったんだと思う。だから私にはもうほんとにガミガミガミガミ怒ってばっかしおった。

Q：ふーん、じゃあ、あんまり手はかからなかったってふうにしてたのかしら、ご主人は。

夫：親父さん見ててか、そりゃそうだなあ。

妻：お父さんから、2階から降ろすときに手伝ってもらうとかなあ、車に乗せるとき手伝ってもらうぐらいか、それで、足が痛いから、足から始まったんや、足が紫色になってるって靴下はいとるからわからなかったもん。ほして、足痛え、足痛えっていうから、どう出してみいっちゃっていうて、出したら私びっくりしたわけよ。なにこの紫色の足はと思って、なんでこんななったって、それから病院にいった、入院から始まったわけ。そうだ、足や。足。足がねえ、左だったと思うな、足の親指の側面、内側だったって外側だったって、どっちかが、こんなタコみたいなのができとって、ほいでブス色になっとったの。足の先が。ほして血液の循環が悪いから、ちょっとぶつかっただけでも痛いわけ。まあ、壊疽の始まりでしょう？それがみつかった病院に入った。ほいで見たら足がもう、なんていうんだって、あの、水虫。でもうガサガサになっとったわけよ、わ、汚ねえと思ってびっくりしちゃってさあ。だし、まず困って、あの一、ヘルパーさん頼んで、まずはお風呂。うちでお風呂入れられないんで、二人でやるって風呂狭いからできんで、一人じゃできんし、お父さんにやってもらわねえもん、これはなんか制度使わんといかんよなと思って、週2回ずつお風呂目的でデイケアつうんだって、デイサービス、それに出した。それとあとはあの、病院から帰ってきからは、薬、足につける薬、それと消毒を15分やってから、拭いて、薬を塗ってやる。それをまあずっとやとったけど、私にはわがままですわけだ。な。そうすつと、こっちもケンカになるわけ、親子だから。ほうでもって、だけど、戦争で足も悪いのも知るとるから、足悪いうえに片足悪くなればよけい歩けんねん。本人もまあ自分で情けねえと思うか知らんけど、子供はねえ親が崩れていく姿を見るのが一番情けねえわけ。

あんなにがんばってた人が急にこんなになったかっていう、ギャップ。それがものすごくあって、すっごく自分の父親が情けなく見えたのよ。これがほんとの姿とか思って、あの時はがっかりしたなあ。がっかりした反面、もっとしっかりしてよってという切ない思い。その両方。

夫：母ちゃんがそういう親を看とると、そういうイライラとか不満とか、ストレスとか、あんまり外へも出られんかったりとかいろんなことがあるのの不満が今度はこっちへぶつつかってくるわけな。

妻：ふいふい、ほうだろうねえ。

夫：そういうのを受け止めてやったりとか、そうだねえとか言うたり、なぐさめたりとか、そういう役をやらんきゃいけないわけ。実際の親とは別に、介護してもらおう親のほうとはそんなに対話もないし、そんなに手はかからんだけども、今度は家内と、自分たちの夫婦関係の問題っていうのがそこに出てくるわけよ。そうすると、多少こっちがカバーしてやらないと、どんどんどんどん落ち込んだりとか、それからもうテイセイ目におうとるとか不満たらたらになってくるわけ。そういうのを...

妻：タイミング的に悪い。倒れて、寝始めた頃にお嫁さんもろった。な。そうすると、じいちゃんの介護のおまけにお嫁さんにも気いつかわなならん。全部重なったから私ね、全部きたんだと思う。だから、口が開かなくなったり、胃が痛くなったり、頭が1ヶ月痛かったりとか、自分で我慢するから、言っちゃいけない言っちゃいけないと思って我慢して、相手はつんぼだし言ったって聞こえない。お嫁さんに言えばケンカになるっていう頭あるから、自分で我慢して我慢したのがさあ、それで、ちっとはお父さん助けてくれればいいのに助けてくれないとかさあ、そういうストレスが全部、まず最初に頭痛になった。1ヶ月。それも、やっぱり1ヶ月頭痛薬、漢方薬出たんだけど、サワダ病院で。でも、たしかにそれは1ヶ月近く、15日くらいのだかなあ、そしたら治ったの。あ、治ったしいいわと思って、あんまし頭痛薬のむといけないっていって、その漢方薬をだしてくれた。そしたら治ってきたけど、そいで、原因はっていったら、ストレスっていわれた。そして、次に悪くなったのが、口。口が開かないや、飯食うとったら口が開かんから、こう横へこう入れて、なんで私口があかんやろうって、えー、顎関節症とかこういうのをいうかなあと、初めてなったからわからんわけ。そいで、やっぱり、歯医者も行った。サク病院行った。そしたら、どっこも悪くないと。なんかストレス抱えてませんかって言われたの。もう、あ、そんなことかあって自分で納得したの。ついに、胃だ。それが3月。ほいでそれも胃カメラのんだ。バリウムなんか必要ないから、即胃カメラってなって、胃カメラのんだら、とっても胃はきれいですと。胃酸がすごくたまってるから、胃酸を少し抜きますねって、胃酸ぬいてもらったらけろっと治ったの。そして、先生なんですかっていったら、やっぱり、奥さんなんかストレス抱えてませんかって。全部ストレス。3人が三様ストレスだったわけよ。だって最終的に、ま、更年期も、49に生理あがったから、始まってもおかしくないわけじゃない。それで、やって、東京の病院行ったの。あれは、更年期科、っていうのかかったら、更年期は奥さんたいしたことない、かかったときはね54だったんだよ。私更年期でダメなのかなあと思って、体調が思わしくないからね、あちこち治ってはきたけど、全体のバランス的体調がよくないわけじゃない。それで、行ったよ。そしたら、やっぱりストレス。心療内科に行きなさいっていわれた。そいで、心療内科に

いける時間ありますかって。あ、心療内科っていうことは少し心の病だなって私自分で思ったのよ。うつけか、ちょっとうつけに入ったのかなって先生言うたことでピンときたから、え、心療内科なんてこっちにありませんて。じゃあこっち来たときだけでもかかるように先生紹介するって言うてくれたけど、や、いいですって言って、病気の原因がわかれば自分で治す努力するからいいって。ほいでそのとき 50 から私下着の仕事も始めとって、売り上げとか、じいちゃん看ながら、……、孫も見ながら、全部だったもんで、全部しわよせが来たんだと思う。仕事しとるってのは私にとっては楽しかったの。それが唯一逃げ道。仕事して収入がバンバン入るんだから、やればできるじゃんとか達成感があるじゃん。

Q：うん。じゃ介護しながら仕事を始めたことは辛くはなかったってこと？

妻：うん。辛くはなかったけど、うーんとね、ものすごくおじいちゃんに対してのストレス、口が開かんほどのストレスが、いっぺんに来たの。それがやっぱり我慢してるから、もう、東大の先生じゃないけど、あなたは自分の体をあちこち痛くしてストレスを解消しとるわけだったわけや。これがなんにもでないと精神がやられる。そう言われて、なるほど私体痛くして出しとるってのはいいんですよってこと言われて、あそうかあって納得したの。なるほど、そうするとなんも出なくて黙って我慢して精神やられたほうがかえって悪かったなあと、そういうまあ、反省点、先生に言われてなるほどと。仕事もちょっと下火になって、下火になったちゅうよりも私が出れなくなったんだよ。出れなくなって仕事をもらいに行けなくなったってゆうのがある。

おじいちゃんがどんどん悪くなった。もうぜんぜん動けなくなった。だからおばちゃんのアドバイスで、なるべく短期入所、そういうのもある、そういうの使ったら？それで体休めたら？って言われたのをきっかけに、1週間の短期入所と、夏になると2階だから暑いじゃん、そうすると暑い暑いって文句をたれるわけ。まあ本人も切ねえだろうなあと、私たちだって2階に上がれば暑いんだから、扇風機じゃダメだよなとか思って、かといって寒い寒いって血液かなんか知らんけど、回りが悪いから、異常に寒がるところもあったんで、そうかと思ってなるべく夏、7月の終わりから9月の初めまでの1カ月、必ず夏に1ヶ月入所さしてもらった。そうすると快適じゃん。涼しいところにおってたいらな場所であらうじて歩けるんだから、何かつかまっとれば、それから車椅子で行動はできるんだからさ、1ヶ月、最初はもうねえ、オレを邪魔にしやがってお前は子供の癖に恐ろしい娘だって怒られたのすごく。でも、それ言われるときの私の気持ちわかる？

Q：くやしい？

妻：うん、一生懸命みとっててもそんげんことしか言われんのかとくやしいのと、やっぱり情けない。ほいで、弟たち来ると、親が一生懸命わたしの見えんとこで、あれは与太だ俺の財産押さえとるとかなんとかいらんこと言うわけ。そすとまあまあ、長男たちは一切見てないから、姉ちゃんのみとるんだしそういうこと言うもんじゃないって言って、うん、なだめとるのちゃんと聞こえとるからさ。ま、それはそれでいいんだけどね。どうして年とって動けなくなってくると、ああいうふうにももの考えるのかなあ。

自分もだんだん年取ってそうなるんだかなあ。

夫：悲しいなあ。

Q：そうするとおじいちゃんを看るってことで介護は他の兄弟にはとくにはいかなかった。自分たちが全部背負ったんだね。

妻：二人ともほら、東京にいるじゃん、来れないじゃん。ね。奥さんだって1回ね、1週間くらい来たかなあ。それぐらい。後は一切来ない。

夫：みんながそれぞれ事情を持ってるからさあ。やっぱり身近におるもんがやらにゃあいかんということなんだよな。それから身近におる身内の方が面倒見なきゃだちかんでことなんでしょ。だから、これが逆の立場だったら、俺のほうを見るかどうかわからんけど、オレ自身がダメだけえ... 八八八。

妻：逆にさあ、私なんか今回の看て財産問題からなんからいろいろあったから、正直言うけど、日本の法律ってねきとおかしいと思う。だって看なくても看ても財産で分配でしょ？てゆうのは親をさあ一生懸命看た人に、一番苦労しとるわけじゃん、一番大事なことをやらない人たちがその、よこせていう権利があるっていうのがねすごく私おかしいともう。それだけいうのであればやっぱし、兄弟自分たちが看れんのであれば、申し訳ないけど看てくださいって、兄弟がお金を、ねえ、例えば私たち夫婦に、じいちゃん面倒見賃とかって、ちゃんと送っててくれて、お互い助けることができれば。一人看ることによってさ一人動けなくて家にお金が入らないのよ。収入ゼロになるんだよ片方の収入は。そしたらみんな子供には責任があるわけじゃん。そしたら自分たちが看れなかったら、やっぱしその看てる人に対して、例えばお姉さんが働けなくなったからせめてお姉さんの収入分、全部とは言わんけど少しずつ足しになるようにって兄弟が送ってくれるとか。そういうことをすべきだと私は思った。

Q：大変だったからなあ。

妻：うん。だって一生懸命やったらなんぼになったかわからない。お客さんだってまだまだ続くわけだに。

夫：ぜんぜんあの、兄弟も親戚もそうだけどね、権利ばかり主張してさ義務ってものをちっとも果たさないで、自分の権利を主張するからおかしなことになるんだよね。

Q：でも最終的には入所は、長期のロング入所はしなかったわけでしょ？

妻：最終的にした。1年間。

Q：あー

妻：4年家にいって、私がほら孫二人できたじゃない。両方見れんて。私がもう参ってしまうもんで、孫の里を入所申し込みしたばっかしだったの、して1ヶ月くらいだよなあ、偶然向こうから電話がきて1つベッド空きましたけどどうしますかって電話がきたもんで、私急だったもんでちょっと困ると思ったわけ。じいちゃんにも話してないし。そしたらこっちが聞いとって、もうすぐお願いしますって返事せえって、もう予約、すぐお願いしますって返事して、じいちゃんには言えないまま入所させた。ほしたらね、ぶすこいたって、入所した場所でもね、看護婦さんがなんか言うて絶対に返事しなかったんだ。疎外感？自分はこういうところに捨てられたんだっていう気持ちがあったんだと思う。でも、1週間にいっぺんずつ孫連れて、結局おやつもって、会いに行っったの。そうすると大きな声で、つんぼだから自分じゃ普通でしゃべるつもりだけど、

人の倍の声で怒ってくわけや。キサマ俺をこんなところに入れやがってって言って怒るわけ。まあ私そのときにさ、あのおじいちゃんがああいう言葉を使うかなあ思っぴっくりしたの。普段はほら俗にいう営業マンだったわけあの人は、営業マンだったから言葉でも何でも丁寧な人がさ、そういうこと言うのよ。あのギャップはさあ、びっくりしたな。なんせ急だったもんで、本人を納得させるだけの時間がなかったっていうのは確かなんだよ。それが1週間でもな、1週間待ちますからどうぞっていうならよかったんだけど、そしたらその1週間でそんなこんな入るよってこと教えていくんだけど、急にきて急に明日入ってくれて感じだったんで、ベッド空けとくことができないってわけや。そうすると他の人にいっちゃうって言われたから。ああこれはすぐ入れなきゃって。

Q：そうすると入所して1年間。

妻：1年間はよかったの。1年たって、5月に入所して翌年の6月にどうも肺炎みたいだあって、体調悪いって、入院してくださいってことで先生のほうから、孫のね孫の里の主治医やってる人から呼び出しくうていって、こうこうこういう状態だから、そちらの病院のうほうへ連絡しますから行ってくださいって、そして連れて行って、即入院だった。そいでまあ2ヶ月かな。

Q：病院で亡くなったの？

妻：病院で亡くなった。でも、私はその病院告訴したい。

Q：どうしたの？

妻：亡くなった原因はもっともっと生きる人なの。でも亡くなった原因として病院の過ちがあるの。

Q：うーん、なにがあったんですか。

妻：あの一、食事。

Q：あ、食事詰まらしたんだあそこ。そっかそっか。

妻：そう、グリーンピースが入ってたの。豆が出てきたっていうんだもの。豆でも、私にさあなんか食わしたんじゃねえかって言われたけど、私はぜんぜんそんなもの食わしてねえから、おかしいなあとって、気が付いたときに、あ、お夕飯にそういえばグリーンピースがあったってのがわかったんだろうな。豆腐のあんかけのところにグリーンピースがね3つくらいあったのよ。3つか4つあったの。あれをほら、スプーンで、すすんでしょ。それが入ったらしいのよ。

Q：そうだそうだ。そういうとったな

妻：うん。だから、それに対して病院はひとつも謝りがないうってこと。ね、看護婦さんたちはわかってるわけや。看護婦さんが教えてくれたんだよ、豆が入ってましたって。でも、もう私んとも85だし、ここでガタガタ言って裁判沙汰起こしても病院も困るし、こっちはまあ面倒看てもらうたんだしと思うて、だまっとったけど。あれは病院の方からもちょっと謝って欲しかったよな。申し訳けなかったって一言あったらよかった。なんか私が次の日出張で、その出張のために、私はいつもは9時までいるんだけど、消灯の時間までいるんだけど7時ごろ帰ったの。仕度がなんもしてないんで。それで今日早く帰るからなっていいたら、なんだ早く帰るのんかってものすごく怒ったの、やっぱり居てもらいたいわけ、本人は。少しでも長く。そして、早く帰るのんかって怒ったから、私明日出張、出張で東京いかんきゃならんし、て書いたの筆談で。だから仕度を

せんなんから、今日は早く帰るって。そして明日1日来れないから、看護婦さんの言う事をよく聞くようにと、わがまま言うなってことも書いてやったの。そしたらプーっと横向いちゃって。あの顔が忘れられん、子供と同じ。赤ちゃんと一緒に。もうああなると頼っとんだよな。そして帰ってきて夜中の2時ごろ。電話きて、何だと思ってびっくりして飛び起きたら、ほしたらお父さんの様子がおかしいちゅう、すぐ来てくださって、気管切開せんとだちかんでいうたから、私行くまでに待っておられんっていうんだもの。じゃあ、すぐ手術してくださいってことで。気管切開するって話でてんじゃん、なあ、それでベッドに寝とってさあ、一生懸命目でな何か訴えるんだけどわからんのみんな。あれは何を言いたかったのかあと思って、ずっとそう思ってるけど。

Q：で、気管切開して最後どうしたの。

妻：最後はどうしたのって、最後は徐々に徐々に。もう延命処置つけて、徐々に徐々にだよなあ。

Q：じゃあ、そのグリンピースの件がねえ...あれだったんだ。

妻：すごくね。だから病院の食事でも年取ってものをすすることしかできない人に、あんなものを出さってという不注意だと思うよ。そういう食事の面もやっぱり気をつけてもらいたいなあと思う。

Q：病院に入っているときもけっこう頻回に足を運んでるじゃない。入所してるときは1週間に1回。病院にいるときは...

妻：1年間入所したときもずっと1週間に1回ずつ、用事ができて2週間目に行くときとすっごい怒るから、で、もう、そうだなあ半年くらいたった頃に追う子に手を引く子に二人連れてしょっちゅうお土産もってちゅうかおやつもって、あの人桃が好きだったからよく桃買ってったんだけど、そのときにねえ、もう、もってくじゃん、そうすとねえ、ああいうところでも食べさせないのかどうかかわからないけど、皮の付いたまま食べようとするの。私、待ってって言って皮むいてやったりとか。だってね、最後に言った言葉がさあ、おめも二人おっちゃん俺の面倒看れんなあと。だし、おやつはいらんし、しょっちゅう来てくれって。やっぱりさみしいんだよ。

Q：じゃ、足を運ぶことはつらくはなかった？

妻：辛かった。

Q：辛かった。

妻：やっぱりね1週間に1ぺんでも決められて枠にはめられちゃうから、その枠にはまるっていうことが、やっぱりきつい。そしてほら、二人孫見とるんだからやっぱりある程度の仕度も全部していかないといけないわけじゃん。店は仕事はあるし、お父さんたちに見とれていうわけにもいかんし、やることやって、出ていかなあならんなんていうと、もう判押ししたみたいにやって出んならんからな。やっぱりだからね枠にはめられるっていうのはすごく精神的にはきつい。息抜きできない。いつ行こうか、いつ行こうか、何時に行こうかいつも思っているわけじゃん。今日は行かなきゃならない。もう前の日から明日は行かなきゃって観念がもうすごく出てくるから、それはきついと思うよ。たった1週間のうち1ぺんだのになんだって思うかもわからんけど、拘束されるわけじゃん。な、その時間でいうのは、日曜日はいかなきゃって頭があるから、だって行くとなんとほら受付に見舞いに着た人の名前書くようになってるわけ。そういうのを見てどうも入所者にどれだけあの人に来とるか見るんだと思うんだけど、ぜんぜん来ない人もいるんだって。

だから、そういうことはなるべくして欲しくないって入所の人に言われたからさ。

Q：じゃ、家に居るときよりも入所してるときの方が楽だったかしら。

妻：いやあ、二人おっかし、全然楽なことなかった。私はぜんぜん楽はしなかった。もうストレスたまってストレスたまって。ピーピーギャーギャーけんかばっかしやっとなってもう。あのじいちゃんのおらんかった分ね楽になったかという、私はちょうど孫を見んならん時だったもんで、二人重なったからぜんぜん楽じゃありませんでした。一人学校へ上がってね、はじめて今楽。すごい今楽。だしやっぱしじいちゃん見て、孫を見てると10年つぶれるね。もう女の人が結婚して赤ちゃん生まれて10年つぶれるのと一緒や。10年は身動きとれん。そんなときに仕事はじめて、成績と両方いろんなことが重なって、てかんじやなあ。だから、人が増えればさあそれだけお金が出て行くわけじゃん。そしたらどっかで稼いでその穴埋めをせんならんねん。

Q：その最後のね、2ヶ月病院に入院してたときは毎日行ってたでしょ。たいへんじゃなかった？

妻：大変だよ。

Q：泊まりとかはしてたの？

妻：したよ。最後の週1週間はずっと病院から1歩も出たことないっちゃ。

Q：気管切開をしてから1週間だったのかな。

妻：んー違う違う。気管切開をしてからは1ヶ月くらいいたんじゃないかな。そして最後の方へきて1週間くらい前、約10日くらい前だったと思うけど、様子がちょっとずつおかしいし、もうずっとついついてください、もういつどうなってもおかしくないから居場所をちゃんと行ってくださいって。

病院じゃ一睡もできません。うなってる声から器械の音からもう私神経質だからさ。もう寝られんで寝られんで、もう切ねえ。そいで、待合のどこいって横になってみても待合には電気ついてるし明るいし、アー何処で寝ようかって感じだったっちゃ。ほいで、わめくのんが聞こえるの。いつだったか恐ろしいわめいてる声が聞こえたんで私みにいったの、そしたら、下の階だってさあ、私知っとる人だったんだ。おっそろし暴れとるわけよ寝とるのに。もう奥さんもあかまっとるし、あ、奥さんじゃない、娘、娘が私より1こ下だけ知っとる子なの。ほしてもうお父さんって言っかって、もう夜中だから寝とる病人たちも困るわけだね。そしてとうとう看護婦詰め所の方へねベッドごと運ばれちゃって、入れられてそれから静かになったけど。まあ看護婦さんも大変だなあと思ったっちゃ、あれ見てよ。そのおじいちゃんも死んだけどな。その看取った家族っていうのが、家のじいちゃんはおわがまま、男の方がわがまま。女は我慢。迷惑かけてならん頭があるからさあ。お嫁さんに対しても我慢する。男の方がねわがまま。特に奥さんがそばにおって生きとるとすればもう散々わがまま言うの男だよ。男の方がこらえ性ないよな、そこいくと。

妻：お父さんが入院してみても思ったことは、看護婦さん。あまりにも差がある。

Q：あ、そりゃそうよ。

妻：なあ、いい看護婦とダメなんとの差がありすぎてありやびっくりすんだよな私は。みんな同じ教育受けてきてるはずなのにとかって思うんだよな。

Q：そんなもん。

妻：あれはたまげたよ。 病院おるときもたまげたけど、××病院いっても変わらんかったのにはたまげた。いい看護婦さんはねよけいなこと一切言わん。患者が不安がるようなことも言わん。だちかんのはちょろちょろっというてだちかんもんなあ。なんだこりゃあて名札見ると、名札見とると気づくのかもしれん急に態度変えたりするけどなあ。

夫：さっきの、なんだっけ、訪問介護のヘルパーさんたちも、頼んでる人たちにいわせるとその人によってずいぶん違う。段取りが悪いの、いうてもちっともやってくれんの、まあやっぱり人間性でね。しょうがないんだろうなあとは言うけど。もうそれはそういうもんだと思ってあきらめにゃだちかんでことだ。

妻：介護にねえ、あんまり若い人は合わんじゃねえかと思うがや。ある程度、ちょっと経験した人。結婚生活長くしてさ、ある程度舅さんとのやり取りしたりとか、経験した人のほうが合うんじゃないかなあって私思うよ。あの、探し方が上手だよ。若い人は一生懸命やっ取る姿みると下手だ。

夫：段取りとか要領悪い。

妻：悪い。

夫：経験がないから、少ないからなんだろうけど。そういうその仕事の内容にしたって、準備から段取りからやり方があるわけじゃない、そういうのがただマニュアル通りにやるとか、そんな具合で応用がきかないっっちゃうかさ。それじゃあうまくいかないんだけども。やっぱできないんだよな。機転が働かないの。

妻：そこはあるな。一番私が思うたのはYの里。Yの里行って風呂入ってくると必ずじいさん風邪ひくの。で、K老健センター、あそこに行って風呂入ったときは風邪ひかんの。その差は何っていったら、こっちは若い者ばかりだけ、経験者がたらんねん。だから風呂に時間かかったんだと思うの。ゆっくりあっためてあげるそういうのも時間はなかったんだか、だからやはたの里に文句いったことがあるよ。お宅いくと風邪ひいて帰ってくるどういうんだやって。お風呂のつかわり方悪いんじゃないのって。下手なんじゃないのって。いうたことある。老健センターさんに行って風呂入ってくるけどぜんぜん大丈夫だよって。どっか違うんじゃないですか。もう少し考えてくださいっていったことあるよ。

夫：そういうのお互いいとこ悪いとこ何処でもあるんだからさ、そういうの交流して見たり見られたりしてくれるといいんだけども、そうすりゃお互い切磋琢磨してようしていかんかってことになるんだろうけど、自分たちはこれでいいんだって頭でおるってことになるってと進歩せん。ようはなっていかなだろうしなあ。他の見るっちゃうとああいうのはもう少しこうしたらいいんじゃないかなあって自分で判断できるわけや、自分たちやっ取るのはそれがいいもんと思うとるからわからん。ほかの見るっちゃうと、ああ、ああいうやり方もあるのかとか、ああするとまたいいんでないかっていう、自分に置き換えて反省できるからなあ。そうするとまた進歩するんだろうなあ。だからもっともっと...

それと、あの、看護婦さんたちのお客さんたちに対する態度。もっと勉強してもらいて言うかさ。おらんち商売やからそんな態度したらお客さん逃げるのと一緒だに。病院だけ客商売だ。

インタビュー記録2（一部削除あり）

話してくれた人：60歳代夫婦 ケース：母親（享年80歳）

夫：うちの家族とか誰も骨折しないんだけど、最後におばあちゃん骨折しちゃったんだよね。やっぱり高いところから落ちたら骨折するわ、年寄りで。

Q：高いところってどれくらいの高いところですか？

夫：えーっとね、あの、階段じゃなくてね、窓があってね、あの、窓の、おばあちゃんの部屋の窓のすぐ下がね、1メートル2,30あったかな、あれね。そこから落ちちゃったの。あのね、そうなる前にハイテンションになっちゃったんです。

Q：ハイテンションになっちゃったの？

夫：テンションがあがちゃって、お祭り関係の仕事もしてたから。夜中にお祭りがいっぱい通ったから、商売に行かなきゃなんないっていうんで、その戸を開けて飛び出しちゃったわけ。一人で寝てたからね。誰も気が付かなかった。それで骨折したみたいなんだけども、誰も気が付かなかったんだよ。そしたら朝、犬があんまり吠えるんで見に行ったら、階段のところうづくまってたっていう...

Q：その窓の下の？

夫：そうそうそう。

妻：あれ、2時間くらいは階段のところをいたんだろうな。

夫：そうそうそう。とにかくね、テンションあがってたんですよ。そうなる前。何日か。

妻：でも、わかんないよ。階段のところをいたんだから、こっちから出たのかもしれないし。そしたらあそこまで、俺は歩けないと思うよ。

夫：わかんない。誰も見てないから。ずーっと言ってたじゃない、自分で、とにかく祭りだ祭りだってね。祭りだから行かなきゃって。ははは。おかしい人だね。そういうの好きだから。

Q：ほんとに夜中に祭りが通ったんですか？

夫：通ったって言うんですよ。

妻：いや、祭りじゃない。

夫：見えたの見えたの自分で。いろんなテンションあがってて、その前にいろんな話聞いて、テレビでね、あのー、姪っ子のね旦那がねテレビの中で踊ってたとかね。なんだかそういうこと言い出したのね。あれ、ちょっと変になったのかがあって思ってただけだね。ちゃんと話するとそうでもないしね。テンションあがってるだけかなあと思ったんだけどね。ちょっとおかしくなったのかもね。すこしはボケが始まったのかもしれない。

妻：うーん。ぼけちゅうんじゃないなあ。

夫：なんか睡眠薬をずっと飲んでたんだよ。睡眠薬飲まないで眠れないって言って。そりゃそうだって、昼間こんなに寝てたら夜は寝らんないよって、よく言ったんだけどね。

Q：寝ていることが多かったんですか？

夫：寝てるが多かった。寝ると一生寝てることになるよなんて言ってたんだけど。

Q：じゃ、基本的にはお家の中で一日過ごしてた...

夫：ほとんどね。最後はね。その何年か前はずいぶんね、散歩やなんかしてたんだけどね。散歩してましたよ。一人でよく歩ってましたよ。

妻：まあね、まず朝、新聞を読んで。

夫：株やってたからね。お金儲けが好きな人だったから。

妻：それから、書くこともよくやってたしね。本もよく読むね。だから、ほんとに亡くなる直前までそういうことはやってたよ。

夫：元気だったよね。

Q：ほんとに元気だったんですね。

夫：そうですよ。朝、毎朝私がお飯の仕度して下でご飯食べさせてあげて、1時間くらい話して。

妻：で、米寿のときは、全部子供から孫から、ひ孫までいたか。それで、全部で伊東の温泉でお祝いしてね。金ももったいないって言ってね。そんでもカラオケが付いてたら自分から歌い始めるくらいだからね。活発な人だった。で、みんな歌うと喜んでね。手たたいて。

夫：ここらへんいいるとなんかね行く末が見えてね。みんな旦那さん死んでさ、女の人一人になっちゃうでしょ。なんか自分の行く末を見てみたいでね。

Q：ほんとに女性の方が長生きするんでね。

インタビュー記録3

話してくれた人：60歳代夫婦 ケース：妻の母（享年90歳）

夫：いや、うちは、私はね子供の頃にもう両親なくしてるからね。で家内のほうはね、えーっと、うーんと、東京にいるときに亡くなったんだけど、やっぱり家内もお父さんは早く亡くして、お母さんはいくつだったっけ...。90か。90まで元気でやってて、で、まあ、あれはね、階段で転んだのか。あれで骨折したのがなんかね、 の人になったような感じなんだけどね。手術をして、それが痛くてやだっというんで、外しちゃってなんか化膿しちゃったみたい。それで一気にね。だから病院に入った期間ていうのはほんのわずかだった。

妻：1ヶ月だった。

夫：1ヶ月で亡くなっちゃった。

妻：それまで一人で、自分で歩けるもんね。だから介護経験がないんですよ。

Q：そうですよね。そうするとほんとに急に亡くなったかたちになるんですね。それまではご同居されていたんですか、お母様と。

妻：同居っていうかね、建物が一緒っていう...

Q：あー2世帯住宅。、そうするとあの、ほとんど一人で自立されていたっていうことなんです、骨

折をされてから病院に入院されている間っていうのはその、介護っていうかその病人の世話ですよ。それは誰が主体で行っていたんですか？

妻：兄弟みんなで替わりばんこで。でも2晩、3晩つつくくらいしかしてないんですよ。亡くなっちゃた。泊りがけで。

Q：その間とくに、ぼけたりとかはなかった？

妻：全然なかったんですよ。最後までしっかりしてたみたい。

Q：じゃあほんとに急だったからまったくわからないっていう状況ですよ。

妻：介護はね。うん。家兄弟が、私兄弟が多いんですよ。女の子5人もいるんで。みんなで替わりばんこに病院に行って。ほとんど完全看護だったんで、ただ一緒にいるって感じだったんですけどね病院ではね。

夫：家の近くにあった病院だから。あの、母親もね自分でもって風邪ひくと、自分でさっさと病院行って入院さしてくれって...

妻：冬は暖かくていいとか言ってね。ははは。病院にいるほうが暖かくていいって。

夫：もともとあれはね、省管轄の病院だったみたいで、それがなんか地域の人だけは入れるようになったんだよね後から。だからそこへ1回入ったら、自分でさっさと風邪気味だっていって、ベッドが空いてると入院しちゃった。

Q：ご家族にはまったく、体調が不良だっというような話はされなかったんですか。

妻：まあ、あのね、肺気腫だったんですよ。タバコ60年くらい吸ってたもんで、肺気腫になっちゃってね。それでもうすっかりタバコは止めたんだけど、ずっとやっぱしすごく苦しかったらしいんですよ。先生が言うにはその苦しさに慣れてたんだらうって。これでよく生きてたっていうんです、最後には。こんなにすごい肺気腫でよく生きてたって。それがもう慣れちゃって、苦しいのがもう慣れになっちゃっててね。はあはあ、はあはあ、言ってたけどね。ずっと。

Q：そうすると調子が悪くなればご自分で病院に行って。

夫：そうそう。

Q：入院されたら急に入院したよって事後報告になるんですか。

夫：いや、あの電話かかってくるから。

妻：普段入院するとき？あ、そういうときはもう、そばにいるからねえ。いろいろ道具やなんか揃えて持っていかなきゃなんない。

夫：入院もね、1週間としないんだよね。3,4日。

妻：いや、長いときもあったけどね。ま、とにかくなんでも自分で最後まできた人だからね。

Q：ま、一緒にお住まいだったってことでちょくちょく顔も見られて...

妻：そうですね毎日。顔見に行って話したりしてたから。

Q：肺気腫だったことですけど、特に在宅酸素をすることもなく...

妻：してたんです。

Q：あ、してたんですね。じゃあ、行動範囲もけっこう狭まったりして...

妻：それでもね、けっこうよく近所に公園があるんで散歩はしてたんですよ。最後の方は病院もね、

つい一人で行っちゃうんですよ。そうすると看護婦さんに怒られるんですよ、私たちが。ダメですって、誰か一緒についてきてくださいって。一人で行っちゃうんだからしょうがないですよ。

夫：あんまり手をかけないようにと思ってたのか。世話になんのもやだったのか。だからねえ、もう最後の方なんて、家ほら、家の3階で、もう冬でもずっと日当たりがいいもんだからね、だから暖かいんですよ。で、お母さんも1階にいたでしょ。暖かいところ3階へ引っ越して来いっていうんだけど、やだっがんとしてということ聞かなかったもんね。そのくらい気丈な人だったからね。なんでも一人でぱっぱぱやってた。

Q：で、急に骨折をなさったっていう話ですね。

妻：そう骨折して動けなくなっちゃったからもうしょうがない。でも、オムツもすごく嫌がったんですよ。頭はしっかりしてるから。動けないからオムツしなきゃなんないでしょ。そしたら、母さんねいいんだよ、そこでしていいんだよって言ってもなかなかできなくてね。

Q：骨折は大腿骨骨折ですかね。

妻：そう大腿骨。

Q：そうするとけっこうほんとに身動きとれなくなっちゃう。

妻：ぜんぜん動けなくなっちゃって。それでねあの、引っ張ってたんですよ。何であんなことしたのかなあとって。年なのにねえ。そいで、結局はそれとっちゃって。すごく楽になったみたいですね。

Q：牽引していたのをとったっていうことですか。

妻：そうです。

夫：ほんとにあれよあれよという間だった...

妻：そうですね。

Q：じゃ、特に介護保険を使ってたってこともなかった...

妻：そうですね。ま、でもいい往生ですよ。世話かけないでね。

Q：あのもしそのときに、骨折して退院ということになったら入所なんてことも考えていらっしたんですかね。

妻：そうですね。もうそのときに先生からダメみたいなこと言われたんですよ。それであの、延命処置しますかって言われたんだけど。私が断ったんですよ。そういう人じゃないから。もしだめだったらそういうことはしないでくださいって。で、しなかったの。

Q：じゃ特に何も器械はつけずになくなったっていうこと？

妻：そうなんです、はい。

Q：そのときご家族の中でその決断を、延命をしないっていう決断を反対を受けた方っていらっしますか？

妻：あのね、私のすぐ上の兄はね、するっていったんですよ。でもね、そう人じゃないよって言ったの、私は。フフフ、そういうふうにしてね、ぜんぜん動けなくてね、長く生きたいって思うような人じゃないんだからって。ダメだったのそんなの。

Q：それで同意を得られたっていうことですね。

妻：そうですね。

夫：やっぱりね、もう90っていうとね。

妻：隣のおばあちゃんがねやっぱり骨折して入院して、ずーっとなんだかわけわかんなくてね。ずーっと病院に入ってたから。ああいうのやだなって思ってた。

夫：かわいそうだったね。

Q：ご近所さんでいらっしゃったんですか。

夫：うん、隣の人。

Q：入院が長くなってまた家族の負担が大変になりますからね。

妻：そうですね。だから、あれで長かったらどうだったのかあとかと思うけどね。いいんだか悪かったんだか早かったから。ま、大変は大変ですよ。一晩泊まらなきゃならないから。みんなで替わりばんこにしてもね。泊まらなきゃならないからね。

夫：子供が多いからね。そういう面じゃ...

Q：入院したときは手術という話にはならなかったんですか？

妻：手術したんですよ。入院してすぐに手術っていうことになって、ボルト入れて、それで牽引してたんです。だからまったくぜんぜん動けなくて。だから床ずれも早かったですよねえ。動けないからねえ。床ずれがあんなにすごいとは思わなかったもん。びっくりしちゃってね。すごいね、床ずれってね。

Q：床ずれは痛がられてなかったですか、ご本人。

妻：もう床ずれが痛くなった頃はもう意識があれだったのかなあ。でも、私のことわかるって言うと、わかるに決まってるだろう、なんてよく言われてたけど。でも、いつもこう目つぶって。目開かないんですよ。で、寝てんだか、寝てないんだかわかんない。

妻：生前、お酒は飲んでましたよ、亡くなるちょっと前まで。家でね。1合くらいは飲んでましたよ、毎晩。

資料 2. 存命の高齢者と子供との会話（前回会ったときの話題）

忘年会が今年から亡くなった 91 歳になると生きていても来れない人が多いよ / 病院帰りに寄ったお店のこと / 我が家に毎日夕食を食べに来ます「足ががら亡くなってヨタヨタしてきたからもう長くないよ」と口癖のように申しますが元気です
駅前に空いているテナントの話 / 宅配ピザ注文のこと / 新しいパチンコ屋の話 / テレビ番組のこと
1 週間前なので正月について年賀はがき作成を依頼され行ったが時間がなくてあまり話していない
孫の発育、発達についての報告など
飼い猫の話
父親自身の体調のことと妻の体調のことを心配していた
家族の話題弟の今後のことなど / 仕事の話
仕事について
年齢の割には元気に毎日過ごしているので今は安心していますが体の意識過剰にならぬよう少し抑えるように話をしています / 私たちが言うより孫に言われたほうが聞き入れてくれます
テレビの相撲番組が好きです
家のバリアフリー化について（改築したばかり）。孫のこと。
教育者の能力・権限と責任。家庭の教育。政治・経済・社会問題等。
家の新築について
新年の挨拶に行って子供（孫）の現在の様子などを話しました。後は他愛もない昔話でいつも終わります。
現在 90 歳で食事も朝昼夕、4 時、10 時、3 時に食しており、畑の作業を毎日、さつきの水やり、まだ家族の状況を良く見ており、注意しております。私より体調は良く、自転車ですぐ買い出しに行っています。町内では青年といわれています。
昨年首の手術をしたので、その後の経過。息子（孫）の進学について。弟の結婚。田舎の親戚の話題。母の話題。

<p>酒の飲みすぎをいつも注意すると嫌がります。人が変わってしまうので困っています。私が言うより子供に言わせたほうが聞いてもらえることが最近わかってきました。</p>
<p>子供の大学受験（受験の制度、大学の格付け、受験大学の選定）、旅行（国内・海外旅行）、最近の世相（夫殺し、バラバラ事件他）、食事・外食（好きな食物）、教育全般</p>
<p>健康に自信過剰になっている点は困る。孫のことは一生懸命考えてくれる。</p>
<p>実家は遠いのでやっぱり体のことです。若いときは泣き言一言も言わず働くばかりの父でした。病院に行っても、お金の面でも本当に大変みたいです。周りに迷惑をけるので本人が一番気にしています。それでも入院だけはダメとか・・・いやだと・・・今は母がいるので頑張ってくれていますが、母のほうも心配です。</p>
<p>父のお婆の葬儀について</p>
<p>孫の家の話。農業を行っているが稲田の世話仕事の話。孫の生活態度について。自分の時代の経験を聞かせていた。</p>
<p>暗いニュースが多いが、自分のせいではないのに責任を感じているようなことを言う。もっと気楽に生活をしたらとすすめているのだが？</p>
<p>同居生活</p>
<p>スーパーでの買い物の話</p>
<p>普段は農作業をしています。雨が降ったりすると、話をする人も無く、農作業することもできず、手持ち無沙汰で1日が長くて困る。後は農作業の話とか、近所人の様子などを話していました。</p>
<p>私の嫁ぎ先の親の話。知事選の話。私の主人の会社の景気の話。</p>
<p>父の体調の様子。子供が結婚したこと。</p>
<p>介護保険の新規申請をしたが自立と判断され非該当となったこと。何処のお店が安く、何曜日は何が安いと、チラシを見て買い物に行くこと。新聞の切り抜き（私がお願いしていた記事について）をとっておいてくれたこと。近所にセンターができて見学に行ったこと。自分の病気と病院に行く日などの話。テレビの健康番組のこと。</p>

その前に家に来たとき寿司を持ってきてくれたのでおいしかったとお礼を言って風邪をひかないで元気でやっている？と様子を聞き、後は私と母で話しているのを聞いていた。私が帰るときは必ずありがとうと言ってくれる父です。
お互いの健康について
弟夫婦に生まれた孫の話。わが子（父には孫）の書道や習い事の話、普段の様子について。近所の人話。車のことについて。
孫のこと。仕事のこと。家族の健康のこと。
飼っている犬の話
同居中につき日常の会話をしている状況です
相撲について
自分たちの身の回りのこと（家族・家・近所のこと）。健康面でどうしているのかなど。
父の身体の具合
選挙のことについて。税金のことについて。
相撲の話
変形性関節症で左ひざが人工関節なので調子が良い。最近は小走りも出来る。右ひざが時々痛むので自分で調整しているなど、父の病気のこと。ひ孫と父の毎日や、ひ孫の自慢話。
父の健康状態について（透析を12年間受けている）
子どものこと
子どもの進学のこと、リフォームのこと
肥満について。このままだとどんどん苦しくなるし動けなくなる、ゆっくりたべること。
姪の結婚話、炭焼の話、母親の怪我の話、正月もちの出来具合
同居しておりますので毎日話します
同居により、仕事について話題となりました

同居のため、子どものこと等を良く話します。
父が只今、久留米医大に駐印中のため、その送りを付き添っています。話の中心は今治療中の病気のことでしょうか。母も高齢のため、母を支えている父がちょっと些細なことで不満を。母は足腰が悪く日常生活が少々不自由のため、その支えをしている父に負担がかかり、父が言っていることはよりわかりますので話を聞いてあげてるような状態です。ふたりだけの生活が最近ちょっと大変になってきている感じがして、その話は父ともよく話します。
健康の話、車の話、自宅のベランダの仕上材の話
田舎で一人暮らしをしているので、毎日何を作って食べているのか、買い物は何日に1回とか、弁当を頼むよりは安くつくことなど話しました。お父さんは一人でよく頑張っていると思いました。姉さんのところまでは行けるけど、私のところは遠すぎて自信がないそうです。
孫のこと(私の長男の仕事について)、新聞を打ち込んでいるワープロの使い方(時々操作を忘れるところがある)、つりに行ったこと、娘家族の健康のこと
両親の健康状態について。3年前からアルツハイマーになる。1年前から施設に入る
セーターを褒めたら「コレお店で800円だった。着る物はたくさん持っているけど片付けや出すのがものすごく億劫になってきてつい手頃なものを買ってしまう。よけいに物がふえてゆくけどあとは頼むわね」何気ない会話の中に父母とも老いを感じさせることが多くあり、自分の将来の過ごし方に役立つアドバイスになっています
テレビ番組のこと/食事のこと/パチンコのこと/クイズ/世間話
孫のこと/自分が参加している集まりのこと
隣近所の話/自分が参加している集まりの話/孫のこと/自分の体調のこと/とりとめのない四方山話
実姉が旅行のため母の世話で3日間共に過ごす。母の健康について。隣人を招待し、日常に御世話になっている感謝の気持ちを母と一緒に食事をして過ごす。孫のこと、親戚の最近の様子など話す。必要時のみ母と会うので、実姉が日常で大変な状況を目の当たりにすることは少ない。母がいまだに子供に迷惑をかけないと気づかっている上体が伺える。
近所の知り合いが病気で一緒に見舞いに行った。父の病気、アルコールの飲み過ぎであることなどについて話した。

母親自身の体調のこと。昨日病院受診し「点滴目的にて入院しなさい」と医師に言われ、生まれてはじめて入院という言葉と言われショックを受けたとのこと。
母親自身が参加している集まりの話 / 仕事のこと / 私に対しての心配
認知症で全然会話が通じない
隣近所の話 / 母親が参加している集まりの話 / 母親自身の体調のこと / 私の仕事のこと / とりとめのない四方山話
夫の体調のこと
転倒・転落の危険性について。機能障害や活動状況、危険度のある状態のため、最小限度の注意が必要ここ数年。
家族の話題 / 自分の仕事について / 今後の人生について / 弟について（母にとっては息子）
家族のことについて / 日々の生活について / 仕事について
一番は孫のこと、2番は私の仕事のこと、次に父のこと、よく順番が違うよと話しますが直りません
健康上の問題（転倒・骨折などしないように） / 春になったら花見に
経済的なことや社会の出来事など少し話していました。私自身も誰かに相談したいと思うこともたくさんあります。母親もこれから老いていくのでいろいろ大変私自身も体が少しずつ悪くなってきているところもあるのでどうすればよいものか。
健康の不調
家の改築 孫のこと 今後の家について 父の様子 親戚について
義弟の死亡に伴い妹の今後の生活、四十九日法要、納骨等。本人の血糖値の不安定。本人の排便の不安。本人の失明の不安。
病気について
妹の娘の成人式について会話しました。今は亡くなった父の墓場が小平にあります、今後どうすればよいかという話を時々します。
病院に入っていて、会ってもわからないが、5年前はよくわかっていたので、孫のことの話が多かったと思います。今は全くわかりません。
お正月のため特に何もなかった
新年の挨拶と子供（孫）の様子などを話しました。

息子（孫）の進学について。弟の結婚。田舎の近所の話題。父の話題。
じいさんが酒飲みで言うことを聞かないとよく言う。自分は医者嫌い。少し人の言う事を聞いて先生のところに行くように話をして、大事にならぬようお互いに協力しようと話しました。
母の母（つまり私の祖母）の話（わがまま放題で金を湯水のように使い施設に入れているのだが母や母の妹を呼びつけて天秤にかけて、二人は翻弄されている。気分やで欲張りで、自分の母といえどもここ10年の戦いはすさまじい）。年始年末、知人からもらったもらい物やお返しの話など。
花作りのこと
子供の受験（大学の選定、健康管理、志望学科の選び方）、子供の生活（食事、帰宅時間の管理、成人式）、食事、世相、教育全般、友人との交際
家族の健康のこと。自分は多少具合が悪くても人に迷惑と思わず素直に話してくれない。
「こんにちは！」と玄関に入ったら、笑顔で迎えてくれてとてもうれしかった。先月肺炎で入院したので、このところ時々見舞いに行っているが、そのたびごとに元気になってくれてとてもうれしい。近頃物忘れがひどくなってきている。アリセプトの服用を始めた。弟の嫁さんが様子を見てくれるのがとても有り難い。低栄養にならないように夕食に一皿おかずをはこんでくれ、週に1～2回は弟の家の方で食事する。時々掃除したりシーツなど大きいものの洗濯もしてくれている。
孫の話など
正月におば（母の妹）といった旅行の話。自分の体が調子悪いということ。具合が悪くて死にそうだと電話してくるのですが、あわてて行くとそんなこと無かったようにケロツとしています。「オオカミ少年」のようだと姉から言われています。
やはり体のことです。父と二人、何かあればどうしようかといつも心配です。
一緒に仕事をしているので、朝10時から19時まで事務所ですっといろんな話をしていますが、ニュースの話（殺人事件のことなど）、孫の話、近所人の話、食べ物の話などしています。
毎日同居ですので話題はいろいろあります。新聞、テレビ、日常生活の話です。
野菜作りの楽しみと大変さ。自分の健康の話。旅行（四国88箇所めぐりの話）。父とやっている俳句・短歌の話。
子供の教育の話

同居生活
健康の話
毎日仕事で会っているので、仕事や子供のことについて
お風呂でみんな行っていたので畑の話が多かったです
毎日車椅子の生活をしている「早く死にたい」「私は100歳まで生きる」。昔話。
孫のことやこちらでの生活の様子。母の近況や体調のこと。
昨年12月おじさんが亡くなった時、会話はあまり無い。
介護保険を新規申請をしたが自立と判断され非該当となったこと。なにを食べたいか、何を作るか等話す。絵手紙の会へ行っているためその様子の話など。同じ年のおば(一人暮らし)のことや兄弟のこと。私の子供(孫)のこと。私の体のこと。
私がいつも「元気ですか?」と聞くと、「健康で達者で有り難い」といつも言っては前に私と会ったときから今までのことを話してくれる。近所で葬式があって私より若い人が亡くなったとか、老人会での行った時のことを話してくれ、いつも私が行って帰ってくるまで話し続けて、「じゃあ帰るねまた来るよ」と言うと、私が62歳なのに風邪をひかないようにねと、私に言う。いくつになっても母の子供で母が心配してくれています。
父の他界を言っていないので変に思っているかも。病院がそんなにいいのかと父の不在を嘆くというより、怒っている。病院に若い子がいるからそこの方がいいんだと、おばあなんてどうでもいいと怒っていることばかり。また来てねといわれて帰るのが辛いけど、あまり話題も無い。現在95歳。死ぬまで元気といいながら皆と生活しています。家に帰りたいたいはいわないけれど、近所人を一度連れて行ったら泣いて喜んでいました。一緒に暮らせたらいいいけど、残念です。
テレビドラマや仕事の話。同居しているので毎日同じような他愛の無い話。
母は93歳となり認知症で老人保健施設に入って1年3ヶ月になりました。耳も遠くなり、会話のできる状態ではありませんが、ホームではお世話していただき、穏やかな日々を送っております。その顔を見るだけで心が幸せになります。
今日の予定について話しました

<p>現在 93 歳ですが、85 歳頃から認知症が発症いたしました。今では家族の顔さえ覚えておりませんね。残念です。医療の技術が進めばと思いますが、本人にとって、何もわからないことも、また苦勞の少ないことかなとも思われます。苦しめない最期を迎えられればと思います。</p>
<p>頑張って昼食を食べようね。今は正月だよ。母の兄弟、妹たちの話など。</p>
<p>乳癌の話。83 歳になり乳癌になり、入院、手術をしました。幸いにも初期でしたので、10 日間程で退院できました。経過が順調で、手術後の痛みも無く、先生もびっくりするほどでした。現在も元気です。退院直後から、普段通りの生活をし、食事も自分で作っていました。ただ重いものを持ってはいけないということで、買い物だけはお嫁さんにしてもらっています。朝は 5 時半に起き、夜 10 時には寝るという昔から規則正しい生活をしています。長男の父に嫁ぎ、祖母が脳梗塞で倒れてからは、父の弟 4 人と祖母の世話をしながら、3 人の子供を育て、叔父たち 4 人を結婚させ、母親代わりもしてきました。じっとしてられない性格で、こまごまと良く動き、また、親戚・近所への心配りもしてきました。よく気の付く人です。いまでも子供たち・孫たちへの心遣いは感心させられます。夫婦仲もとてもよく、父は早く他界しましたが、父も幸せだったと思います。</p>
<p>弟に生まれた孫の話。その子の名前について。わが子（母にとっては孫）の家の手伝い、習い事の話、学校の席書展の話。おばの近況について。ここ 1 ヶ月の忙しい予定について。4 月に行く旅行について。</p>
<p>孫のこと。仕事のこと。家族の健康のこと。</p>
<p>母とは昔話。私たち子供のこと。孫たちのこと。母が 93 歳を迎えること。</p>
<p>玄関に飾ってある花の話</p>
<p>同居中であるので日常の会話をする程度</p>
<p>金婚祝いの件。子供（孫）の話</p>
<p>8 年前に足を骨折し、半分車椅子の生活になったが、精神的にはしっかりしていてボケもなく助かっている。ただ本来わがままな人なのでさまざまな要求欲求が多く全ての負担が私にかかっているため大変である。前回欲しいもの（日常生活において）を全て買い物に連れて行って購入した。会話は趣味の俳句の世界のこと、孫のこと、ヘルパーさんのことなど。</p>
<p>子供の頃の様子</p>

旅行のこと。家族・家・近所など身の回りのこと。お正月での出来事など。
父亡き後は母と同居していますので、何の苦もなく毎日母に孫の成長を見せてあげ、家族円満に素晴らしい同居生活に感謝しています。できれば現在の医療があったならば、父も元気で生活できているのではないかと反省しますね。
嫁に出した娘一家と正月に行ったので、今年の夏休みに出かけたときの写真をあげてあったので、居間に飾っておいて一人の夜など見ていると思い出してにぎやかになると喜んでおりました。隣のおばさんが必ず朝来てくださるので、お茶を飲んだりお話をしながら楽しいと話していました。
母自身の健康に対する話題と、葬式費用に関する話。
ここ3年くらいまったく言葉を話せないので一方的にこちらから話しかけるだけで長い話題は話しておりません
父の体のこと。母の体の具合。
身体の健康について
ニュースについて
健康に気をつけようといつも話すことです。
身体のこと、家族のこと、仕事のこと
三世帯で母は暮らしているので近況の報告。孫やひ孫の近況や相談事。日常の会話。
子どものこと
母の趣味のこと
(新年の挨拶に行った時)風邪を引いていない?元気にしてる?など身体の健康状態について話したり、家族の様子を話したりしていた。
姪の結婚話、母親の怪我の話、食べ物の話
母の趣味について、食事の味付けについて
現在は母は北九州に在住していて私は熊本です。家に来たら1ヶ月以上はいます。二人で温泉に行ったり、いつもニコニコ笑顔で前向きに生きています。それに母は本をよく読んでいて先日は何人の本を読んだとか、次は何を読みたいとか、よく自分で目標を持って生きています。友人も多くいるようです。現在は78歳ですが、今か

らどんな病気ができるかもしれませんが、自分のことは自分でするとよく言っている母です。
世間話や兄嫁（同居）の愚痴
介護の状況、生活の不安、今後の生活状況のあり方
毎日の生活のことを話します
難聴があるので込み入った話はしない。顔を合わせ無事を確認する程度。天候や孫の話、昔話など。
亡くなった父の話
週4回デイケアに行っているので、どんなことをしたか話してもらう。風船バレーとかカラオケをしたと言った
毎日病院へ好物を持って会いに行きますが、帰りに明後日は私の誕生日よ！！と言いました。今年もケーキ、大きな花を持って来るからね！！お祝いしようね！！と言って帰ってきました。1月25日 98歳です。膝が悪く、立つことは出来ませんが頭はしっかりしています。72歳まで看護婦で勤めていました。若い時は助産婦でした。
母（93歳）は、特別養護老人ホームにてお世話になっており、認知症のため私の存在はわからず、お菓子を持参し（夕食後の時間、勤務を終え、pm6:40頃）、夜景を見ながら会話し、眠たい様子であり「車椅子で歩きたい」との要望により廊下を歩き、その後、食道兼集合場所にて休憩。また来ますからといって本人はうなずいているが本当に理解しているか疑問。このように会話らしき会話はできない。
旅行の話、食べ物の話
近所の方が亡くなったこと
父のこと、墓のこと
認知症で全然会話が通じない
父の介護のこと、弟夫婦のこと、健康のこと、ファッション（お買い物）、孫のこと、インテリア（四季の玄関など、家の飾りつけ）、料理
両親の健康状態について。介護。10年前に軽い認知症になる。父が病気になって母の認知症の症状が良くなる。
近況報告（体の体調他）、友人の話、服の話、通帳（銀行）の話、孫のお祝いのお話
治療（？）の話

資料 3(自宅で死亡したケースの状況)

田舎で生活していて畑仕事をして帰ってきて体の不調を訴えなくなった
父は戦前・戦後の時代を過し皆さんと同様ですが苦勞をしてきました。戦後の無理が体を悪くし、リウマチで苦勞し病院に通っていたようですが痛いと言ったと薬が強くなっていくので副作用で内臓にも変化が起きてくると思います。悪循環ですね。最期は家で過しておりました。昭和 54 年亡くなりました。
現役で仕事をしていて、過勞状態で、体調が悪いと言って朝医者に行き、待合室で待っている間に心筋梗塞を起こして死亡した。
脳溢血で自宅で急死しました。42 歳の男盛りですから身近な人たちが信じるのが・・・難しかったようです。
自宅で長男夫婦と同居生活を送る。朝食に起きて来ないので部屋まで呼びに行ったら、眠るように死んでいたようです。
家でころんで
家で寝付いて 40 日で亡くなりました
父はだんだんと体を横にしていることが楽というか。とりたてて何処が悪いということも無く、亡くなる 3 ヶ月位前から寝たきりの生活になり、母は寝たきりにならないようにと起きていることを口うるさく言って、時には口げんかになることもあったようです。共働きの弟夫婦と暮らしていましたので、兄弟 7 人で昼間交替で実家に出向くようにしていました。最期まで自宅で、私は人間の最期はこうあるべきという亡くなり方だったと思います。妻、子供たちに見守られ、静かに息をひきとりました。
心不全で急死でしたが 10 日間ほど弟と母が軽い介助をしてあげました。
軽い脳梗塞で床に就くようになりました。トイレは紙おむつをしていましたが、教えてくれましたので母(当時 71 歳)が普段介護をしていました。私は母の旅行、ゲートボールの練習や試合、買い物、お風呂(区の入浴サービスも利用)のときだけ手伝うくらいでした。亡くなるまで家で看取ることができました(5 ヶ月)。後で母と共に悔いが残らずよかったと話し合いました。
父は 80 歳まで元気で、農業を頑張っていました。脳血栓になってからは左半身に少し麻痺が残る、農業は出来ませんが自分のこと自分で出来ました。歩いて 5 分くらいのところに私(娘)が住んでいた。毎日散歩がてら家に来て子供たちの本棚の本を読み、食事の時間になると帰ってまた来るという感じの毎日でした。入院することも無く、毎日母と仲良く過し、88 歳で苦しむことも無く、静かに天命を全うしました。

昭和 32 年 7 月 29 日、母と私たちは姉の病氣見舞いに横浜に行っている留守中の死亡でした。父は単身赴任のような日雇い仕事でしたので、仕事の合間には家の農業をするのに夜行列車で往復して仕事をしていました。死んだ年の 5 月に、その当時胃潰瘍の手術で胃 3 分の 2 切除していました。父の介護に母はほんの数日のみで心残りだったでしょうが、お田植え仕事前の多忙なときだったので、仕方ありませんでした。もう 40 年も前の話です。何の前触れも無くの突然死でした。父の父親はそばにいたのですが、取り付く間もないあっという間の出来事でした。

自宅で倒れて亡くなりました。

白内障の手術のあと、風邪をひき、そのまま 2 ヶ月たって死亡。自宅にいました。(家族と同居)

父が他界し 40 年以上になります。癌でした。自宅で介護看取りました。1 年足らずで他界しました。

父は医者で病人の家に往診に自転車で出かけ道で脳卒中で死亡

36 年前、85 歳で老衰で亡くなりました。電力会社の勤めを終え、農業に従事しました。家で妻と家族に看取られ、穏やかな生涯でした。

農家に生まれお百姓をしながら村の役職を務めながら生活。呼吸器系が弱く、不整脈があり、国立病院にてペースメーカーを入れたが体力が無く、これを機に肺炎を起こしたりし 6 ヶ月くらい入院。一応退院したが 3 ヶ月くらい家庭で療養したが、衰弱で死亡してしまった。大変お世話になりました。

父は血圧が高く私が 23 歳のとき他界。昔ですから医療関係ではなく自宅での看護で終わりました。

規則正しい生活でした。83 歳まで会社勤めをしていました。健康に気を使い食事も一定量以外は一切口にせず、自分のことはすべてやっておりました。毎日欠かさず食していたものは大根おろし、銀杏。頭もしっかりして手の掛らない父でした。亡くなったときも布団の中で寝たままでした。

父は趣味が短歌、川柳で、80 歳頃までテニスをする。写真に興味を持ちよく外出していました。父親が大酒のみで 11 歳のとき亡くなり母親に育てられた母子二人の生活で苦労していますので、酒は飲みませんでした。タバコをよくすいました。子煩悩で私たち兄弟は叱られても叩かれたことは一度も無く、孫もよくかわいがってくれました。風邪をひいたのが元で、10 日ばかり寝ましたが、トイレに行き、私たち子供の手を煩わすことなく逝きました。

<p>時間は自分なりに毎日守り、昼間はテレビ・昼ね、晩酌、タバコを少々。急に脳梗塞で左半身が不自由になったけど、1週間で亡くなった。病院は嫌だということで自宅でかかりつけの医者に来てもらった。</p>
<p>脳卒中で倒れ5年間床につき、その間母の看護を受け、この世を去りました（60歳）。私がまだ小さかったので様子ははっきり覚えておりません。ここ蕪崎には医者が一軒しかない時代で、たしか週に一度往診に来ていたようです。一度も入院せずに家庭で母が看っていました。今思うと母の苦勞は大変なものでした。</p>
<p>母と二人で生活していたが、母が車椅子（50%）での生活のため、毎日ヘルパーさんをお願いして家事を手伝っていただいた。私自身が仕事を持っているため基本的には週末だけ直接介護をする状態であったが、私一人で看っていたため、経済的・精神的負担はかなり大きかった。82歳頃、多発性骨髄腫と診断されたが、高齢のため治療はせず、様子を見ながらの生活であったが、最後は自宅であつというまに亡くなった。亡くなる当日まで入浴もし、食事もとっていたので、亡くなりかたとしては立派で、素晴らしかったと思う。</p>
<p>脳梗塞で家で。</p>
<p>若い頃は農業です。年をとり胃癌になり半年ばかり病院にいて家に帰り弟の嫁さんに見てもらい私も見に行った。3ヶ月くらいで亡くなった。</p>
<p>家で家事の手伝いをしていて突然</p>
<p>農業を主として生活していました。胃潰瘍で病床につくようになり家で療養で死にました。</p>
<p>8人家族の中で幸せな生活を送り大往生でした</p>
<p>脳血栓で倒れ、2ヶ月くらい病院に入院。あと家でみてやる。</p>
<p>元気に生活していましたが死亡する朝洗顔のため洗面所に行きましたが、心臓の太い血管が破れて亡くなりました。</p>
<p>生涯現役の百姓でしたが、膝関節が悪く80歳を過ぎてから農業を辞め、隠居生活を送っていた。年寄り2人で生活をしており、酒は昼・夜1合程度楽しんでた。タバコは75歳くらいで辞めていた。正月に会った時は元気でその2週間後、大雪で冷え込んだ早朝のトイレで倒れ、胸が痛いと言え、そのまま救急車で病院に運ばれ同日夜8時頃死亡した。病院へは定期的に通院していたようですが、シップ薬はまだあるのでいらぬといったら、医者からもう来ないでいいと言われたと聞いたことがあった。田舎では医者は選ばれんからと言っていたことを思い出しました。</p>

<p>北九州で生まれ育ち、S37年父母の故郷に転居。父は海軍であったため船に(?)を持っていました。炭鉱の退職金で船を購入し、事業を始めました。1年後、自分の船上で急に発作を起こし他界しました。昭和38年の頃、父の診断書には「十二指腸潰瘍穿孔」とありました。今、医療職に就く私には信じられないことです。父の死因は「心臓」多分「心筋梗塞」であったと思います。だからといって、誰に言う訳でも何をする訳でもありませんが田舎の医療の遅れを痛切に感じたことです。</p>
<p>畑に毎日行っていて畑で倒れました。脳梗塞でした。そして5日後亡くなりました。74歳でした。</p>
<p>父はダイナマイトで片目となり、その片目も失明してしまった。68歳の時突然倒れた(脳動脈破裂と診断)。一週間意識不明のまま死亡した。</p>
<p>戦地でマラリアに罹り、肝機能が低下したと思われる。もともと飲めないと思っていたが中年過ぎて酒の量が多くなり、肝硬変を起こしていた。入退院を繰り返していたが、最後は自宅に戻り自宅で静かに息を引き取った。</p>
<p>平成2年に亡くなりました。亡くなる前7年間アルコール依存症となり足腰も弱って家で寝たり起きたり。食事はあまりとらずアルコール漬けでしたが、母が一人で面倒を見ていました。最後の1年くらいは妄想状態となり、母に当り散らし、母は毎日泣いていました。私は千葉県にいましたので何もしてあげられませんでした。母が元気で父の面倒を一手に引き受け最期を看取ってくれたことに感謝しています。父は元気なときは7人の子供を育て、しつけに厳しく、母と農業をして7人の子供を一人前に育ててくれましたが、隠居してから生き甲斐をなくし、酒が全てでした。</p>
<p>事故や結核などで入院を7回しました。胃潰瘍でしたが自立されており、朝、布団の中で亡くなっていました。薬がのどに詰まっていたようですが、原因がはっきりしていない。</p>
<p>心不全で家で急逝。数日前に体調が悪く、夕方意識もうろうとして食事をし、翌朝、家族が気づいた時には脈がとまっていた。</p>
<p>市役所で勤務し、退職後60歳くらいまで嘱託にて勤め(2年9、その後、綿の販売店に勤めていた。70歳頃に脳出血で倒れ家庭で面倒を見る。その後、やや回復し身の回りのことは自分で出来た。s46、12月頃2度目の発作で死に至る。</p>
<p>母が早くになくなり、頑固で負けず嫌いな父は皆から敬遠されていた。そのため、母がいた頃は毎年行っていた親類の集まりもなくなっていた。父の口癖は「百まで生きる」であったが糖尿病のため入院したり薬物療法を行っていた。そのうち同居していた兄夫婦とうまくいかず、兄夫婦が家を出て、一人暮らしをしていた。近所に住んでいる姉がほとんど毎日顔を見る程度はしていたが、ある日突然亡くなっていた。</p>

<p>自宅で農業を行っていた。庭で倒れているのを家族が見つけ、かかりつけ医を呼び自宅でケアを行っていた（病名は不明。一時的に意識消失あり）。1週間後、自宅で永眠。医療従事者に特に不満はない。</p>
<p>母は父、弟夫婦と同居していました。自営業のため父の仕事を手伝っていたため過労が原因で病床につきました（10年位）。姉弟が多かったため自宅で介護ができました。母は20年前に亡くなったので近くのお医者様がよく往診してくださいました。</p>
<p>52歳のとき子宮癌になり、東京の病院に入退院を繰り返していました。53歳で自宅で亡くなりました。最期に自宅に戻ってからは、近所の医師の往診を受けていました。</p>
<p>家で通常の生活をしておりましたが、夕食後倒れ1時間くらいで死去。</p>
<p>胃癌で私たち子供二人が高1、高3でしたので、父親も戦死でしたので、死ぬに死ねないという感じで家で病床につき、昭和33年親族に見守られて亡くなりました。</p>
<p>大往生。脳出血。倒れて翌日死亡。</p>
<p>私が20歳以前に頭痛・腰痛他で通院していた。血圧など正常値で原因がわからず病院をあちこち渡り歩き2年半後、自宅から2時間くらいの病院で脳軟化症と病名が判明。（体で測る血圧は正常だが脳圧が異常に高い・・・頭痛の原因）昭和35年頃のことです。当時在宅で家族の介護が普通だったため、医師の往診であった。発病当時は食事・トイレ・入浴等自分である程度できていたが、発症5～6年ごろから全て介護人にしてもらわなければならなかった。私は生保関係の事務員で、月末月始は残業等で帰宅は深夜となり、父が私のいない間介護、昼はお手伝いでした。</p>
<p>パーキンソン病で42～64歳まで22年間病んでいた。全て自宅介護。</p>
<p>癌で手術をし、家で生活していたが、体調が悪化したため、病院に2ヶ月入院し、家に帰りたと言ったので連れて帰り、2週間後亡くなった。</p>
<p>糖尿も患っていたが医者にもかかり、田舎で畑仕事をしていた。入院したこともあるが良くなっていた。寝込むこともなかったのに・・・数日前には電話で話もしたのに・・・「何故？」と思った。</p>
<p>母は91歳の6月まで食事をしっかりたべ、畑で家庭菜園を作り元気でした。7月、8月の暑さで脱水状態になる畑を一生懸命して水分をとらなかったのだと思います。すごく暑い年でしたから。ぎりぎりまで家で長男の兄嫁と長女が介護していて、病院に入院して2時間で亡くなりました。兄嫁にひとことありがとうと言ったとのこと。</p>

父の死後、今度は同じように独りになった母のところへ、3人で行った。買う物を聞くために、仕事の帰りに週2~3回寄ることで、私は休みの日は自由になることが多かったが、この頃はあまり友人からの誘いもなくなってしまった。会社帰りによることを嫌がったのに(夜は入浴するし、早く寝るからと)「食パン1斤余っているから、すぐに取りに来て」と雨の夜に電話があり、断ると怒っていた。全てに非常識な母親だった。少しずつ痴呆がみられ、ヘルパーさんの回数・時間を増やしてもらおう相談をしているとき「いつまで話しているの!うるさいから早く

母がみぞおちの辺りにしこりがあると言うので医院に行った。癌または他の病気かも・・・と言われて帰った。その後東大、地方の大学病院2箇所まで診てもらったが父が付き添い、子供の私たちにはっきりとした病名は教えてもらわなかった。その後自宅にて町医者により最後まで訪問治療で終わりました。

最後まで自分のことは自分でやりましたが、限界のようでした。(入浴中湯船の中で死亡)

心臓発作で死去。家にいて午前中は普通の生活、午後4時頃家族の留守のうちに死亡した。

糖尿病にかかっておりましたが結核が後発し、治療としては大変だったと思います。入院はせずに、入院することは当時子供にお金も掛ったり大変だったのだと思います。吐血による死亡でした。

北海道で、屋根の雪が落ちた事故で急死しました。死因は心臓麻痺といわれました。治療も療養する間も無かったわけです。あまりのあっけなさに、看病してあげられない悔しさが心に残っています。

面倒見がよく読んだり書いたり皆様に慕われ指導力のある母親。夫を亡くして2年後母親も他界してしまっただ。私の長女が老いたおじいちゃんおばあちゃんの世話をしながら泊まって、銀行に勤めていた。電話あり、車で30分のところを主人と駆け込み、母親を看病した。2泊3日。医者に往診してもらい一時は回復したが、肺炎を併発し昏睡状態になり、一昼夜大勢の方々に見守られて永遠の眠りになってしまったので、医療機関の厄介にならず両親を送る。さぞかし草葉の陰で私たちを見守ってくださることでしょう。

実母は私が7歳のときに再婚し、子供が3人おりました。私は母と7年くらいしか一緒に生活したことはありません。母は異父弟3人とその家族達と老後は生活しておりました。喘息はありましたが、元気で、死ぬ1週間前から食欲が無くなり「胸が苦しい」といい、救急車で入院し、その日に亡くなりました。ですから、介護というほどはしていなく、理想的な自然死のようだと思います。

88歳まで元気で家の回りの草取りをしたり、ゲートボールを楽しんだり、父の世話をしていました。前の日も畑の草取りをしている姿を近所人たちが見ていました。昼ごはんを食べて昼寝をし、そのままベッドの中で亡くなっていました。

死の2年前胃癌手術し、2年間再発しなければ完治と言われていたが、ちょうど2年後再発し、その間発熱震えだし止らず、貧血などの症状出、肝臓等にも転移。入退院を何回も繰り返しました。震えだし以外は食欲減退はあった(体重も徐々に減少)ものの、あまり苦しむ様子も無く、紙おむつをしていたので、手がかかるとは思わなかった。「食べたくない」といわれるのが辛かった。死の1ヶ月前自宅で過すよう病院からいわれたときはまだ38度の熱のある状態だったので、1週間の中にお別れかと覚悟したくらいでしたが、かかりつけの医者点滴で落ち着き、しばらく家で過ごし亡くなりました。

母も元気で毎日生活しておりました。普通に夜の入浴中でした。

心臓肥大で入院をして家に倒れて亡くなる。

父の死亡から、ひとりで生活するまで大変でした。姉二人が別々につき10日間くらい行きみていました。(18年間)母には良き主治医があり私たちも連絡していました。風邪ひいたということで1週間看病して帰った後の突然死でした。明治生まれの人は知らない地方ではなじみず自宅に戻り生活しました。ボケることなく生活できたのは近所の人、主治医があり自立できたことです。一番寂しい夜10時頃いつも電話を入れていました。いろいろと話を聞いてあげました。

私の母は81歳で亡くなりました。貝による食中毒だったようです。実家の兄夫婦、とくに兄嫁のたま子さんには同居ということで寂しくもなく81歳まで元気で仲良く生活していましたので、結婚して家を出た娘4人は特に心配することもなく未っ子の私はうらやましい限りでした。(明治30年生まれ)

父、母、兄、私4人で、農家の母は良く働く母でした。きっと何かと大変だったと思います。脳溢血で床につき、一時はかかりつけの先生に診ていただき落ち着いたときに大きな病院に転院、数ヵ月後自分で歩いて退院するも数日たった日トイレにて気分悪くし、また床についてしまいました。毎日の看護の甲斐なく他界しました。でも家で家族で看てやることのできたことは、後悔を残さずよかったと思います。

母は私と二人暮らしで土地の問題でくやしい思いをしていてそれを聞いてくれる人に話している最中に頭が痛くなり、吐いたり、くも膜下と診断され、入院中にまた看護婦さんのミスで注射を皮下のものを血管とかで大慌て、それから意識がなくなり半身不随になって、2年半。兄夫婦が帰京してきてくれ、病院生活も(家政婦)大変で家で看てもらえ半年くらいで風呂に自分で出られず長湯をして倒れ、そのまま帰らぬ人となってしまいました。今のように手を貸してあげられたらもう少し長生きできたかと心残りです。

健康な母でしたが70代になって急に脱腸を手術し、その後病気の方はすっかり回復しましたが、手術のときの麻酔がなかなか戻らず家に帰ってから精神的に痴呆状態のようになり、無くなるまで父が全部母の面倒を看てください、私は姑さんの面倒を心置きなく見させていただきました。不満はありません。父には感謝しております。

自由気ままに起きたいとき、食べたいとき、寝たいとき、にして毎日晚酌・タバコをやっていた。昼食を呼びに行ったら亡くなっていた。心臓麻痺。
脳卒中で倒れ自宅療養をしていました。快方に向かい一人で歩けるようになりました。結婚前2年くらいはお父さんが主で看っていて、それを手伝っていましたが、結婚後は兄夫婦が看てくれました。50代で病気になった母がかわいそうでした。今はただ感謝の気持ちでいっぱいです。
家族に守られ大満足のようにでした
兄嫁さんと兄で看てくれました。ありがたく感じて、暇をみながら顔を見に行きました。
60歳過ぎて病気により両眼失明し、自宅で自分の部屋から手探りで出てきて食事もし、風呂、便所もできました。孫と仲良く会話をして明るい母でした。目が見えないので、父がお金を持たせ、間違いなく出し入れしていました。寝たつきりになってからは父が下の世話をしておりました。弟夫婦の孫がヤクルトを飲ませ、おいしいと言ってのどにつまったのでしょうか、突然なくなりました。失明の原因はわかりませんでした。今思いますと糖尿病じゃないかと思えます。自宅での介護に家族が頑張っておりました。父と弟夫婦に感謝しております。
食いすぎやおなかの冷えなどにはよく注意を払っていたようだ。しかし、80くらいになると少しづつ痴呆が出てきて長男夫婦と過ごしていたが特に外にできることもなく(一度だけ一人で出て道に迷ったことあり)、テレビの相撲や国会中継などわからないのを見ていた。10日ほど、おなかの調子を崩し、家で点滴などをうってもらったが静かに息を引き取ったとか聞きました。
農家に嫁ぎ百姓を一生懸命やってきた。食事が少なくなり病院に行くと末期癌であった。最後は家庭で死亡。
糖尿病でインシュリンを自分で打っていた。弟夫婦が面倒を看ていたが本人も比較的元気で病院から往診に週2回来てもらっていた。亡くなる数時間前に庭に出て花を見たりして、家の中に入ってちょっと気分が悪くなって、横になって酸素を吸って、そのうちだんだんと意識が無くなっていき、苦しむことも無く安らかな最期だったようです。家族は切ないですけど、私自身もいつもこのような最期を迎えられたらと思っているので、母は幸せだったと思います。
若い時から腎臓が悪く、片方を取り、いつも不安な毎日でした。結石が出来やすい体質でもあり、亡くなるまで4回の入院でした。そのため、絶対に最後は家庭でという本人の強い望みで最後は家庭で思うように生活し、親戚の人に会い、孫たちも来て眠るように亡くなりました。
自衛手伝いと家事を行っていた。入浴中に倒れ、自宅にて永眠(近医往診にて死亡確認)。入浴前まではいつもと変わらない普通の生活をしていた。

資料 4(死亡時の様子)

(父)

定年退職したばかりでゆったり生活し始めていたが心筋梗塞で入院、病院で2ヶ月療養。医療者への不満は特に聞かなかった。

肺癌の手術後、2年以内に死を迎えることとなった。病院ではなく家族全員の協力で最期は自宅で過ごしてもらうように頑張ったが脳転移があり、日常生活で異常行動があり、危険な状況で病名を知らずに看病していた母の希望で病院に入院させることとなった。入院後の病院でのあまりにもひどい看護を受ける状況になり夜間は母がベッドサイドで、日中は私が付き添いを願い、父の最期まで看取る。日常の医療行為、看護行為のずさんさが父の最期に表出することになり、とても残念であったので、病院側に退院後申し出た。しかし、当時は患者側は弱者でした。

田舎で生活していて畑仕事をして帰ってきて体の不調を訴えなくなった

父は青森の出身であったが、定年を機に母の郷里である栃木に移り住んだため周囲に友人がほとんどいなかった。亡くなる5~6年ほど前より肺気腫を診断され在宅酸素療法を施行し、介護保険施行後は週1回入浴サービスを受けていた。その他はほとんど自宅の6畳の寝室と居間で本を読んだりテレビを見る生活であった。母が生まれ在所のこともあり、周囲に親戚知人も多く、趣味で始めた菊作りでできた仲間がしょっちゅう出入りしている家であるが、父がその仲間の輪に入ることはなく、挨拶程度で、自分だけ居間で過ごしていた。母のそうした付き合いは認めていました。

定年退職後は趣味の農業をして、甲府の家と田舎を行ったりきたりの生活をしていました。80歳のとき車で外出し、戻ってきて倒れて、入院10日間で亡くなりました。くも膜下出血でした。意識不明のまま亡くなりましたし、私たちもあわただしくしていたので、医療機関への不満等は感じる暇もありませんでした。

高校2年のときの死亡ですので、記憶の範囲で書きます。現JR(旧国鉄)の職員で戦争中は満州鉄道に行っていました。定年60歳まで働き、退職直後に上顎癌と診断され、入院、手術等の生活で2年位を過ごし亡くなりました。昔の人なので、仕事一筋楽しみはお酒だった気がします。6人の子供を育て、私が末娘で、孫のようにかわいがってくれました。怒られた記憶なし。いとこが耳鼻科医で開業しており、最初は地元で副鼻腔炎の治療をしてましたが、そのうちに悪性ということで手術からは大学病院に行くことになり、その後は家から遠い所で家族の面会が少なくなったようです。

もともと海軍に出て、肺にガラスの破片が200数箇所もあり70歳代で肺結核となり病院へ入退院を繰り返して病院で亡くなった。

<p>風邪気味で低血圧になり入院（病院）認知症の状態が生じたため数ヶ月入院、体力・気力の衰えで老衰で死去。父親は何にも言っておりませんが、家族としては良い先生に恵まれ感謝しております。</p>
<p>84歳まで一人住まい。41歳で母死亡。清潔に料理もよくやっておりました。脳溢血にて入院。約1年後に死亡。（長野から東京の病院に舅が入院同時でしたから、東京と長野、仕事ときりぎり舞いしながら乗り越えました。</p>
<p>大正生まれの戦争体験者で、技術者で、ただまじめに、静かに生活してきました。母と二人で食事に気を配り、支え合い質素に暮らしていました。急に発熱し、肺炎の疑いで通院による点滴治療になりました。3日しても効果なく、入院した個人病院でも改善なく、転院させようとしたが言い出せず、そのうち SpO260%を機って、結局救急搬送されました。1週間で X-P は憎悪し、通して2週間で亡くなりました。個人病院での対応に今でも悔いがあります。</p>
<p>大腸癌で初めは病院で手術をした後は自宅で療養しました。毎日母が面倒を見ていました。月に一度くらい行って（1週間～10日位行き）交代をして色々話をしながら過ごしました。</p>
<p>父は長い間教職に就き、退職後も77歳まで働きました。昔は厳格な父でしたが明るく優しい母をととても愛している人でした。母のほうが先に老化してしまい父が89歳のとき入院してしまいました。父は自分の身の回りのことは自分が心筋梗塞で倒れるまでは出来ていましたので、母を見舞うのを日課のようにして病院に通い、結局、自分が疲れてしまったようです。92歳のお誕生日を迎えた1ヵ月後に心筋梗塞になり、一時よくなったのですが、6ヶ月の闘病の末亡くなりました。私達、子供たちが心の準備が出来るちょうど良い期間だったと思います。</p>
<p>父が他界する半年ぐらい前まで商売（洋品店）をやっていましたが、家を建て替えることになり、店を閉じました。このため、気持ちの張りをなくしたのか急に年を取り、年が明けてまもなく死亡しました。医者にもかかっていなかったため、死亡診断書を書いてもらえなくて困った記憶があります。</p>
<p>2年前に老衰で78歳のとき死亡しました。77歳のとき心臓にペースメーカーを入れ、普通に暮らしていました。親子でありながら、あたりまえですが、考え方、生き方に相違がありなかなかうまくいかない状況でした。</p>
<p>国鉄定年後胃癌の病気で4ヶ月の入院で病院で死亡</p>
<p>母が先に死亡し何もせず一日過ごすこともあった。兄と一緒に生活していたので私は内容は解らない。</p>
<p>農林省に定年まで勤務し、定年後は甲府の家と田舎とを行き来して、好きな農業をしたりして、楽しんでいました。ある日車で外出し、帰って来て、くも膜下出血で倒れ入院しました。10日間入院し意識が戻らぬままなくなりました。80歳でした。</p>

<p>兄夫婦と同居していたが亡くなる5年前より認知症になり夜徘徊して、兄夫婦を大変困らせた。また、なくなる1年前より肺炎等で病院へ入退院の繰り返しであった。老人が楽しむデイケアで週2回程度行っていたが、もっと週に5日程度面倒を見てくれたら、兄夫婦の介護の負担が少なかったと思います。</p>
<p>癌とわかるまで現役で仕事を続けていたが、すでに手遅れの状態。未認可の輸入抗癌剤をすすめられ使用、途中抗癌剤の効果も効かず亡くなって抗癌剤の効果検証のため検体を申し込まれたが、検体結果も聞いてない。その時は、癌の発見が手遅れで、あきらめの気持ちが支配的であり、抗癌剤の効果なども聞いてもあまり意味がないように思っていたが、後々、効果検証を書面で残して説明して欲しかった。</p>
<p>痴呆と老衰で入院していた。食事がのどにつまり、窒息死した。</p>
<p>痴呆・老衰。施設 病院 死亡 田舎の兄が看っていてくれていましたが、男の兄弟3人で施設の費用の一部を毎月負担していた。</p>
<p>なくなる3年位前より病院で治療を受けると少し元気を取り戻し、施設でまた老衰の方向にという繰り返しだった。施設は約3ヶ月で出されるので自宅に戻り、忙しいときには子供のところへというように生活した。老いてきて話し相手があり、昔のことをよく話すことが元気の源だったと思う。</p>
<p>糖尿病で体が弱くなりいろいろと不自由な面がたくさんあった。酒を飲んでいたのも理由だと思う。いろいろくやしい思いがある。もう少し社会が助けて欲しかったと思うし、会社からも何らかの力が欲しかったと思う。たまたまこういう機会があって書けることになったが、いろいろ思うことはたくさんある。</p>
<p>自宅（娘夫婦もすぐのところ）で母が主に介護をしていた。</p>
<p>交通事故</p>
<p>今から40年前の話で、私が中学1年生のため、積極的な関与は無く、下記の文章に詳しく説明できず申し訳ありません。40歳くらいで胃の手術を行い、その後転移し、半年間の病院亡くなりました。</p>
<p>存命中は酒に明け暮れていたいたので、体が悪くなり病院へ入ってから一気に意識が無くなり病名もはっきりしないまま亡くなりました。</p>
<p>同居しておりました。52年12月頃より風邪気味と言っておりましたが、糖尿病があって、月1回通院しておりましたので、特別検査も受けずにおりまして、2月頃おかしいと気付き、別の病院で検査を受けました。結核といわれ、直ちに入院し精密検査を続けましたが、結局5月に亡くなりました。実は肺癌でした。肺癌の告知は全くありませんでした。家族として、心構えなどあり、告知して欲しかったと思います。</p>

父は亡くなる年前より医者よりいつ亡くなくてもおかしくない状態と言われていた。私が高校生の頃より出かけるときはいつも付き添って行って、手足となり共に動いた。また、病院からも前日に明日入院します、また、退院も明日帰宅しますで毎年6月頃に入院し、9月末には退院を繰り返していた。また、普段は行けるときは医院(かかりつけ)に行き、具合が悪いときは往診をしてもらっていた。家庭内では自分のことは自分でやれた。また、やれるように改築をして風呂も作った。家を建て直す1年間はずっと病院に入院していて、家が出来引越しがすんだところでした。

カゼのようだと思って薬を飲んでいたが、長期にわたり症状の回復が認められず、検査すると肺癌でした。ステージB-2期。頭痛を訴えたが、検査を受けたが、異常が見つからず、手術を受け成功しました。以前頭痛を訴えたときに脳に転移していました。手術を受けて1年後に死亡しました。*癌全体をあつかう専門医のいる病院に行くべきだと思う。肺だと他の部位まで・・・

ほとんどの記憶があいまいです。子供が保育園だったので、父は74・5歳。脳梗塞で倒れ入院、リハビリをしてかなり回復、仕事も酒もタバコも全て元通り。父も周囲も考えが甘く、元気になったのをよいことに、さほど注意もせず生活して、数年後2度目の脳梗塞。左半身麻痺になり食事排泄以外に介助が必要になった。母と二人暮らしだったが、家事以外はまったく父の世話をしなかったので、3人姉妹が分担した。私はフルタイムの仕事なので、土日祭日に歯医者の通院、洗髪、買い物などをした。父が84・5歳、廊下で滑って頭を打ち入院。

サラリーマン引退後、声が出なくなり、近所の耳鼻咽喉科へ。風邪と言われる。翌年も同じ時期に声が出なくなり再び耳鼻咽喉科へ。そのまま大学病院へ、そして肺癌と判明。1年前に気付いていれば・・・と思う。町医者の力量の差はどうにもできない。抗癌剤を続けるものの2年で亡くなった。癌の位置と種類から手術もできなかった。

胃の病気で入院、癌が進んでいるので手術しましたが、1年後病院で最期を看取りました。病院の皆様にはいろいろと細かい説明及び行動をしていただき、今でも有り難い事と思っています。

80~83歳、アルツハイマー、自宅。83歳骨折で入院し、リハビリができず2年間の入院で死亡。

庭いじりをしたり、尺八を吹いたりしていました。お酒が大好きでした。肺癌が見つかり、入退院を繰り返し、病院で亡くなりました。私は遠方に嫁いでいたので何も出来なかった。母がみんなやってくれました。

持病は心臓肥大がありました。直接それが原因ではないと思います。土間でつまずいて起き上がりにくくなり入院し、数日後肺炎で死亡しました。

実直で家族思い。正義の人でした。脳血栓が原因で、病院において治療中に亡くなりました。

<p>胃癌で病院で治療生活1年くらい。対応には満足しています。</p>
<p>忙しい営業マンでした。取締役になってもゴルフ、マージャンで家でのんびり過ごすこともありませんでした。56歳のとき急性リンパ性白血病になり、入院。2~3年は病院を出たり入ったりしましたが、その後寛解。発症して14年後、再発。入院6ヶ月で死亡。最期の頃、意識混濁して点滴の針を抜いてしまい、看護師さんにその旨連絡したところ「忙しいのにいちいち言いに来ないでください」と言われショックを受けたのは忘れません。虫の息の病人を動かしてレントゲンを撮り、その直後、布団をかけなおそうとしたとき、息をしていないのに気付きました</p>
<p>家で庭の手入れなど楽しんでいたが、足が不安になってきて、寝て過ごすことが多くなった。兄夫婦が面倒を見てくれたが、床ずれがひどくなり入院することとなった。次第に、意識はあるものの会話が出来ない状態が続き、1ヶ月ほどで息を引き取った。</p>
<p>はじめての検診で発見され精検のため病院へ</p>
<p>元気なときには僧侶の愛人の世話をしている優しい父</p>
<p>終戦の翌年、長野県の疎開先で風邪がもとで肺炎になり、日頃の苦勞もあり、また、まだペニシリン等というものも手に入らず、あっけなく逝ってしまいました。私はまだ小さく、あまり覚えていません。</p>
<p>父86歳、母73歳、娘夫婦、孫2人と暮らしていました。肺癌と診断されましたが年のせいか進行も遅く、年齢のためか食が細くなり、点滴などで病院に短期入院したり退院したりを繰り返していました。父の面倒はもっぱら母の役目で、母は隣に寝てやさしく介護してました。やはり食事がとれなくなり入院しているときに肺炎になり亡くなりました。</p>
<p>脳梗塞で倒れて後病院に入院し病床につき後、腹部動脈瘤があり高齢のこともあったため手術はしませんでした。最後は心不全で亡くなりました。</p>
<p>76歳まで元気に仕事をしていましたが、前立腺癌にかかり、睾丸を摘出し、1ヵ月後に亡くなりました(病院で)。</p>
<p>肝臓癌で体調不良で病院生活を送り、不満は感じませんでした。</p>
<p>乗車バスから下車時に転倒し、くも膜下出血の手術を受け、手術は成功したが、その後の身体ケアが良くなり肺炎を起こして死亡。</p>

<p>肺癌（老人健診）で肺癌は切除しましたが、3ヵ月後に転移し死亡。医療関係者には本当に良くして頂きました。家族は感謝しております。病院（手術）、家での治療、その後入院、それが最期でした。</p>
<p>昭和53年70歳で亡くなりました。母が入退院を繰り返し5年間看病しました。病院もとても親切でした。</p>
<p>胃潰瘍の手術後B型肝炎でなくなりました（病院）</p>
<p>脳出血（他家訪問中）</p>
<p>肝臓の病気で病床につき、病院で治療生活を送り、その間医療関係者には大変御世話になり感謝しております。</p>
<p>若い頃よりヘビースモーカーで、若い頃は卓球を、40代よりはゴルフと、運動は好きでよくしていました。60代で肺気腫になり、痰・息切れがひどくて周りは休めばと言っても会社に行くような仕事人間でした。肺炎がきっかけで入院。3年の病院生活でしたが、1年目昼食に出たそばを詰まらせて気管切開、以後筆談でしたが普通食をとれるまで回復。病状が安定して本人が一度家に帰りたということで訪問看護のある病院に転院。そこでいろいろ実験でもされたのではと思うほど悪化し、一日中うつらうつらしているようになり、大学病院に戻してもらいました。</p>
<p>父が膀胱癌と知ったときは、私は郷里より結婚して離れていましたし、子供も小さくて看病に行くことはできません。まして今の時代のような便利さはありません。兄嫁と、入院中は家政婦さんを頼んでいました。今、自分たち夫婦も高齢になって、子供に面倒にならずに、介護保険などを利用しながら暮らしたいと思っています。この機会を与えていただいて、遠い昔に、父にもう少しでも看護をしてあげられたらよかったと、後悔しているところです。</p>
<p>亡くなる3年前までは病気1つせず元気に過していました。胃癌で手術をして1年間くらいは家での療養生活を送り、定期的な検査も順調でしたが・・・国立病院でしたが規則が厳しく、本人も辛い思いをしたようです。当時私は他県に住んでいて、まだ子供が小さく、あまり面倒を見ることができませんでした。母はよく世話をしていたと思います。ときどき母から病院の人たちが冷たいと聞いたことがありました。</p>
<p>事故で亡くなったので、7歳だったので、よくわからず後でわかった。</p>
<p>75歳まであまり病気をしたことが無く、農業をしていました。76歳の春風邪がもとで入院し3ヶ月、毎日病院に様子を見に行き、看護しましたが、残念でしたが、本人は満足していました。</p>

農家の長男として 65 歳まで田畑の作業に頑張りました。それから 80 歳くらいまでは趣味を楽しみ、少しずつ体力をなくし、家庭介護で 93 歳で他界しました。

胃癌のため死去。苦しかったので、ベッドの上で暴れたので、両手を縛られて治療を受けていた。30 年も前のことですから、それが当たり前の治療だったのかと当時は思っていたが、今思うと本当にかわいそうだとつくづく思うこの頃です。

34 年位前に 70 歳くらいで老衰で死亡しました。家で母が看病していました。

田のあぜ道で転び、脳を打ち、手術をした後から血圧で倒れてから、体が麻痺をして、半身が動かず、食事もとれなく、4 年間病院と自宅で生活をし、母が元気だったのでほとんど母が看病していましたが、最期には女の人 4 人で交代で病院に泊り込み、大変でした。

農家でしたので、毎日元気に仕事をしたり、いろいろ部落内の役員などもたくさんしていたようですが、三十年前に病院に入院され肺癌と聞かされていたのですが手術中に急変したようですが、そのときの説明がありませんでした。病院から検死をと話がありましたが、母が嫌がりましたのでしませんでした。退院で家に帰るときに病院側から霊柩車が出され驚きどうしてだろうと思ったのですが一分も早く家に帰りたと思っていましたのでそのままになっていたのですが、三十年過ぎたいまでもなんとなくすっきりしません。

胆石をとる手術のため入院しました。10 日間くらい検査の日々でした。手術室に入るときはバイバイして、術後無事終わることを祈りましたが、そのまま帰らぬ人となりました。あとで石の大きさ握りこぶし大でしたが、現在では手術しなくてもとれると聞きます。なにか手術中にミスがあったのかと。でも 53 年の時代ですので、現代でしたらきっと退院できる結果だと思います。

有限株式会社に勤務。当時 54 歳で風邪をひいたということでしたが、10 日後に大津日赤病院で他界しました。私はそのとき 15 歳で、病名も脳梗塞と聞いていただけです。今の治療なら何とかなったでしょうが、そのときは医師もその程度だったのでしょう。

長男夫婦と同居でした。あまり病床につきませんでした。

親を見るべき兄弟は職場の関係で上京しており年老いた両親で大きい家の旧家の留守番をしておりました。昭和 55 年 12 月 5 日、前の畑の葱に冬ごもりの屋根を作っておりました体調が悪くなったことでしょう。家の中で休もうと思ったでしょう。玄関に入り手にはめていた軍手を片方は取りあと片方は取りかけで永遠の眠りとなりました。一日も病まず亡くなってしまった。お父様に謹んで哀悼の意を表します。

胃の具合が悪いと病院に行き、検査を受けたところ、食道に癌が見つかり、かなり大きかったが手術をした。手術は成功したが、数時間後(1日弱くらい)多臓器不全となりそのまま帰らぬ人となった。入院や介護の負担を感じる間もない最期であった。

<p>心筋梗塞で手術をして、入院中に軽い痴呆になり、自宅療養。10年後に大腸癌で、手術をしたものの満足に食事がとれず亡くなりました。その間施設と病院を繰り返し、デイサービスも利用しました。施設・病院にいるときは朝の世話は姉が、夜は私が。仕事が休みのときは朝からずっと父に付き添って、車椅子で外出したりで、私にとっては介護・看護はさほど苦痛ではありませんでした。</p>
<p>私の父は小学校3年のとき腎臓病で亡くなりました。当時は病院へ入院することもできず、家で近くのお医者様に往診していただくことぐらいです。</p>
<p>高血圧が見つかり、薬は服用中でしたが、元気に毎日過しておりました。亡くなる3・4ヶ月前くらいから、痩せが目立ちましたが、食事も普通に(少しずつ減って)とっていたようでした。家族も気付かず、朝に布団の中で眠っていたようでした。</p>
<p>農業をしていましたが、胃のあたりが変だと言って、許山病院で検査を受けて癌でわかり、手術も自分で決めてきました。義父の葬式の日と手術の日が重なって、夜病院に行き、先生の説明を聞き、切り取った胃は全部で手で触るとボクボクいっぱい癌があり、足がすくみ涙が出ました。4月15日に手術して本人はすぐよくなるつもりでしたが、7月に退院して12月には再び入院して、どうしても家に帰りたいと3月家に帰りました。告知していなかったので、一生懸命治ると思っていたようです。</p>
<p>両親二人で店を開いていて、胃が少し変ということで病院に行ったが、胃炎ということで胃の薬をもらっていた。6ヵ月後病院を変えた、癌センターに。病名は胃癌だった。手遅れ状態で、3ヶ月といわれたが、1年生存した。医学が発達した今でしたら治ったかも・・・本人は月に行ける時代にぼくの胃が変なのを治せないのは変だと言った言葉が忘れられない。病院入院 家庭で 病院死亡す</p>
<p>書道家。多くの弟子に囲まれた生活。真夏の個展(3日)終了後、意識不明になり即入院。3日後死亡。</p>
<p>73歳で亡くなりました。結婚していたのでわかりません。</p>
<p>心筋梗塞で病院で死んだ</p>
<p>60歳代で胃を3分の2摘出して、その後何回か腸閉塞を起こして入院したり、また、喉頭癌にもなっても、頑張って90過ぎまで自宅で母の面倒を見ていましたが、とうとう16年6月から施設に入りました。車椅子で移動していたけどボケることは無く、平成18年訪問したときは家に帰りたいと言っていました。あまり突然だったので後悔も残りましたが、後になって悲しみがわいてきたという今日この頃。来月で一周忌です。自宅、川崎。施設、保土ヶ谷。入院して4日目の世界。</p>

非常に規則正しい生活をし、犬を飼っていたので朝晩の散歩は欠かさず、酒は晩酌ビール一本、タバコは吸わない、夜遊びもしない生活でした。なので、肝臓癌と聞かされたときは信じられなくて頭が真っ白になりました。ある日顔と首の辺りが黄色いのでこれはおかしいと思い父に「医者に行ったら?」という素直に行き、検査入院してそのまま治療になりました。たまたま行った町医者が東京女子医大から来ていた教授というのもいて「すぐ入院しなさい」とその日に入院。多数のインターンをぞろぞろ連れて目の前でベッドの上で検査したりするのは非常に嫌だったようです。

最初は61歳で胃癌手術。4年で大腸に転移で入退院の繰り返しでガスも通らなくなり、痩せ衰え苦しんで死んでいきました。私は当日務めを持っていたので土日に看病にまわりました。ほとんど母一人で看ていました。

父はお酒を飲みすぎのためアルコール性の肝硬変となり、まして病院嫌い、病院へ行ったときには手遅れの状態でした。母が健康でしたので、入退院の繰り返しで、自宅療養の折には、近くの診療所から往診していただき、自宅では無理なときは入院するという状態でした。入院しても手厚い看護をしていただいたので、家族も、本人も、満足しておりました。

私の父は、昭和35年に亡くなりました。脳出血でした。昭和31年に倒れ半身が不自由になって、再発3回目に亡くなりました。医療も今と違って手当ても無い時代でしたので、考えるとかわいそうでした。今のように医療が進んでいけば私たちとももっとも長く一緒にいられたし、孫たちも見る事ができたと思うし、切なくなります。

家で母と二人暮らしだった。血圧が高かったためかトイレで倒れ、救急車で病院へ運ばれそのまま入院。5日後意識が完全に戻り、家族と話をし、皆が安心して各自の家へ帰った。直後、一人残った母に礼を述べ、息を引き取った。

私の父は明治44年生まれ94歳で亡くなりました。兼業農家、公務員の傍ら農業(主に米作り)に勤んでいました。80代頃から緑内障になり、90代に入ってから、ほとんど盲目になり、家で母、東京より戻った次女の私が、夫と共に介護の日々でした。体は何処も異常なく食欲もありましたが、孤独との戦いは私たちの想像を絶するものがあつたようです。目が見えないため、ラジオをと思っても一切聴こうとせず、常に家族の誰かが側にいて、話し相手にならなくてはならない状態で、少しでも一人にすると机をたたいて呼び、遅くなったりすると、絶対に許さない人でした。

18年前の11月末日の寒い朝洗面所で倒れ、右麻痺、言語障害出現。近医に往診を受けすぐ市立病院に入院しました。CTの結果脳幹部に近いところ出血認め、もって2~3日でしょうと宣告されましたが、それから約1ヶ月ほど治療を受けました。発熱(39~40度)、血圧が200以上、意識もうろう状態のときがあるかと思うと、時々平熱、血圧も下降し手話でうれしそうに応答ができて、面会が楽しく思えたものです。12月28日病状説明あり、新しい出血はないが以前の出血部位の周りに浮腫があり、徐々に生命の危険がみられるとのこと。病院でなくなりました。

<p>もう 36 年も前のことですので実家の兄姉が良くみてくれて、おかしくなって 3 日くらいで亡くなりました。嫁いってから舅は胃癌で約 1 年くらい病みましたが、手術をして 5 ヶ月くらい入院して、再入院して 4 ヶ月くらいで亡くなりました。約 30 年以上も前でしたし、全面的に病院へ信頼を寄せておりましたので医療関係者に対して不満は持ちませんでした。母がまだ若くて元気でしたので面倒を見てくれました。</p>
<p>定年退職して、好きなテニス、習字を習っていました。76 歳のとき癌（胆道）。77 歳で死亡しました。最後は病院で亡くなりました。検査検査で体力を消耗し大変でした。</p>
<p>父は胃癌で全摘手術をし、その後 1 年自宅で療養。その後再発して 1 年くらいで亡くなりました。病院では看護師さんもよく介護してくださり、満足しています。</p>
<p>私の父は 91 歳で亡くなりました（明治 28 年生まれ）91 歳まで病院で入院したことは一度もありません。私は結婚して家を出ましたから後は同居の兄と兄嫁と二人の子供がよくしてくれました。不満や不足を言ったことは一度もありません。兄嫁はたま子さんといいますが、家を出た娘は 4 人立派に結婚していましたので安心してたま子さんにお任せです。父が娘よりたま子たま子と兄嫁に甘えお世話になっていました。とても良くしてくれました。</p>
<p>兄夫婦と共に生活。以前より胃腸が弱くかかりつけの先生に往診を週に 2 回ほど来ていただいておりましたが、腹部に異常を感じ病院にて診療を受けるもわずか 3 日にて他界しました。</p>
<p>実家の妹夫婦が看病した</p>
<p>私が 5 歳のときにフィリピンのレイテ島で戦死したようです</p>
<p>12・3 歳で商家に丁稚奉公をし、結婚後自分で商店を開業して商売に励む。年中無休で夜も遅くまで働き体力には自信があったようですが、無理が高じて 72 歳過ぎに老人性肺結核で病院に入院。約 1 年の療養生活を送り（私はほぼ毎日のように病室に伺い身の回りの世話をさせていただきました）、病院で死亡いたしました。</p>
<p>農業で昔の次男だったので子供は 8 人育て苦労して日本住血吸虫病で亡くなりました。母が付き添っていたので、母がいつも不満を言っていました。私は嫁いでいたので。</p>
<p>母と二人で生活をしていました。母は 60 歳で痴呆症になり、80 歳まで、最後は施設でなくなりましたが、それによって体を害し過労とで父は目が悪くなり、施設に 1 週間あずけましたところで、目が悪いため危ないというので紐でベッドへ縛られていたらしく、人間不信になり、嫁ぎ先の私の家で半年過し、眠るように亡くなりました。母が先に病になったにもかかわらず一生懸命看っていた父の方が 10 年も早く亡くなってしまいました。現在私は義兄を施設にあずかっていただきながら、折々見に行き、父も今生きていてこのような優しいケアを受けさせてあげられれば良かったと後悔しています。</p>

私が長女で妹2人弟1人でしたが母が78歳で亡くなり、92歳まで父の希望で一人暮らしでしたが、92歳まで病気もせず元気で、庭の草取りから家の掃除も全部一人で綺麗にしておりましたが、急に腹痛があり病院にいったところ、腸に穴が開いたのが原因でした(便秘が続いていたのが原因)。すぐ手術をしましたが肺炎をおこして亡くなりました残念でした。不満を感じることはありません。

父は開業医に3年も通院して、あなたは肋膜炎だから大丈夫私が治してやると言う医者言葉を信じて通院していましたが、やっと私が父を説き伏せ甲府の呼吸器科にいくともう肺癌も手遅れであちこちに転移しており、中央病院に行ったときにはもう駄目の状態で痛みをとってくれただけが幸いでした。性格が頑固で医者口のうまさを信じすぎたのが一番の失敗でした。開業医の一度捕まえたら患者を離さないということが一番農村での問題だと思います。

退職後、2~3年参事として会社に残り、会社を完全に辞めてからは、月に1~2回ほどゴルフに行ったり、たまに母と旅行などに行き、悠々自適の生活をしておりましたが、顎の下にしこりが見つかり、そのしこりが瞬く間に大きくなっていき、大学病院で検査を受けたときは手術不能という状態で入院しました。X線照射し、しこりは小さくなりましたが、食欲が落ちたちまち痩せてしまい、食事もとれなくなり点滴に頼るようになり、一時は退院もできるようにいわれていましたがそれもかなわず、入院して6ヶ月で亡くなりました。

最初にお断りいたします。私は長男に嫁ぎましたので義父母はしっかり看取りましたが実父は遠く離れており、弟夫婦と一緒に生活でございましたので、あまり心配はしておりませんでした。

治療療養生活を3ヶ月。翌日退院という日に死去。

郵便局を退職後、妹の家族と一緒に生活をしていて、80歳の頃肺気腫と診断され療養生活をしていましたが、最後の7ヶ月は入院生活でした。その間に病院では3ヶ月たったのでいったん病院を退院してまた悪くなったら病院に再入院するよういわれました。あなたよりもっと悪い方が入院したいという希望を持っているとのこと。37度くらいの熱が続いて年齢も90歳の高齢なのでもう少し入院していたいと申し出ましたらしぶしぶ了解してくれました。あまり気持ちのよいものではありませんでした。

病気らしい病気もせず亡くなる年まで化学者をして現役で仕事をしていました。60歳代で軽い脳梗塞で後遺症も残りませんでした。70歳後半で大腸癌で人工肛門になり、80歳に入り胃癌で手術。87歳で死亡。病院入院1ヶ月で。(私立大学病院で入院・手術のたびに父本人が先生方にお礼、現金等をするというのでお出しするとすぐ受け取られた。治療費以外に高額の出費だった)

<p>53歳で脳溢血で倒れ20年間家で治療及びリハビリ生活を送り、少しずつ機能回復してきたので、自由に仕事をしたり、旅行もできるようになり、約10年間夫婦で仲良く生活していました。その後前立腺癌になり、その後転移し、最後は病院で息を引き取りました。介護とリハビリは自宅でお袋と二人で協力してやってきました。臨終のときは医療関係者はあくまで事務的で乱暴で無責任で冷たいものでした。</p>
<p>胃が痛くて医者に行っていました。甲府の病院に行っていました。7月頃からです。なくなったのは9月29日です。戦時中で何にもできず今思うとかわいそうだったと思います。</p>
<p>少し血圧が高めでしたが医者先生とうまく薬をのんでいましたが倒れることも無く、兄夫婦、孫の家族と穏やかな生活を送り良い人生だったと思います。</p>
<p>会社の職場でしたが腎臓病(左右糸球体)のために入院して約4.8ヶ月の闘病生活を送り、私が19歳のときに亡くなりました。母一人子一人でしたので生活は大変でした。医療関係は23年も前のことですから、まだまだ不足だらけでしたが、父の入院した病院の先生は大変親切で感謝しております。</p>
<p>ちょこちょこ歩く病気、今名前を思い出せませんが、歩くことができなく、また認知症でもあり、目もだんだん見えなくなっていました。病院で83歳で亡くなりました。入院生活は2年くらいでした。</p>
<p>前立腺で尿の出が悪くチューブを通していた。一時入院していたこともあるが、自宅でのんびり生活していた。30年も前のことなので母と弟夫婦と一緒にいたし、遠方なので私は全然面倒は見ませんでした。</p>
<p>父母とも広島で被爆しその後元気でしたが、70歳くらいから病弱になりました。</p>
<p>自転車ごと転倒したことがきっかけで、外科入院中(鎖骨骨折)突然黄疸が出る。他の内科病院へ再入院。大手術。延命1年で癌とは告知されないまま・・・</p>
<p>普段どおりの生活をしていましたが、風邪をひいたことが原因で急に夜中に具合が悪くなり、救急車にて病院に搬送され、翌日早朝に死去しました。私は小学校3年生9歳のときでした。</p>
<p>父は幼児期喘息で身体は弱かった方でした。老年期には心筋梗塞、神経痛などがあり、心臓が苦しいようでした。死亡の7~8ヶ月間は町内の病院に入院加療でした。死の10日位前になって退院して自宅に戻りたいと自主退院となる。死を感じてか食事もありとらなくなり、家族(嫁)に迷惑をかけたくないという意図があったらしい。療養中は特に不満も無いようでした。(嫁には家で療養することを拒まれていた)</p>
<p>兄嫁さんと兄が病院が近いので良く見ていただきました</p>

脳溢血のため3ヶ月すると病院を出され、新しい病院を探すのが大変だった。

農業を夫婦二人で行っていました。(当事養蚕も行っていました)その年、少し痩せた?と言われていましたが、本人はそれほど気にかけていず、4~10月の農業を行い、10月末収穫も終わって、自分で病院にて診察を受け、そのまま医者に入院するよう進められて入院しました。その1半月後他の病院で亡くなりました。検査を何回か受け、衰弱が目に見えて進みました。

兄夫婦と同居していましたが、平日は母と二人で日中過していました。風邪をこじらせ肺炎になり入院。糖尿病もあり、毎日血液検査をされ、それも嫌で、耳も少し遠かったので、看護師の方ともあまりコミュニケーションがとれず、たまに病室を抜け出して家に帰ってきたときもありました。が、そのうちまた肺炎が悪化してとうとう病院で亡くなりました。私は日中父の世話を病院で、母は血圧が高くずーっと病院で付き添えなかったので、兄が時々夜付き添ってくれました。それほど長い入院ではありませんでした。

父は定年退職後は自宅で自由気ままに隠居生活を送っていた。痛風を発症し歩くことが困難となりそのことによって認知症を発症。母と二人暮らしであったため、介護困難にて病院へ入院し療養生活を送る。2ヶ月療養生活を送るが、その間、認知症が進行。認知症の父の発言に医療者が立腹し父はもちろん、家族(子ども)へ対応が悪いと感じることが多かった。入院2ヵ月後に永眠する。

定年後、家出生活していて肝臓がんになり、発見された時には手遅れで(我慢して勝因に行かなかった)、2ヵ月程入院後、そのまま亡くなった。

父は病弱で70歳位から寝たり起きたりの生活でした。80歳くらいから寝たきりになりました。近所に父と同じくらいの年齢のお医者様がおられ父の具合が悪いと夜中でも来てくださり、感謝するばかりでした。その先生が言われるには、母の看護が良いから生きてらっしゃるということでした。母も年をとり、看護が難しくなり入院することになりました。知人が評判のよい病院ということで入院しましたが、看護婦さんの態度は悪くイライラするばかりで、付き添いさんをつけます。見る見るうちに弱り、ある日曜日に行くと父は意識がなくなり呼吸が荒く、なってそのまま亡くなりました。

自宅で長男の家族と同居していた。肺癌の診断後も余命3ヶ月~半年とのことで何もせず在宅療養、一ヶ月もなく自宅で死亡。亡くなる一ヶ月ほど前に入院精査のため、一週間ほど入院していた。本人へは癌の告知はしていなかったが気づいていた様子で、誰も何も聞く事はなかった。本人は自宅で過ごしたいという希望があったので、通院治療ということでかかりつけ医にお願いしていた。家族には看護師が4名いるので何もなかった。

<p>母の死後、10年間、自宅で一人で生活していた。その間、娘である私が週に4～5日通っていたのが8年半、兄夫婦が自宅を改装して同居したのが1年半です。兄夫婦と同居の頃から脳溢血による症状が表れ倒れたりして入退院を繰り返していたが、普通の生活が出来るように回復していた。その後は同居の中で寝たり起きたりではあったが、9月頃に意識がなくなり入院。その後は認知症のようになったが家族とは話をしたりしていた。肺炎・下痢になり12月終わりに亡くなった。私が働いていたため年休を取ったり、夜に泊り込みをしたりして介護した。</p>
<p>10年くらい前に大腸癌の手術後、半年に1回は近くの消化器内科で腹部エコー、大腸鏡などの検査を受けていた。半年に1回の検査時エコーで直径8cm代の肝癌が4つ見つかったが、自覚症状、血液検査では異常はなかった。入院して精査中に肝機能が悪化したため手術までに1ヶ月位かかり、手術をしたら横隔膜まで転移していた。手術後病状が悪化し死亡した。比較的、主治医から説明を受けていたが治療についてはもっときめ細かい説明を受け選択したかった。</p>
<p>大正11年生まれ。若い時、戦争で兵士として戦地(東南アジア)に行った経験あり。戦後は国家公務員(自衛官)として堅実な生活ぶり。40代半ばで胃の手術、術後の肝炎で入院生活を経験する(自衛隊病院にて患者自身の自立意識が高いので医療者に関する不満は聞いていない。面会時、明るく医療者を会話をしていた記憶がある)。当時、50か55歳で定年退職まで普通に仕事をしていた。50代半ば過ぎから、肺結核、H^p-キソツ、肝硬変と種々の病気で入退院の繰り返しだったが自宅で過ごす時は普通に生活していた様子(遠隔地に私は住んでいた</p>
<p>従来健康で時々、ゴルフなどもしていた。舌癌になったことがきっかけで病床に着き、病院と自宅を行き来していた。病院が遠かったので通うのが大変だった。</p>
<p>5人の子どものうち、4人は結婚し、二男と妻と3人暮らしで、時々里帰りをし、母や父の健康を気づかっていたが、68歳の時、脳動脈瘤にて倒れ入院。子ども達の看病もむなしく8日目に他界しました。日頃から高血圧で投薬は受けていましたが残念だった。幼い頃から兄弟が多く、苦労したようですが、頭の良い父だった。私は特に父に似ていたので一番好きでした。お酒の好きな父、晩年は失明にて不自由だったと思うが、器用者で頑張り屋でした。今生きていれば101歳です。元気だったらと悔やまれますが、冥福を祈るのみです。</p>
<p>昔、肺炎を患ったことがあり、老後は元気で活動していたが、糖尿病を患いこれと肺炎などが併発して入院生活を送っていた</p>
<p>70歳までは海外勤務、その後は大阪、京都、東京と息る。娘のところに遊びに行くのが楽しみの生活。家では本を読み、書き物をするなどの生活を送っていた。亡くなる前は時々病院へ通って薬を飲んでいただけの様子(心臓の薬)</p>
<p>農業に従事 施設 家で治療療養生活を送った</p>

日本脳炎 = 病院で (5 日で)

癌で入院 一ヶ月足らずで死亡

大変健康的で運動は野球その他ゴルフを楽しんでいました。肝硬変・・・最後の病名。入院治療。その後自宅で家族、母、弟夫婦、近くに嫁いだ姉、妹より看病され、私は遠方に嫁いだため(子どもも小さく)ほとんど看病できませんでした。今思えば親不孝な娘だったと反省します。

娘(私)一家6人暮らし。胃がんの末期と診断のため病院にて3ヶ月の治療の末、あまり不満は感じなかったと思います。

父は私が22歳の時になくなったが、物心ついたときからはげ頭でおじちゃんみたいで、外見だけで子どもの時は嫌だと思っていた。父と行動したということがあまり無かったので、思いでもあまりなく、死んでからもう少し優しくしとけば良かったと後悔した。最期は病院だったので、母が最後の3日間は泊まりこみで世話をした。私はもう35年も前のことだが世話という世話もせず、父に対してはすまないと思っている。優しい人だったのに。

80歳まで現役、自宅弟夫婦と孫に囲まれて生活しておりました。どこが痛くても病院へは行きませんで、痛いともいいませんでした。一度検査してもらったことになった結果、肺癌がわかりました。自宅で介護しておりましたが末期がんで延命治療はしていません。トイレに行く方向がわからなくなり入院しました。毎日何度も弟夫婦が見舞いに行き、嫁を頼っておりました。私は大阪におりますので弟夫婦に面倒をお願いしました。本当に弟夫婦が良くしてくれたと感謝しております。母は自宅で父が介護しましたので、父も自宅だと弟夫婦は思っておりましたが。

私の父親は私が中学校を卒業した年に亡くなりました。46歳の若さです。ある日、木材が必要で山で松の木をきっているとき枝が折れ、直径が50cmくらいの木が父の体に落ち、脊髄をおり、子どもの頃ではっきりわかりませんが、整骨病院に入院し、1年もの長い間の入院も結局は元気になれず7人の子どもを残し他界しました。遅くなりましたが職業は漁業でした。

傷痍軍人で右腕がなく、公務員だったが早めに退職し、英語塾を頼まれてやっていたのが60歳頃にはそれも辞めた。畑仕事など楽しんで行っていたが、80歳頃から体調が悪くなり、入院生活を送り母が懸命に世話をしていた。酒好きでそれも大きな原因だったとようだ。腸内の病院だったがスタッフの方々にはよくしていただいた。84歳で他界した時は主治医の自宅に出向き、お礼を申し上げた。

実は父は私が2歳5ヶ月の時に他界し、何一つ記憶になく、お答えをすることができません。申し訳ないです。

父は母が亡くなり一人暮らしをしていた。自分で（？車）し足が不自由だった（10年位）。兄が実家に帰ってきて、一緒に暮らし安心 めんどうみてくれ。糖尿病 自宅で療養生活していた。兄嫁が面倒見てくれていた。兄、姉、父を看護して心より感謝しています。

2002年、前立腺がんが発見され、約1年実家の方で治療・療養生活を送り他界。発見が遅かったと思われる。

長男夫婦と母と孫達と7人で生活していた。38年前、脳出血で2回目の出血が原因で他界。自宅で母と兄夫婦が看護していて不自由ではなかったと思う。言いたいことを言っても特に逆らうこともなく、入浴も兄夫婦が2人で1回/3日は入れていたとの事です。私自身は遠くで働いていたので2~3回/年ほどしか帰れず、その時だけ援助していました。今のようにすぐ病院でというのも時代の流れで仕方ないことだと思うが・・・・・・・・

普通に生活していたが、癌がわかり、病院で治療後亡くなる

退職後、母と二人で生活しておりました。食欲がなくなり、体がだるくの症状はあったらしいのですが、認めず、自分でも耐えられなくなってから病院に行き、すぐ入院。個人病院であったため毎日少しずつ（だらだらと）検査が行われ、大学病院の先生が見えて説明。転院予定の朝亡くなりました。肝硬変と言われていましたが、私自身は直接先生から説明を受けることなく、たった1週間の入院、まさかの急死という感じです。悪くなると大きな病院に移動するのであれば、もっと早く処置して欲しかった。後悔だらけ不満だらけです。父のいた個人病院は最悪。

直腸癌で死亡。最後はホスピスに収容。

70歳後半まで、自営業（菓子屋）の仕事をしていた。68歳、くも膜下出血にて病床に2週間ほど着き、リハビリにて回復し、その後、自宅で生活。心筋梗塞にて40日ほど病床に着き、自営業に復帰（心筋梗塞と同様な状態を3回繰り返す）。88歳、心筋梗塞発作で病床2週間着き、永眠。医療従事者に不満なし。

（母）

40年前のことなので肝癌末期のことは父（夫）のみ告知で私も本人も知りませんでした。最終入院時はもうモルヒネ等で痛み治療をされており、家族介護はほとんどなしです。

6人の子供を戦中戦後と育てた苦勞人。私は末娘。でも気丈な人でした。90歳くらいまでほとんど病気もなく、大腿骨頸部骨折他、手足の骨折を3回ほどしてましたが、92歳くらい頃より、活動低下になりました。塞栓(血栓)がおこり、片足を切断除去し、認知症がひどくなり、入院 施設 入院の繰り返しとなり、95歳で他界しました。私は30年以上離れて暮らしていた娘なので、よく把握できてませんが、義姉がとてもよく面倒を看てくれました。地域の高齢者の援助も比較的恵まれている地域だったので、いろいろと恩恵をこおむり、不備などなく、過ごしました。

母が49歳のとき真夏の暑い日に倒れて外傷性の脳内出血で、田舎で昔だったので病院もきんとしていなく、今考えれば、脳への出血がじわじわ出ていたと思う。最期はよく覚えていない。

別居中に発病し、入院手術、自宅療養、そして再発再入院と3年くらいの間いろいろなあつたが、思い通りの世話ができなかった。

専業主婦として家庭、地域活動に頑張っていた。

60代で胃癌の手術をし、5年後再発、手術。病院への通院、入院を繰り返した後死亡する。

若い年齢で病気になり東京の病院の入退院を繰り返していました。

兄夫婦と同居していて元気で畑仕事をしていて、便秘になり、病院で診察を受けると、腸の検査をするので検査前日の下剤を服用するも便も出ず、腹痛を起こし、その病院へ入院するも心臓が悪くなり(腹に水がたまり)点滴を行ったが何一つ処置もなく死んだ。大病院なら死んでないと思う。残念でなりません。入院から3日目で死んで、病院のミスかと思ったが、兄夫婦が納得していて町内の病院のためあきらめました。全病院(大小病院)もっと医療の水準を上げて診察をして欲しいです。

父が亡くなってから1年ちょっとで亡くなりました。最終的には腸が原因のようで病院で最後になりました。昭和55年亡くなる。

秋頃歯の治療をした後(ほかにもそういう人がいた)2ヶ月ほどして病気になり、白血病と診断された。6ヶ月程の入院で急逝した。昔のことで医療も進んでいなかった頃でした。

眼の疲れがひどく大家族(10人)の世話、高血圧(210もあったのに本人気付かず)、上京してきて出産の手伝いをし、明日は田舎に帰るという日にトイレで倒れた。脳出血だった。(今から45年前)すぐ救急車で入院したが、医療設備も悪く、少し話せるまで回復したが、酸素ボンベが破れてしまったりで、3週間で亡くなった。昔のことで病気の理解、勉強不足で、今ならああしてあげたのに、こうしてあげられたのにと後悔している。

85歳頃、脳梗塞で倒れ、病院生活から特別養護老人ホームへと御世話になりました。途中、民間病院での出来事ですが、姉が病室に入りましたところ、手・足拘束されていた亡き母の姿を見、あまりにも気の毒な亡き母の姿と、許可(話し合い)なく拘束ベルトを使用した病院に怒りがおさまらず、数日後に他の理由をもとに他病院へと転院いたしました。

胃癌で病床についた

父が亡くなって以後1階で一人で生活をし、朝食は孫が2階より持って行き、昼・夜は2階とともに食べたが、食べたくないときは捨てたりそのままだったりした。常日頃キッチンドリナーであったので、姉妹達と相談しビールだけは認め自分で買いに行き、つまみも自分で買ってきていた。肝臓を悪くし、皮膚炎になり、病院に検査入院に二度入った。自分が見舞いに行き6時に帰り、その後姉が行き消灯で9時に帰るとき、玄関まで送るといったが立てなかった、とあとで姉から電話があり、夜の11時に病院より来て下さいと電話があり病床に付き添ったが、そのままだった。

母は人のことを惜しみなく耳いれ、アドバイスをしていました。妻とも親子のようにしており、私のほうがうらやましいことが時々ありました。母も79歳で死にましたが、家族10名の大世帯を明るく、4世代の長としてよくやってくれました。

老衰のため意識が無いことが続き、あまり入院してからは会話はありませんでした。病院の方々は大変親切でしたが、場所が遠かったので時間がかかりました。

高齢のため病院で。関係者の努力には今でも感謝しています。

足腰が悪く病院へ行って、車から降りるときに転んで入院。入院中転んで胸を打って痛がったが、死因は本当のところはわかりません。(病院側はリウマチというけれど)

心臓発作にみまわれることが年1回程度あったが、普段は普通の生活を送り、旅行なども楽しんでいた。通院時に自転車で転び、足の指を骨折。医者のお勧めで入院し治療することになったが、入院中に肺炎を起こし、入院から1ヶ月、驚くほど急に亡くなってしまった。

母は医者知らずというくらい丈夫で元気者でしたが、大腿部骨折により始めて入院。手術しなければならなくなり、あのと時の母の顔は今でも忘れることはできません。老人になったの骨折は本当に大変なことです。本人は家に帰れば今まで通り、おさんどん、買い物、掃除等なんでもできると思っていたのが、一人で歩くこともできず、誰かの世話にならなければ何も出来ない。それが嫌でだんだん食事をとらなくなり、最後は病院で御世話になりました。看護師さん、ヘルパーさんに大変助けられました。

<p>私は二人姉妹の妹です。姉は小さな飲食店をしていて、母はずっとそのお店を手伝いながら、姉の子供を育てたので、姉としては、母を最期まで面倒を見るつもりでした。私は姑、小姑のいる人と結婚したので、姑の面倒をみななければならない立場でした。それで、せめてと思い、夫の好意で、毎月欠かさずお小遣いを送りました。そして店と住居が別のため、ずっと住居で一人暮らしをしていた母は、それも無理となり(喘息の持病があり点滴を受けねばならず・・・)平成7年の暮れに近くの小さな病院へ入り、平成10年4月に亡くなりました。</p>
<p>4人の子供のうち3人は世帯を持ち、一人は高校生でした。突然風呂で倒れ意識が無くなり、しばらく家で看病しましたが、入院し1ヶ月後に亡くなりました。</p>
<p>風呂に入っていて、風呂から出られず、追い炊き中、火傷で入院。そのまま約2週間後死亡。医療関係、対応・病状説明その他満足。</p>
<p>地方病で施設で生活。その後、胃癌で亡くなる。不満なし。</p>
<p>直腸癌で倒れて3ヶ月で逝ってしまいました。</p>
<p>私と二人で暮らしていた。早朝、末娘(母の実娘)に電話をしようとし、バランスを崩し、玄関の上がりかまちから落ち、ドア(木)に頭を打ち、内出血で入院。救急車を嫌いタクシーでCTのある病院へ行くも、専任の医師がいなく転送された。出血を取り除く手術は5日後にされたが(頭部に小さな穴をあけて抜き取る)、麻酔は全身麻酔で、一度も意識が戻らないまま8ヵ月後に死亡。私は仕事のある日は終了後9時まで、休日の日は昼頃から夜まで毎日通い、手足のリハビリ、体を拭いたり、声をかけたりと努力した結果、わずかであるが足の親指が動くようになったのに。</p>
<p>家で普通に生活。骨髄腫の治療のため大学病院に6ヶ月間入院。退院後月1回タクシーにて約10年間通院。加齢に伴い通院が困難になり、近くの病院に在宅治療に変更。</p>
<p>治療療養で3年後病院で死亡</p>
<p>家と病院を出たり入ったりした</p>
<p>専業主婦で父が亡くなってこれから好きなことをして楽しんでもらおうと思っていた矢先、下血があったようで、近所の医院より紹介先の病院で大腸癌と診断され手術、転移がひどく人工肛門になり、後半年くらいと言われる。一時期元気になり、家族旅行が出来たが、ちょうど半年の検診に行ったとき病院で倒れそのまま入院。後は苦しまないような治療をお願いするしかなかった。お風呂に入り人工肛門の手当てが当時は大変だったようだが、お嫁さんには頼みにくかったようで、時間をかけて自分でやっていたようです。体がつらいときでも我慢強い人なので。</p>

成人病の定期検査で再検査の結果入院。病院の皆さんは大変親切に接していただき母も感謝していました。孫娘が大きくなったら看護師になると言ったときに涙を流した顔は忘れられません。

母は入院の半年前まで食事は自分で作り自分の出来ることは全て一人でしておりました。私は普段の買い物、掃除、話し相手、主人は車で普段のかかりつけ病院への送り迎えをしていました。入院の2・3日前より食事をしなくなり、トイレの場所がわからなくなりました。玄関等で何度か失敗があり(大小)、かかりつけの先生の相談の上、先生の紹介で入院しました。そのときの診断は(かかりつけの先生の)脳塞栓でした。入院後も口からの食事を嫌がり、点滴で栄養をとっていました。入院後10日目の検査で末期の肝臓癌(C型肝炎からの)と診断され、入院しました。

母は70歳半ばまでは海外旅行、社会参加で意欲的な生活をしていました。おしゃれにも気を使い楽しんでいました。軽い物忘れの症状が出始め、やがて進行。病院の世話になりました。その中で転倒して、骨折(大腿部)、手術もできなくて寝たきりとなり益々悪化。色々の機能が衰えてきました。お世話になった病院は民間の専門病院。大変に良くしてくれまして感謝しています。母も居心地良かったようです。入院費はかなり高かったと思いますが・・・

病院で治療していたのですが84歳で家でみて欲しいとのことでした。家は皆勤め、また小学生だったので、姉妹で施設があればそうした方がよいかと思い、石和の温泉病院に入れてもらうことにしました。家族がいるときは大変よくみてくれたようでしたが、場所が変わり人も知らない人で慣れず、寂しかったと思います。1週間で連絡が来て亡くなりました。

90歳まで一人で楽しみながら暮らしていました。92歳のとき風邪が原因で入院し、1週間ほどで亡くなりました。

足腰が弱かったのでリハビリのため入院しましたが、風邪の患者の人と同じ病室だったので、風邪をひき、肺炎をこじらせ、そのまま亡くなりました。風邪の患者さん(小児科)と同室にしたことには今でも疑問を持っています。

肝臓癌。医者のおりに病状が進み、辛い日々を送った。兄も病気だったため、近くに嫁に行った。私が主にみていた。しっかりした母だった。優しく接してくれた先生を心から信じ病院に最後まで見ていただいたことは有り難かったと思っております。昭和57年7月死去。

12月下旬風邪をひき(持病の高血圧と心臓病の薬をのみ体に気をつけていた)入院。回復に向かったり、また悪くなったりを繰り返す。少し認知も出たか、夜家に帰ると言っては看護師さんたちを困らせ、その度家族も嫁と3人の娘が交代で付き添いをする。ただ家に帰りたいとはいつでも言っていました。せめて1日でも2日でも我家に帰してあげられたらよかったのにと、本当に後悔しました。ただ母の場合娘が3人も近町にいましたので毎日誰かいたということが幸せだったとも思います。私は娘一人です。母のように毎日交代で看護というわけにはいきませんでした。

長男夫婦と同居でした。近くの病院に入院で、近くの兄弟妹がみました

母のことはあまり覚えていません。私は7人兄弟の末っ子で、兄弟が大変だったと思います。でも今はその兄弟の絆は誰より強く思います。

父の死後田舎の実家で一人生活。たまたま姉が訪れたとき、心臓発作。緊急入院。心筋梗塞と診断。入院1週間後に息を引き取る。あっけない最期であったが、苦しまず幸せな最期だったと思う。

結婚してからノータッチです

私が小学校に入る頃より病床に着いていたので母親とどこかへ行ったとか一緒に遊んだ記憶がなく、学校から帰って母の枕元で今日どんなことが合ったなど一日の様子を話すのが楽しみでした。

母痴呆症で10年近く生存していました。5年くらいは姉、私の家を行ったり来たりで過ごし、あとの5年は、ころんで、大腿骨を折って、病院生活となりました。そして歩くこともできず、胃ろうという始末なのに退院を命じられ、今の世の中医療関係の冷たさに途方に暮れました。3ヶ月です退院してください、と言われた。病院が遠くなると私たちも生活があるのでお世話するのに益々大変です。どうして病院の儲け仕事かと思うと、いてもたってもいられなかった。今の世の中の冷たさ、本当に腹が立ちます。

母は自宅で一人暮らしだった。風呂場で骨折し入院したが、入院と同時に「先生と看護婦さんが私を殺そうとしている」と騒ぎ出し幻聴幻想が始まってしまった。手術は成功したがリハビリが無いまま退院させられた。その後、老健施設、有料老人ホーム、特養ホームと移ったが次第に正気が戻ってきた。しかし肺炎にかかり、入院し、そこで腰の骨が見えるほどのひどい褥創にさせられ、そこから感染症になり、別の病院へ移り、2週間ほどで死んだ。最期の病院の手当では良かったが、骨折と肺炎で入院した病院の看護婦や介護の方の処置が適正だったらあれほどひどいことにはならなかったでしょう。

父戦死後一人で私たち姉弟を立派に育て上げました。当時金融機関の住み込みとしての勤めくらいしかなく、しかも男の子と一緒に住んではいけないという条件で、母の実家に預け、私だけ連れて、切なくても働かなくてはならない現実でした。定年まで勤め上げました。私たち独立後、独り暮らしになってからは好きな教室（組みひも、切り絵、踊り、老人大学等々）に通い、友人もいっぱいでき頑張っていました。独り暮らしの寂しさを切り抜けていたようです。母の年近くになりやっとその心がわかってきました。不平不満言わずただただ働いてきた母に親不孝ばかりでした。

高血圧で突然倒れ、くも膜下出血で意識が戻らないまま、2回目の同現象時病院に運ばれ、約1ヶ月後他界した。入院中は意識はあっても記憶が無い状態であった。

1年に1回ほど眼科や消化器系や整形などの病気で市立病院に入院することがありました。退院後はその病院の一人が開業し、近いため通院治療していましたが、2年前の11月上旬下肢痛としびれで動けなくなり、入院させてもらいたく市立病院を受診しましたが、他の病院に行っているからと痛み止めをもらい、1週間後当日の先生がいらっしゃるということでそのとき来るようにいわれたそうですが、痛みはとれず、3日後再受診し入院させてもらいました。ブロックなどの治療を受けましたが相変わらず痛く、手術すすめられ、本人もその気になり12月上旬に手術予定成功したと説明をされ明日からリハビリ開始という前夜、クモ膜下出血を起こし、それから2日後に死亡しました。高齢であること、血圧も高め、麻酔大丈夫ですかとお聞きしたときの説明が、飛行機に乗るとき落ちないでしょうねと誰も言う人はいないでしょう・・・という説明をされたとき、なんという医者だと思ったことは事実です。でも歩かなかったけど、痛みしびれがとれたと喜んだ母が今も忘れられません。

家で3年、病院で1年、施設で3年過し、医療関係で看護師の皆様にご迷惑をかけたことと思う。病院ではよくお世話をしていただき感謝です。

兄夫妻の家で死亡。肝臓癌で床についてから1ヶ月くらい。

実家の妹夫婦が看病した

結婚して子ども6人出産し(最後43歳まで出産)子供を育てながら商業に従事して40歳代後半より病気(胃痙攣、胆石、神経痛など)を定期的に発病しては苦しむようでしたが、60歳頃より元気になり、温泉や旅行を楽しみな生活をしながら商売をしていましたが、83歳頃商売をやめて静かな毎日を過ごすようになりました。腰痛で入退院を繰り返しながらも元気に暮らしておりましたが、92歳のとき脳梗塞で入院。一時危篤状態だった(1ヶ月)けど回復して、病院で約2年間お世話になり94歳で死亡。

母は食道癌で亡くなりました。最初ものが飲み込みにくいといって病院に行きましたが、腰がすごく曲がっているためレントゲンができないといって胃薬だけくれましたが、どうもおかしいということで大学病院に行き、食道癌とわかりましたが、やはり手遅れで、痛み止めだけの治療で3ヶ月ほどで亡くなりました。もっと早く大きい病院に行くか、ホスピスがあったらと悔やまれてなりません。

12年前、94歳で亡くなりました。老衰。農業と主婦業でした。病院で1週間くらいの入院治療で亡くなりました。

温泉病院で老後を送りましたが最後の1ヶ月くらい肺炎になり、医療機関で療養をしたのですが他界してしまいました。

母は亡くなる前までは和裁の仕事をし元気に過しておりました。旅行などにも出かけたりしてましたが、15年前に突然アルツハイマー（前から兆候はあったでしょうが気付かず）にかかり壊れていく母の姿を見るのがつらかった。階段から落ちたのをきっかけに病院に入りましたがだんだん寝たきり状態になり（口もきかずただボーっとしている状態）ました。3ヶ月で病院は移るよういわれたが他の病気にかかり亡くなるまで（1年半）入院できました。

血圧が高かったけれど子供や孫と楽しく暮らしていました。肉魚など生臭いものが大嫌いで野菜を好み、塩味の濃いものを好んで食べました。子供の頃子守奉公に行った家で鯉の煮たのを出してくれるのが辛くて、旦那さんが俺と一緒に味噌漬けで食べるようにしてくれたのがうれしかったと、よく話してくれました。最後は脳溢血で亡くなりましたが、倒れて病院に入りましたが、意識の戻らないまま5日で亡くなりました。

母は健康で父親が亡くなった時の年齢は50歳でした。明治の母親ですから8人の子供があり、それぞれ高等教育を受けさせてくれました。その母親は父親と違って長生きをし93歳まで生きました。普段が健康の母でしたから別に病気ではなく老衰でした。最後は病院で亡くなりましたが、医療関係その他親切にしてください感謝しています。

パーキンソン病で他県なので最初の1年間は兄の所で最後は妹の所で。

若いときは農業と家族とを守りながら実直な生活をし、年老いてからは妹の家族と実父と実母は生活していましたが、ある時村内の健康診断のとき胃の検査のためにバリウムを飲んだのが原因で腸が破裂し手術の結果腸を切断（76歳のとき）。人工肛門の生活になりました。その生活が不自由でまた外出することなく81歳の生涯を閉じました。寂しい生涯でした。入院を2度ほどしましたが病院の関係者には感謝していますが、もう少し心をこめた看護が欲しいなと思いました。老衰でした。

母は結婚後、すぐ父が中国へ出征し、その間私が生まれました。食糧難の中私一人を育てるのは大変のようでした。33歳で難病（膠原病）で入院し、35歳で死去。まだ子供でしたので不満というより、病院が汚く、今考えると母辛かったと思います。

大腸癌の病気で自宅治療療養生活を送り、最後に10日間くらい入院して亡くなりました。

事故のため3日くらいで亡くなった。

母は施設におりました。たまに家にも戻っていました。看ているのは義妹でよく見てくれました。私が行くと喜んでくれました。

脳梗塞で朝4時ごろお手洗いに起きようとして倒れてそのまま入院して5日目に亡くなりました。病院で死の直前に看護婦さんたちを寄せて先生が母のことを教えていて息を引き取るときも父が部屋の中に入れてくれといっても入れてくれませんでした。市立病院は前にも盲腸で若いお嫁さんが亡くなっていましたので、頭の中にはありましたが、それが今でも忘れることができません。また、母が駄目だと思ったとき先生を呼びました。その医師はお酒を飲み街に

出ていました。
父の死後半年後に急に食欲が無く入院し、1週間後に亡くなった。病気の発見が少し遅かったようでした。
農業に従事していた。転倒後老衰が増してきた。
股関節骨折で寝たきり生活 4 年間
平成 18 年、母は昨年 11 月 95 歳で亡くなりました。80 歳過ぎ農作業をして私たち都会に住む子供に野菜を送ることが生き甲斐でした。兄夫婦と孫と同居でしたが、離れて 85 歳まで自炊洗濯、生活は全部一人でできていました。庭で転倒して入院したのをきっかけに足腰が弱り、兄嫁に食事の世話をしてもらうようになりました。5 年前私も夫の定年を機に近県に引っ越しましたが、兄嫁が母を見舞っても良い顔をしないので近くても何もしてあげられませんでした。食事も年寄りだから少しでよいと母の部屋にお皿に 2・3 回届けるだけ。間食は一切なしでした。
嫁の世話になることに恐縮していた。父母は特に母は病気になって自宅療養は不可能になり、病院から施設へ移されていった。施設での母は悲しんでいた。(たたかれたりぶたれた。つねったり、意地悪い行為や言葉に涙していた)特にオムツ取替え時に意地悪くなって、身体を小さく縮めていた。田舎の兄夫婦に世話になるので、兄弟は母には我慢を強いてしまった。母は病気がちで嫁とのことで自殺行為をしたため、兄嫁さんには面当てだと怒鳴られ、より嫌われていった。
老後は仕事を辞め年金と貯金で、父と二人で隠居生活を送っていた(畑や花を造ったりしていた)。86 歳の時、検診で肝臓が悪いと指摘。以後、病院通院をするようになる。体力もなくなり入退院の繰り返し。父がなくなった 3 週間後に意識が低下し永眠する。急に状態が変化し病院側の治療法(鎮痛剤の投与量)などに不満、疑問を今でも感じている。意識がなくなっからは、看護師が訪問する回数が少なく(状態に合わせてではなく)不満があった。
脳梗塞で麻痺が出て、何回か脳梗塞を繰り返し、最後は 1 年くらい入院して病院でなくなった。
母は 96 歳まで姉の家で過ごしましたが、少しボケが始まり手をやくようになり、ケアルスに入居しました。それまで母はそのケアルスに週 1 回デイケアでお世話になっていましたのでお友達も出来、慣れるのは早かったようです。私達は 3 人姉妹ですので毎日ケアルスに誰かが行ってました。とても素敵な建物で、食事もよく、介護される方もとても親切で感謝していました。時々とか面接に来られた方が文句を言って帰ってありましたが、私達は 1 日おきに行っていましたので、介護士さん達がどんなに大変かをつくづく思っていました。
高血圧、不整脈があり、抗凝固剤と血圧降下剤を服用していた。突然、脳出血を起こし、ICU に入ったが 3 日後死亡した。

<p>36歳の時、5人の子どもを残して父が他界しました。その後、女手ひとつで5人の子どもを立派に育ててくれました。大きな借金を抱えて昭和40年頃の苦勞は口では言えないものと思います。子ども達がそれぞれ独立し、母一人で、町営団地に住み、細々とでもゆっくりとした生活が何年続いたでしょう。68歳の時、交通事故で頭部打撲、大腿骨頸部骨折受傷。その後、入退院の繰り返しでしたが、最後3～4ヶ月後は痴呆が少しづつ進行してきましたので、辛さや悲しさが判らないこともあったようです。最期、長期療養型HPで皆様方に可愛がられ、脳出血でした。</p>
<p>一人娘で育った母は世間知らずで、でも昔の女学校をでて習い事もきっちりやっていた。土族の出で、とても人が良かった。心臓弁膜症と高血圧の持病を持ち、無理のきかない母でしたが、父が失明してから私達を女手で頑張って育ててくれました。晩年は入院をし、弟夫婦が面倒をあまり見てくれず、妹がこまめに毎日病院に見舞いに行き、親孝行してくれました。最期は誰も居ないとき、食物を嚥下して窒息で他界し、可哀想なことでした。冥福を祈るのみです。</p>
<p>母は結核の既往があり、病弱であった。心疾患、動脈硬化で長期療養6年、入院中に朝食をのどに詰まらせ1週間意識不明の後、そのまま死亡する。</p>
<p>病院で10ヶ月入院し、その中で手術をし、5時間の手術に耐え抜き大変頑張りました。本人は絶対に元気になろうと精神力がありました。</p>
<p>風邪気味で近所の医院に通院。二ヶ月くらい通院しても治らず、X線と点滴をするのみ、おかしいと思い大学病院に紹介された。白血病といわれ2週間しか生きられないとも言われ、痛みだけ取って欲しいとお願いした。けど、実験台にされ、24時間点滴で2ヶ月の治療代が500万円かかった。今でもいかりがある。母は2ヵ月後に亡くなった。</p>
<p>私が4歳の時(昭和19年)病気で死亡。後日、結核で死亡したことをしりましたが、今思うと当時は薬もなくいたし方なかったのかと思った。</p>
<p>倒れて頭を打って病院で(3日)</p>
<p>母も77歳のお祝いをした時まではすごく元気でした。1～2年後、骨粗しょう症になり通院、腰があっという間に曲がってそのうち、寝つきました。母は自宅での最期を望んでいましたが。その事だけは叶ったようです。医療関係者に不満を感じたことはありません。</p>
<p>一人で働き、父の面倒を見ながら生活しておりましたが、突然倒れ、入院。肝臓がんで約一ヶ月の入院生活の後、病院で亡くなった。病院では一生懸命の看護をしていただきました。生前より、延命処置だけは望んでおらず、自然に任せたかたちで本人(?)の意思どおり、私が先生の勧めをお断りした。</p>

48歳までは元気で暮らしていましたが、更年期障害にて血管のつまりを検査するため個人病院にて脊椎より麻酔注射され、そのまま下半身が麻痺になり、私達一家が里に帰り、一緒に暮らし、妹を嫁がせ、母は時々訓練のため、病院に入院しながら7年間位。病院には色々不満をいただきました。最後の一年間は上半身もあまり動かなくなり、父が入院させ、一日中介護をしなくてはならなくなりました。

今考えると0 - 157ではなかったかと思います。突然嘔吐で入院。その後熱が出て意識不明になり、あっという間に亡くなってしまった。

子ども達が家を出、後に妹と二人で何不自由なく親子二人暮らししておりました。ところがある時、足が不自由な母はこけて、股関節を折り、入院したら何かそれらしい病状があったのか結局は肺癌とわかりこの世を去りました。

その1週間前には孫の保育園の豆まきに出るほど日常生活全般何の心配もないような状況でしたが、2月初の大雪の早朝外に出て(寒気の由もあったのでしょうか)「苦しい」と言い「寒い」と言って寝たのですが、大雪のためすぐに車が出せないため、病院へ行くのが遅れてしまったかなと思います。救急車も呼べず、心筋梗塞ということでした。入院したその翌日亡くなりました。

母は若くして未亡人になり、5人の子どもを育ててくれました。とても元気な母でした。大きな病気もせず、本当に90歳を過ぎてから一寸足が衰え1年4ヶ月入院しました。老衰でした。

一人住まいで91歳のとき股関節を骨折し本人が病院へ行くのを嫌がり、そのまま自然に骨がついたけど歩くことはできなくなり、はって1年半ばかり過し、脱水状態で入院し、50日ぐらい入院して心不全で92歳で亡くなりました。

母は私の小さい時代より酒造り会社に勤めており(さつまいもけずり)、6ヶ月間位 定年になり(乳がんになり手術)、私は大阪での生活より田舎に引き上げ2週間くらいで母が他界。父は一人暮らしになる。

母は実の姉の看病で無理をして倒れてしまい、もともと肝臓が悪かったそうですが、本人も知らず、体調が変と思いながら病院へなかなか行けなかったそうです。母はとても我慢強い人でした。姉と一緒に病院へ行き何年か入退院を繰り返しました。治療のことで担当医と何度もぶつかったそうです。でも信頼していたようです。病院はずっと同じところでした。姉も私には心配させまいと何も話してはくれませんでした。何回か病院に行きましたが、私も何日も家を空けられず姉に頼ってしまいました。私がたまに行っていたのですが、姉の方が良かったみたいです。

夫の働きで生活し、普通の生活をしていた。病名ははっきりしていない(自分が都会で過ごしていたから)が、入院して輸血をして徐々に体力の低下があり、家の中で過ごすことが多かった。56年頃から徐々に肝臓が悪くなり、入院治療後、療養生活約1年。肝硬変、肝癌で死亡。

自分のことより家族皆のことを考え、子や孫を可愛がり、兄嫁とも仲良くしていた。兄弟が多く、正月には配偶者や孫達が集まり、皆から慕われていた。几帳面で掃除が良く行き届き狭い家ながら気持ちよく過ごせるように気を配っていた。体の変調をきたしても我慢していたらしいが、家族が気づいたときは手遅れになっており、即入院となった。入院中も、毎日誰かが見舞いに行き、寂しい思いをさせないようにしていたが、次第に弱っていき、夏の暑い時期に亡くなった。

自宅で TV を見ていたりゆっくりした生活を送っていた。亡くなるその日の PM まで普通にしていた。気分不良の訴えあり、病院に連れて行き、数時間後には永眠される。医療従事者に不満なし。